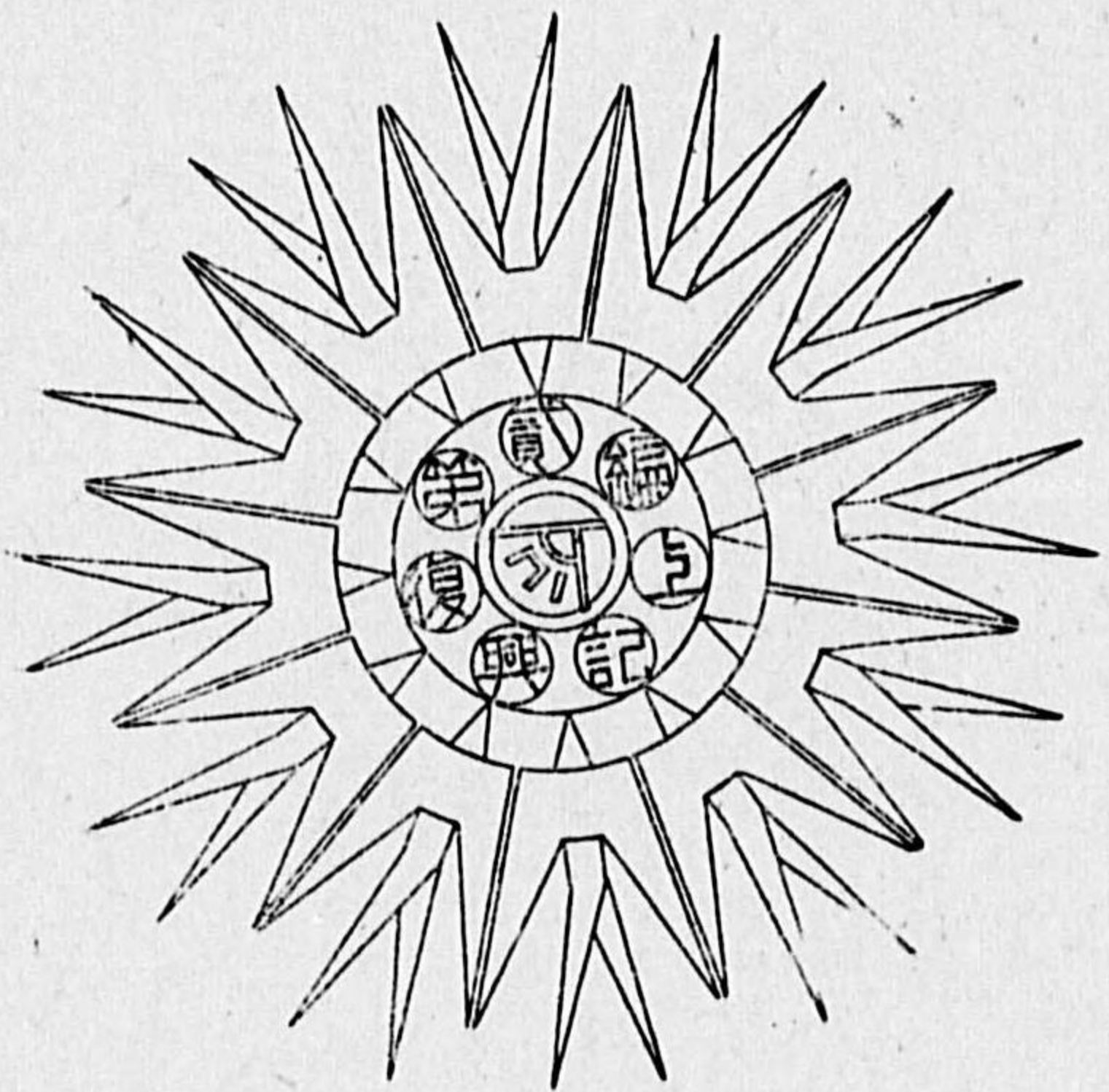


戦争最中、何でも昭和十八年から九年にかけて位るとき、法隆寺と東大寺とは早晚必ず爆撃されるとか、さういふ工合に亜米利加で豫定ができてゐるとか、或は又、京都では同志社があるから寺町通の西御所の北の邊は爆撃しない様に、地圖へ赤線を引いたのを飛行兵に持たしてある。これは捕虜の持つてゐた地圖で判った。だから同志社から相國寺の附近は先づ安全だ、といった様な噂が相當あつたものだ。今から考へると、よくもこんなでたためが言へたものだと思はれる。が併し一時は可なり神經も尖つてゐた。法隆寺では、塔は修理解體中であつたから先づいいとして、金堂の上層をとり去り、東大寺では實行したかどうか知らないが、三月堂を解體して、どこかへ格納しておく事に決つたと新聞紙は報じた事があつた。併し米國に於ける識者の處置宜しきを得、京都と奈良とが無事であつたのは、洵に幸であつたと言はねばならない。

四天王寺が京都か奈良かに在つたのだと、當然戦災から免れてゐた筈である。大阪にあつただけに、其焼失は止を得なかつたので、何とも惜しい事だつたが今更致し方はない。あきらめるべきである。さうして灰の中から再び立ち上らなければならぬ。

(右八項、昭和21年1月8日追記)



本稿は昭和20年10月22日、復興原案を作成して四天王寺へ提出をしたので、一段落となったから、其邊で中絶せしめた。此からは更に他日何等かの方法を講じて、ともかくも完成せしめるつもりである。此所に記す「復興記」が途中でできているのは、右の理由によるのである。

昭和20年6月下旬。

好晴の日で、夕陽が一ぱいにさしてゐたある日の夕刻、突然四天王寺からD師が來訪された。用件は伽藍の復興に關し、小生の意見をきき度いといふ寺の意向であると申された。其日を記しておかなかつたので、今となつては判りかねたから、先日D師に伺つてみだが、さういふ事は一切記憶しない事にしてゐますと一蹴されて了ひ、取付く島がないから、止むを得ず未詳の儘にして置く。併したしか28日か29日ではなかつたかと思つてゐる。

今更愚見等を申上げないでも、皆様は既に立派な腹案をもつていらつしやるに違ひないから、其必要はあるまいと一時躊躇をしたが、お尋ねを受けた以上何か申上げないわけにも行かまい。併し餘り突然だから、暫く考へてからに致し度く、ともかくも私が寺へ行つて述べ、る事にした。さうしたら先方は成るべく早い方がよろしいと申された。

7月4日は米利堅國の獨立記念日で、其せぬかどうか知らないが、去年もやつて來た位だ

から、今年は十中九分九厘迄あやしい。3日と5日とは其前後で、勿論危険率は多いから、此等の日をやめると、2日を外せば6日といふことになる。夫ではちとおそ過る様だから、2日なら大して差支もなからうと考へ、其由を申出ておいた。

昭和20年7月2日。月曜日。晴。

今日は皆さんが揃つて待つてゐてくださった。併し昨今は無人ださうで、主な方三人だけ、即副住職のD師・他に高女校長のS師と會計部長のT師、本坊の茶室に集り、小生共四人、洵に和かな會合であつた。文字通りの愚見は確かに小生が述べたが、豫めD師の御高見として、「塔」及び「金堂」址の標識は是非何かほしいのと、引導鐘を吊る「鐘樓」がなければならぬのと、もう一つ「太子殿址に本尊安置の堂」勿論假堂でいいから建て度いと承り、同師と共に一應境内を歩いておいた。

(一)、塔址には、中間の復興案として、境内に散亂せる焼瓦を利用して「塔」を築造するか、又は新し

く「石塔」を造る。何れにしても塔婆の原型に近いものとする事。換言すれば印度式を加味したものとしてみたい。

「塔」ならば基礎及び塔身は、住職以下僧侶は勿論、四天王寺関係の信徒、高女職員生徒、其他大阪市内在住の人人の奉仕によりて築造の事。「石塔」なら石工に命ずるより方法なし。何れにしても將來本設計案により大規模の復興に際しては取除く事。

(二)、食堂址には其中央に塔・石・乃至セメントにて須彌壇を築造し、其上に石佛一軀を安置する事。

(三)、太子殿址には標木を樹つる事。

(四)、鐘樓は平安以前の様式がよろしからん。といふ理由は、焼失前の様な袴腰附のものは鎌倉時代以降と認められるから。

等であつたが、最初の二項に對しては皆さんは賛意を表され、第三・第四に對しD師T師から、太子堂址には再爆撃のあつた際、本尊の安泰に關する設備を施した相當の祠堂を建設する事と、鐘樓はやはり成るべく袴腰附のものにしたき旨述べられ、S師は沈黙を守つて居られた。

當時住職は不在であつたから、近日歸寺を待ちて正式に決定し、改めてD師から、自分が

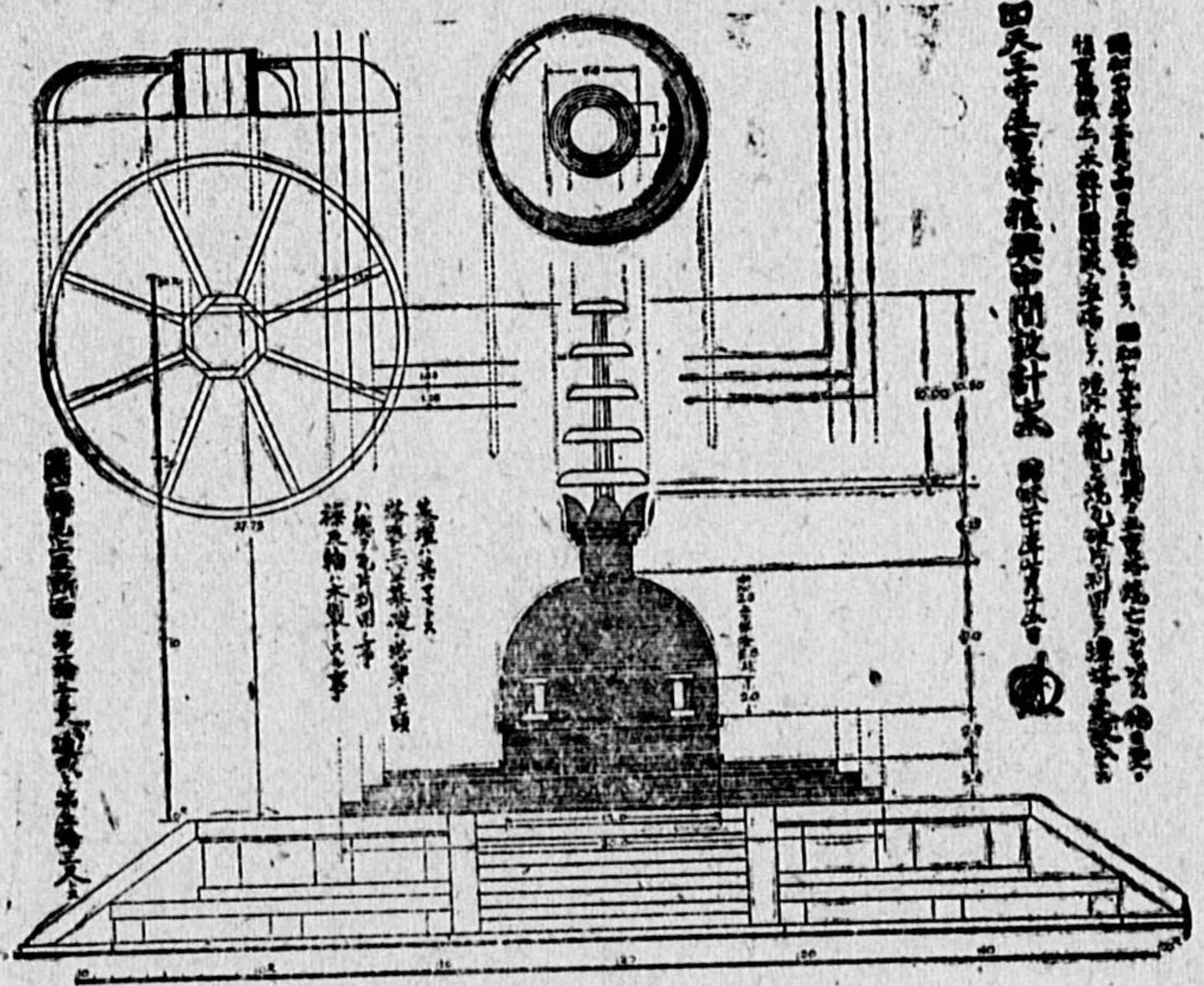
京都へ出かけて行つて、面會の上口頭を以て囑託をする事にするとこの事で、十五時頃でもあつたらうか、此日は解散をした。

此日の「新京阪」は全くどうも一度で恐れ入つた。可なり以前からいつも割合にすいてゐて、樂に乗れたから此時も同様と心得、京都迄の切符を買つてみたら、直に得られたから、改札口を出たところ、京都行は「十三」乗換といふ掲示が出てゐた、今更引返してみたとこゝろで、徒らに賃金を會社へ奉納するばかり、進退谷まつて往生したものの、乗降場には随分多くの旅客が行列をしてゐたので、腰を掛け得る見込はないから一つ待つたら先頭になつた。次發には容易く席を得らるが、一つ行つて乗換のため下車した。此驛にゐた京都方面行はおそろしい様な人數で、整理もできない有様。仕方がないから日のカンカンあつてゐる乗降場に、夕陽に向ひ約20分立つてゐた間に、漸く來た二輛連結の車は「淡路・十三間」折返し運轉のもの、例ひ三輛四輛連結でも、とても乗せ切れない位、刻刻人は増すばかり。随分待たされたのだから、是非乗り度いが、其混雑言語に絶し、工員らしい戦帽を冠つた若い男の一

團は喚聲をあげて出入口目がけて殺到し、順序も何もあつたものでなく、後ろから突き飛ばされ、車内の床に轉んだが幸に怪我もせず、更に「淡路」でまた超満員、乗れたのが不思議な位。無論「四條大宮」まで立往生。更に市電もうまく行かず、夫でも幸に掠傷一つ負はず辛ふじて帰宅し得た。併し随分無駄な時間を費した上に、つかれも相當にひどかつた。

何とかしないと終には生命に係りさうだから、正當防衛の方法を講ずるべく研究を始めた。省線もあるにはあるが、切符發賣時間に制限があり、我我の様な物の數に入らない微塵子級の人間は、勝手な時に乗れないから、奈良經由より方法がない。これとても夕刻の混雑時が思ひやられる。だから寺へ一泊して、翌日のひる頃、最もすいてゐる時分また奈良經由で歸途に就く。此より他に危険防止の方法はないらしい。これは私としては大發明である。若し正式の囑託があつたら、第一に「自己保存案」を提出し、通過を要求するつもりである。

然るに7月10日の天王寺局の消印ある速達便を以て表向きの依頼があつた。行くつもりであつたが、何分多忙の爲、出かける事ができないから、略式であるが郵便にしたのださうである。端書へ認められた簡單なものであつたが、こちらは判りさへすればいいのだから、早速お

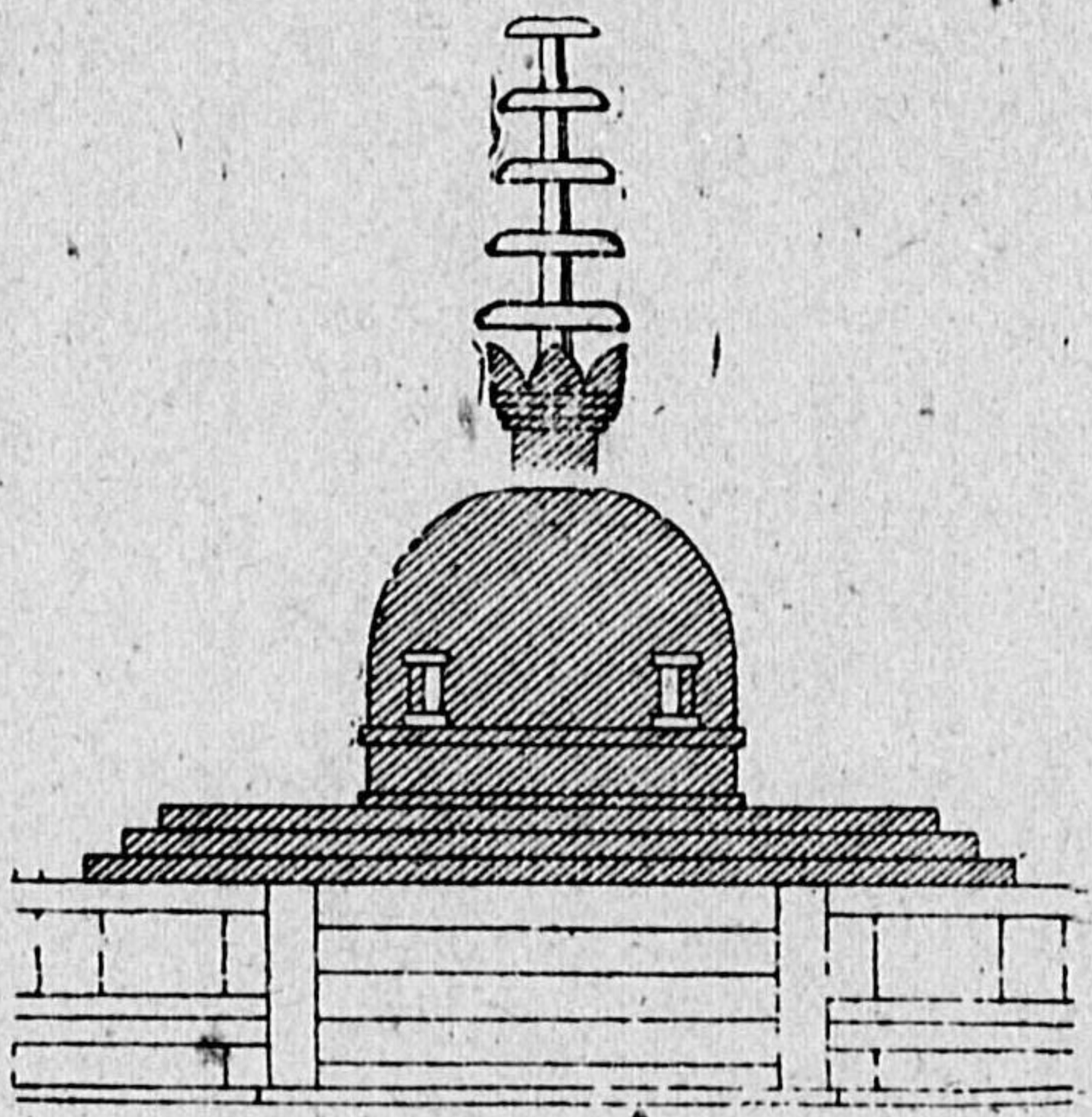


四天王寺の焼失と復興
設計家 藤田 吉太郎
焼失した塔の復元設計案
藤田吉太郎氏より

九九

寺ではとにかく塔がなければならぬが、いまは到底どうする事もできないから、取敢えず何か中間設計とでもいった様なものを建設しておき、他日更に本設計をする様にしたい。 いては其形を考へてくれとあつたので、印度式の塔を日本式にしたもの、つまりスツパの様な型のを焼瓦の破片で積めばよからうと思つた。夫で此の圖をかいてみたのである。

我國の塔の説明をいくらしても、中中大衆には了解がしにくいらしい。焼瓦を積めば奉仕で塔身は出来るし、同時に塔の本體も一般に判るであらう。



一〇〇。 前頁に掲げた私のきたならしい製圖を、毎日新聞社が寺から借りて行って描き直して凸版にとり、使用後は寺へ持って来てあつたのださうな。夫を借りてここにだして記念にしておいた。

うけをして15日迄に原案を作成した(九九)。此頃まるで圖なんか引かないから、たまに鳥口を持つと、視力の衰へた結果其先が二つに見えたりして、思ふ所へ線が引けず、頗るチムサイものになつたが、夫は仕方がないと、誰れでも判る様に、圖にいろいろの記入をした。

7月26日。木曜日。好晴。

本日漸く四天王寺へこの圖を持参した。實はもつと早くすべきであつたが、都合で行けなかつたし、此日も豫告なしに出かけたので

ある。「圖案はできました。いつ行きませうか指定をしてください、だが勝手ながら日曜日は避け度いです」と照會したが返事が来ず、先方はどう間違つたのか、7月22日、即私が避け度いといつた日曜日に、行くと思つて皆さんが待つてゐてくださったさうだ。こんな行違ひはこちらでは判らない。いつ迄待つてゐても返事は来ないから出かけたのである。ところがT師は不在で、D師とS師と居られ、異議なく可決、8月に入つてから着手といふ事になつた。此塔婆の復興實施中に金堂址に適當に須彌壇の築造をなし、太子殿と鐘樓とは更に協議の上、中間復興圖案を決定して、萬遺憾なきを期する事にきまつた。

用件をすまじなり、私はD師へ「正當防衛自己保存案」即「一泊案」を提出した。次回から實行をして戴き度いといふのである。決してつけ込む等といか悪意は毛頭ないが、困るから困るといふのであると申したところ、如何にも尤も千萬だから、さういふ風に決めることあり、提出するなり即決はまことに好都合で、これで毎回安心し、ゆつくりした氣持で出かけられる。

昭和20年9月初旬、不圖新聞紙上、令息の名で、舊友片野實之助君の逝去を報じ、時節柄近親のみで葬儀をすましたといふ廣告を見つけた。片野君は私と同期の中學卒業生で、其年に神田一つ橋の高商に入學、優秀の成績を以て卒業し、直に文部省留學生として白耳義國安土府に滞在、やがて業成り歸朝、山口高商の教授となつた。後、大阪市に移住し保險會社に入り、専攻せられた學問の應用に敏腕を振ひ、押しも押されぬ存在であつた。

昭和20年7月初、やはり中學同期の一人なるK君の右京區太秦森ヶ前町の邸宅に於いて、主として故片野君斡旋の下に同窓會を開いた。K邸は宏壯だからといふのでさうしたのださうな。此時集つたもの三人。一人は中京三條大橋附近のH醫師、一人は小生、何れも京都市に住んでゐるが、大阪方面（當時牧方町星ヶ岡住）から來たのは片野君だけ、御主人のK君と合計無慮四人が、東京府尋常中學校時代に返つて楽しく半日を過した。片野君はいつもこゝろいふ事を周旋するので、常任幹事にしておかう。どうも君でないと、今時席料も會費も只奴のこんないところは見付からないから、といふ様な和かな會合であつた。

我我四人の内、H君が七十一歳、あとの三人は何れも七十歳。さすが醫者で養生がいいのか、最年長で最巒嶽、齒は一本もぬけてゐないさうだ。K君と小生とは總義齒。片野君は處まだら、夫でゐて形容頗る枯槁、氣のどくな程衰弱してゐる様に見えた。どうしたのかと思つたら、郊外電車へ乗る時、後ろ

れら突き飛ばされて、一度は二輛連結車の間にひっくり返され、背骨を打って起き上れず、従業員にたすけ起して貰って、やっと歸る事ができたが、其時以來どうも具合がわるい。もう一度はそんなひどく轉ばされはしなかつたが、とにかく二度だからといった。あぶない事である。さうして今日も實はそんな事で心配しながら夫でも一人で出てきたと。

其夜は高商出身の人人の斡旋により嵯峨方面で一泊するといつて、歸りに電車への所をみたのが最後であった。逝去の眞因は何か知らないが、どうもこんな不慮の災難が遠因ではあるまいか。何れにしても此頃の郊外電車、古今未曾有の雑沓、實際乗るのは生命がけである。餘事ながら書いておく。敬て片野君の御冥福を祈る。

(此項昭和20年10月5日挿入)

復興圖案解説

私はここに何故に五重塔の復興中間設計として、九九に掲げた様な圖を引いたかに就いて、簡単に解説をして置かうと思ふ。我國にこそ塚塔の塔は現存して居ない様だが、昔はあつたかも知れないし、又昔から無かつたにしても、朝鮮には可なり立派な、相當に古いものも残つてゐる。旁此際焼けて碎けた瓦を利用し、塔婆の本体なる伏鉢型のものを、貫主初め一山の僧侶は勿論、關係者全部・高女生徒・罹災死者及び大東亞戰死者遺族・市民篤志者等、例ひ一瓦片を積むとしても、大に意義があるし、ま

たこの様な型式のものなら、本設計に取かかるまでに破損すれば、いつでも直に修補する事ができる。瓦の目地は白くしたい。石灰がなくば仕方がないから胡粉か白墨を塗つておくつもりである。ただ相輪だけは素人がよつてたかつたのではできない。これだけは其部度大工に造らせるつもりである。

昭和塔の中心柱は懸垂式にしたが、下に大きな立派な石をおき、中央に穴をつくり、其穴に貴い舍利を収めた金銅の容器を格納し、上に厚い石蓋をした。塔其物は焼失しても、舍利は容器と共に安全である。此を中心として塚塔を建築すれば、例ひ塔は小型としても、周圍に障礙物がなければ、遠方からでも舍利安置の所は直に知る事ができる。さうして舍利は殊に貴重なものだから、其上方に其表示として天蓋を上げるのは、當然過る位當然である。我國では特殊の例を除き、古來輪數を九個とした、故に「九輪」といふ。

此塚塔にも、下に舍利が安置してあるのだから、相輪は必要である。併し輪數を九個としては多過ぎる様である。といつて一個や三個でも、差支はないが、これでは少な過ぎはないかと思はれたので、五個にしたのである。私はこの五個の輪を塔身と比べて適當と考へた大きさと間隔とをもたせ、其形も然るべくきめ、「五輪」を以て「五重塔」を表示せしめたつもりである。

印度・尼婆羅・錫蘭等に現存の塔婆は、何れも其規模の莫大なものがあり、形式は地上に伏鉢型を積み上げ、上に相輪をあげてある。殊に尼婆羅國のは、修理後間のないせぬか、塔身は白色に、相輪は金

色燦爛として、其美しき事例ふるにもなく、時に相輪頂上より八方に、小型の旗を結びつけた綱を引いてあるのは、我國塔婆の一種なる多寶塔相輪上方より、四方の隅降り棟の先端に引いてある「鑽」及び其鑽から下げた「風鐸」の元と考へられ、洵に興味のつきないものがある。

此印度式塔婆が、方形の基壇上に建てられる様になり、相輪も追追發達して其數を増し、時に規模の左程大きくないものも出現し、後支那から朝鮮を経て我國に傳來し、ここに特殊の發達をとげ、遂に三重又は五重の方形の木造構架の頂上は、これも亦特殊の型式のものに變化（考へ様によっては退化ともいへる）し、最上輪の上には更に「水煙」・「龍車」・「寶珠」等が付き、遂に今日國內各所の寺院に於いてみる三重塔・五重塔になったのである。

故に今回の中間設計として提案した塔婆は、我國塔婆の元なる、つまり現存の塔の頂上の金屬製の部分、即ち「露盤」から上を地上においたと見ればよろしい。昭和二十年八月十一日の朝日新聞紙上に「同塔は五重塔が地中に埋もれて九輪だけが地上に現はれてゐるといった形を表象するもので……」と書いたのは、甚だ簡明でこれなら誰人にも判るだらう。但し「表象するもの」はいけな。表象をするのではないから、「形で」とすればよかつた。

此相輪は八角の心柱と共に黄色のペンキ塗りとするつもりである。金箔を置き度いが、さう行かないらしいから、透間などにはパテを詰め、上から代用としてペンキ塗りしておくつもりである。尤も輪其物は幅を八本とし、内側も「うつろ」にして、重量を輕からしめると同時に、金屬製を偲ばせるつもり所、手間がかかるのでどうも工合が悪いから、圖案左上に出してある相輪詳細圖は、これから造らうとする形とは少し異なつてゐることを断つておく。

塔の本体は「伏鉢」と「相輪」とで、舍利は「平頭」（ヘイトウ）。伏鉢上の立方體の部分か「伏鉢」かの内に収めるのだと、いくら説明しても中中一般の方方に御了解が願へない。そこで今度、この圖案の様なものができれば、恐らく參詣の人人からは、妙なるものを造つたが、一體あれは何だ、といふ様な質問も出るだらう。そこで初めて其人々にいふから「塔」といふものは、どの様にして今日の形になつたかといふ事も判つてくるであらう。私としても敢て面白半分によつてみるのではない。

塔身は崩れる事はあるまいと思ふが、長期間このままであれば、相輪は木製だから腐朽するかも知れない。さうしたら随時造りかへるまでの事。ペンキが剝げれば勿論塗りかへるのである。

8月1日にはD師から速達郵便が來た。それには日附がなかつたが郵便局（局名はどうして「天王寺」の消印は29とあるから、4日目に配達されたのである。夫によると8月2日に來て局らしい）

くれ、だが空襲でもあつて来られなければ3日でも、或は初に日をきめてくれてもよろしいさうである。ところが私が先日特にD師に話して来た事が、どうも徹底してゐない様に思はれたので、これではとても駄目だから、2日には何とかして是非大阪へ行き、金剛建築事務所には設備があつたらうから、腰を据て110位の圖をひき、こちらの腹を決めて了ふことにした。

8月2日。木曜日。好晴。

警報も出ず、世の中も先づ静かだから、此分なら大概途中停滞の心配もなささうなので、七時二十分に出發、市電で「上九」(上本町九丁目)へ下車すると同時に「警警」が出た。もう併しここ迄来れば大丈夫、寺へ着いたのが十一時二十分頃で、四時間を費したが無事に目的地へ達したので安心することができた。D師に面會するなり、挨拶もソコソコ劈頭第一に「先日

私が申した事は、どうも徹底してゐなかつた様で、これではいつ迄たつても埒はあきませんから、今日午後金剛建築事務所(製圖をする設備は無論)へ出かけて製圖を私がやります。若し出来上らなかつたら明日午前續けます。尚ほO君(建築事務所社員の一人)に遇つてよく私の意志を告げ度く思ひます」と申出したところ、私の話し様が例により例の如く拙かつたので、D師はさうは考へて居られず、ともかくも出かけたのは決して無駄ではなかつた。

併し金剛建築事務所は、時節柄蒸暑く殺風景極り、焼け出された假事務所で何とも致し方がないから、「ここ」の方がよからう、とO君が主張したので、さういふ事になつた。「ここ」といふのは本坊附屬の例の茶室である。夫は申分のない事はいふ迄もないが、製圖板を初め何から何迄運び込まなければならぬ。併し心配は無用であつた。といふのは製圖板なんか一枚もない。寺務所の机の上に、厚硝子板をのせ夫を圖板の代用たらしめ、ともかくも何とかして製圖の眞似事はできる様な事になつた。

製圖用紙として、包み紙のハترون紙を代用し、ゴムも鉛筆も製圖用のものを得られず、消せば紙面がけば立つばかり、下が硝子板だから分廻はしの針がたたず、ともすれば迂る状

態。夫でも漸くにして箱入の製圖器械一揃と丁定規と三角定規があつたのが不思議な位の有様で、金剛事務所では罹災後、ソナモノの補充どころではなかつたさうである。私としても時節柄洵に申譯のない次第であるが、此頃は一定の職業なく、遊食の民に墮落して少なからず惰眠を貪り、夫がつい癖になつてしまつたのだから、暑い夏の日の午後、かかる状況の下に立つたまま三時間半製圖を續け、十七時半になつて一通り出来上つた時は、實はヘトヘトになつた。恰も其時中位の熟した蕃茄二個を皿にのせて持つてきてくれた。美しい赤い色をした半透明の食べごろのものであつたから、直に頂戴に及んで、空腹と渴とを一度に醫することができ、やつと一いきつけて心神爽快を覺えた。150に引いたものを110にすると、心柱と相輪とは、其割合で引伸したのでは到底ものにならない。それが可なりやつかいであつた。

8月3日。金曜日。好晴。

午前〇君に塔婆の中間計畫圖を見せて詳細説明した。各輪の形は東大寺灌佛盤を伏せたや

うにしておいたが、〇君曰く外側も内側も見える様に造るのは餘程手間がある。私は輻を八本にしておいたのに對し、夫を倍の十六本にし、且つ下端へ板をはつて見えない様にすれば、大分助かるさうである。きいて見れば如何にもさうである。其他いろいろ懇談の結果、其形がともかくも圖の様なものになりさへすれば、輪其物の構造はどうでもいいとして全部先方に任し、下端には三分か五分位入つたところに板を貼る事に決めた。同君はできるだけ手間のかからない様に考へるといつて分れた。尙ほ見積書は〇君の手で作成し、八月五日の信徒總代会迄に寺院當局へ提出する事になつた。同時に相輪の第五輪の一部分を見本として作成し、出来と同時に私が見に出かけ、其機會に太子殿・鐘樓等に就ても寺側と協議する事になつた。

以上で今回大阪行の用件全部がすんだ。十二時十五分辭去、再び奈良經由京都へ、歸宅したのは十六時半、無事往復ができた。

8月2日の夜は暫くで此茶室へ一泊した。夏泊つたのは初めてである。去る昭和16年2月

9日朝、當時大阪放送局から毎朝放送してゐた「社寺巡」で、此朝は四天王寺の番に當つたため、三十分間を三つに分け、私は僅かに八分間で塔の話をすべく割當てられたが、何分冬の朝早くではとても京都から出かける事はできないといふ理由で此部屋へ一泊、翌早朝中門の邊へ臨時に設備をした擴聲機の前へ立つて義務を果し、直に北陸方面へ見學旅行に出かけた事があつた。其時以來だから正に五年目で、暫くといつても差支ない筈である。而も周囲は一ぱいに樹木が生ひ茂つてゐるから、電燈には黒い覆がしてあるだけで、障子を外しておいても燈火管制違反にはならないさうだし、幸な事に警報は出ず、夜は來訪されたD師と共に寺務所員M₃君の蒐集整理になる數十冊の畫帖を見せて戴いた上に、一一同君の説明を聴き、時の経過を忘れた位であつた。

此等の畫帖たるや、大さ約一尺三寸に九寸五分の厚手の紙に各地の風景・風俗・習慣は勿論、官私記念の端書・切手、汽車・電車・乗合自動車の切符、各種入場券・廣告票・汽車辨當の化粧覆紙・マッチの貼紙、其他ありとあらゆる種類のものを各一冊づつ別別に綴りたるもので、薄さの一寸、厚いのは二寸に近いから、持運びは可なりやつかいだが、全國のを

合計すると七八十冊あるさうである。大阪の分だけでも、各區大觀一冊づつは、目貫きの場所が殆んど全滅した今日此頃、何物をもつても代へ難い貴重品である。

M₃君の説明する所では、此種の畫帖は雜誌等をつぶして貼るのであるが、表裏に圖がある場合には——大阪はさうだから——二冊つぶさなければならず、其上に手許に完全な雜誌を一冊づつ必ず保存してあるから、つまり同じものを三冊買はなければならぬさうである。其上に時には圖を貼つた上に硫酸紙の覆ひをして、其紙に凡そ世の中にこれより美しくは書けないといふ位の小さい綺麗な文字で、原本から解説を寫してあるが、字の書き誤り等は絶對にないから、従つて消して書き直した跡もない。これだけにするのにどの位の時間をかけて居られるか、我我には殆んど判らない。新聞紙の切り抜きにしても、私の等はただ切り抜いて貼つておくだけだが、M₃君のは夫等の周圍に何れも丁寧に輪郭が墨でとつてあつた。M₃君は實に不思議な存在である。私は醫者ではないが、あの病氣は到底治癒どころか、快方に向ふ見込はないと診斷して宣告したら、笑つて肯定されたのをみても、御本人もとうにあきらめて居られるらしい。

兩氏辭去されたので就床、終夜天下泰平で快眠を食り、8月3日早朝起床、幸に此日も好晴であつたが、其せぬかクマゼミの騒然たる合唱が、八時頃から約二時間餘りも間斷なく續いた。數はさう多い事はないと思はれるが、何分頃合の樹が茶室の近所に集まつてゐるからであらう、蟬は何れもそこへ來て耳のはたで鳴いた。「蟬時雨」といふ言葉がある。これは蟬の種類によつて適當の形容であるが、少なくとも我國本土に於いては、クマゼミの場合には全然當嵌らない。正に「大雷を伴ふ覆盆の沛然たる大驟雨」ともいふべく、其最も盛に鳴き立てる時は、實際呼吸も困難になり、頭も變になつて、考へ事等思ひもよらなくなる。いくら鳴くのが種族保存上、必要にして充分な條件であるにせよ、少しは遠慮しろと言ひ度くなるが、併し蟬から見れば、南北の御堂を初め、あらゆる神社佛閣が焼亡した今日此頃、大阪市内でこの位樹木の多い絶對安全地帯は、恐らくここだけであらう。公園等ではいたづら小僧のため一刻も油斷ができないし、個人所有の大庭園にしても、子供でもゐればやられる虞が多分にある。ここは蟬にとつては全く美しい樂園である。うるさいと思ふなら、人間の方で避けるのがほんとうかも知れない。

8月11日は、當日の朝日新聞と、不配であつた前日即10日の毎日新聞とが同時に配達された。だから毎日には登載してあつたかどうか判らないが、朝日は第二面に四段ぬきに輪郭をとり、二號で「瓦で土饅頭の如く」、其傍に四號くらゐの大きさの太文字で「天王寺塔跡に塔塔建設」と見出しを置き、中間設計の圖案を凸版で入れて紹介がしてあつた。所が8月14日午後、15日戦災死歿者初盆追善供養を六時堂で催し、且つ藝能奉納をするから、夫を兼ね相輪の一部を見に来てくれといふ速達便が寺から來たが、其中に塔の圖案は11日の朝日・毎日に發表したとあつたので、不配であつた11日の毎日を漸く一枚入手してみたら、此方は「焼瓦を有縁の中で集積」、其傍に「四天王寺五重塔跡に塔塔建設」と、同じ大さと形式の活字で見出があり、いろいろ書いてあつた。此等兩新聞の記事を併せ、少し餘計な部分を引去るとよく判る。兩新聞の挿圖は全く同大であつた。後に聞いたのでは、私の原圖(九九)を毎日新聞社で持つて行つて引直し、凸版にして朝日へ貸したので、兩方共同のものになつたのださうな(100)(第五〇八・五〇九頁挿圖及び第五一二頁より)。(第五一五頁迄に掲げた「復興圖案解説」参照)。

私は甚だ迂濶極つた次第で、何とも申譯はないが、世の中の情勢の變化等は全然知らな

つた。宣傳を重ねてゐた14日が、我國開闢以來の14日、日本國民が一日として忘れる事のできない重大な14日にならうとは、否なつた事等は、實際少しも知らないで、15日には警報が出ないでくれればいいが、さうしないとまた豫定が狂ふ。出ても仕方がないけれども、少なくとも先方へ行つく迄、空襲警報が出なければいいとのみ考へてゐた。

8月15日。水曜日。晴。

今日は無事であつてくれればいいと思つてゐたのに、早朝「警警」が出た。間もなく米機が京都上空から降服勧告のビラを撒布した。こんなだつたから心配はしたが大概よからうと思つて出かけ、幸に「空警」に進轉せずすんだとみえ、途中故障なく十一時半頃寺へ着いた。ところが集まつてゐた人人が、まだ早いのには辨當をたべたり、立つたり坐つたり、どうも落着かない。M君は私に辨當をすましたかときいた。何の事か何が始まるのか、見當がつかかねた。會々大毎のUさんを見かけたので、今日はどうかしたのですかときいたら君は

何も知らないのかといふ様を顔をして、言葉短かに話してくださつた。成程これでは九輪の一部どころの話ではなく、寺でも追善供養だけにして、つい今しがたまで寺務所の一部で、師匠と共に練習をしてゐた奉納すべき藝能の奉仕者迄、全部中止となり退去した様な次第であつた。だから朝出た「警警」も「空警」に進展しないで、途中で消えたのか無事に寺迄行けたのも、成程と思はれた。

3月14日には伽藍が焼かれ、満五ヶ月目の8月14日の大詔を、8月15日に四天王寺寺務局の一室で承り、此日の午後六時堂で取行はれた戦災死者初盆追善供養の末席も汚さず、例の茶室で謹慎して過した。

前からの通知によると、九輪の一部は出来したのだから、ともかくも金剛組のO君は来てゐなければならぬのに、今朝から影も形も見せない。どうも不思議だ、O君が来なければ話ができないのだから、おそくとも来たら直に知らして貰ふ様に寺へ頼んでおいたが、結局駄目であつた。

8月16日。木曜日。晴。

朝から待つてゐたのに、午前〇君は遂に來なかつた。太子殿と鐘樓の復興に就いてD師と非公式に意見を交換し、午後早歸京した。あの塔の中間設計圖案は、恐らく各方面から非難攻撃。完膚無き迄に敲きつけられると覺悟をしてゐたのに、新聞紙上に發表せられても、案外世間が靜かなのが、實は不思議でならない。専門違ひの韻照級の人達は、國家多事の際そんな事どころではない、どうでもいいから知らん顔をしてゐる。勿論一般大衆は無關心である。そこで此方面の専門家や、趣味家の腹の中を臆測してみると、十人十色といふからいろいろあらうが、

- 一、拙くて問題にならない。筆を入れてゐてはきりが無い。一層考へ直さした方がよからう。
 - 二、先づこれ位から我慢しておかう。どうせ後でこわして了ふのだから、暫くの間の事だ。
 - 三、此は案外、割合に面白い。此際廢物利用もよからう。
- の三つ位を考へてみると、私はどれでもよろしい。とにかくあれで承認して貰へば、こゝら

は手数が省けて大助かりである。御破産で新しく考へ直すのは御免を蒙る。

8月27日。月曜日。晴。

26日の夕刻、何か急用ができたのか、「二七七」に來いといふウナ電が着いたので、幸に當方にさし迫つた用事もなかつたから出かけた。此日は初めから電車がうまく來なかつたので、河原町今出川の停留場でさんざん待たされ、七時半に家を出たのに寺へ着いたのは十三時であつた。此日は第五輪は殆んどできて居り、〇君も來てゐたので話は進んだ。割合に大きいのと重いのとに驚かされたが、思つたより形がいいので、これは大に満足ができた。但し下端にとる輪郭が、幅七分深さ三分では細過るから、一寸に八分にする様に訂正をしておいた。8月15日にも16日にも、〇君は來なかつた筈である。〇君の家は鳳オホトリ（阪和電鐵沿線所在）町にあるのださうで、爆撃で線路がやられたのか、交通機關が止まつて了ひ、電報は局で取扱はず、通信の方法がなく、止むを得ず其儘にしておいたのださうだ。飛行機の部分品の製作を金剛

組で引受けてゐたのが、あの様な際どうなるのか、其方の善後策で九輪所の騒ぎではなかつたのかと思つたら、さうではなかつたらしい。何れにしてもあの日は總てが非常であつた。

8月28日。火曜日。好晴。

此朝は九時三十分から〇君と一緒に塔址へ行き、新塔の基礎最下の分方 $30^{\text{尺}}$ ・次 $27^{\text{尺}5}$ 最上 $25^{\text{尺}}$ として三重の線、中央に塔身直徑 $12^{\text{尺}}$ の圓形を、小石を竝べ一見してその平面の大きさを、誰人も知る事ができる様、29日中に必ず準備をする様に話しておいた。といふのは30日午後、本坊に於いて、大阪市の新聞報道班を主としたる座談會をひらき、四天王寺伽藍復興につき隔意なき懇談をする豫定だから、私にも出席して建築様式材料等につき、何か案を述べてくれとあつた。此を辭退するのは卑怯と考へ、出席を承諾した以上、一同にせめて塔の平面だけでも、見ておいて貰つた方が都合がいいし、又さうしておけば、いつでも現場の仕事に着手ができる。

金剛組の柱石〇君は、十分に小生の意圖を呑込んでゐて、従つて思ふ通りにやつてくれる

ので、先年颱風後の復興の時同様、寺と金剛組と小生と、最初の第一歩から楽しく朗かに、一點の私心を挟まず、人の和は申分がないから、將來必ず無事目的を達し得られるといふ確信を以て、一意専心其方面に邁進することができると思ふと、洵に心中言ひ知れぬ喜びに満されるのであつた。30日には又復大阪行だが、間が一日あく事になつたから、例の通り晝過ぎに家へ歸る事にした。

此日の午前も前回と同様、茶室前の樹木で無遠慮に大聲を出し、競争で鳴立るクマゼミで耳は聾せんばかり、餘りうるさいので頭痛がしてきたらぬ。肝癢を起し下りて行つて樹木を振動させても、太いのはこたへないし、細いのは動くから、振ふと同時に鳴いてゐるのはやめて飛ぶには飛ぶが、近い枝に止まつて直に鳴き出す。とてもやり切れたものではない。多勢に無勢で結局負ける。油蟬もうるさいにはうるさいが、此庭には割合にゐない。少しやり始めてもクマゼミが鳴きだすと、とても對抗はできないのか、やめると見えてまるできこえない。だから「あの聲で露がいのちか油蟬」といふ古句は、ここでは通用しかねる。クマゼミは大型で、従つて聲量もたつぷりだから、夫で我慢ができないのだ。「やがて死ぬけしき

は見えず蟬の聲」。これはクマゼミの合唱に對する句に最適の様で、全くこの通りと感服をした。關東できく様な優美なヒグラシの合奏等は思ひもよらない。

往路に五時間半は恐らく特別に都合が悪かつたせゐで、復路は三時間半ですんだ。此時は二輛連結の車で、奈良終點ではさう込んでゐなかつたが、西大寺驛でおそろしい程詰込み、忽にして超満員になつて了つた。だから私の様な老人は、人竝に腰を掛けて行き度ければ、京都起點から奈良終點迄行き、更に奈良から大阪直通のへらなければ目的を達し得る見込は絶對にない。時間は三十分乃至一時間、運賃で四十錢無駄をする覺悟をしなければならぬ。折疊の腰掛は必ず持つてゐるが、立錐の餘地がなくて、ひろげる事のできない場合には何にもならない。省線其他郊外電車の大坂方面行のは、當分いろいろの制限があり、勝手な時に行つたのでは都合が悪いし、又乗換へが多くて困る。總てが元通りの世の中に戻る迄、私は大阪行は當分の間奈良經由にきめてしまつて、其通り實行してゐるのである。

30日の座談會は、何れにしても電報で知らせるといふD師の言葉があつたので、29日は朝から1日中、30日も十時迄待つたが、遂に電報は來なかつた。9月2日に速達便を以て會合はいつ開く見込かとD師へ尋ねた所、6日夕刻にM君が來訪され、D師が打電しなかつた理由をのべ、ある行違ひから先方でも私の行くのを五時頃迄待つたとの事で、多分電車の事故で來ないのだらうといふ事になり、寺では戦災死歿者供養の件につき懇談をしたのが主であつたから、私が行かなくとも大した不都合ではなかつたさうだ。D師の様な三面六臂眼から鼻へ抜ける鋭利俊敏な生れ附きでも、餘り御多忙だといふお忘れになる時もあるものと見える。此時のM君の話では、13日から以後ならいつでもよろしいとあつたから、然らば13日・14日とするか14日・15日とするか相談をしたら、14日・15日の方が都合がいいとの事なのでさう決めた。

然るに11日の薄暮にM君は再度來訪され、20日過ぎにもう一度新聞記者に集合して貰ふ豫定だが、其時ではどうかとの事で、早速さういふ事にし、ともかくも他に用事もあるから、14日には豫定通り行き、其時に確實に日を決める事になつた。尙M君は寺では早くほんの見

取圖式草案でもいいから、持つて来る事を希望して居るといふ意味の事を述べられたが、夫は中中さう急には出来かねる旨をお答しておいた。同君は歸りがけに「塔址へは十日に心柱をたてた」といふ事と、「鐘樓址は彼岸の準備として、假鐘樓を建て始めた。これは全く假だから」、兩方とも14日に見て貰ひ度いといふ事であつた。これは何よりの事。ここ迄進捗すれば、最早何の懸念もなく工事はできるであらう。ともかくも中間復興として塔が出来れば、夫をきつかけに惰力も慣性もつくから、あとはたとひ何十年かかつても、終には纏るだらう。斯様にして兵火に焼亡後、正に半年漸く前途遙かに一點の光明を認め得たのであつた。私は最早先の短い事は勿論覺悟をしてゐる。だから痴人の夢だといつて嗤はれるのは百も承知だが、萬萬一億倅でもう二十年も生きれば、或は新塔の釘初式に擔架に乗つてでも、列席の光榮を得るかも知れない、といふ工合に多少樂觀をする様になる事ができた。

9月14日。金曜日。驟雨頻回。

本日も奈良經由で出かけたが、切符の發賣人が男の子で全く不馴であり、算盤の引算さへろくにできないらしく、傍で女の出札人が釣銭の高を計算してゐるのが窓口から見えたり、動作は實に緩慢で、時間は無駄になるし、買手の方は殆んど一人残らず大きな紙幣で釣銭を要求する。お負けに途中からの割込や、發賣を一時中止したりで、奈良迄の切符入手迄に正に一時間半を要し、後れに後れて此日も四天王寺迄五時間餘りを費した。着した時は無論十二時半が過ぎてゐた。

塔址には心柱が建てられ(101・101)、鐘樓址には此秋彼岸の參詣人の便を圖り、ほんの臨時の樓が建てかけてあつた。金堂址と太子殿址とは標木が樹てられ。夫々筆太に

聖德皇太子御寶殿

金堂救世觀世音菩薩

と達筆で書いてあつた。隨所に焼けて碎けた瓦が一面に散布せる一望際涯なき曠野(西門即石所から生駒山脈の鳥居の全部見へる)の中から、雄雄しく復興する曙光は明らかに見えたのは、戦禍により不幸罹災して意氣銷沈、自棄の状態にある者に對して正に頂門の一針どころか、百折倦まず立上ら

うとする意氣を實物を以て示せるは、大に人意を強ふするものがあつた。M君は明15日中に藤井寺の悲田院から鐘を運んで、この臨時鐘樓へ吊るつもりといった。金剛事務所のO君にも面會して塙塔の事に就いて協議をした。九輪残りの四個は目下製作中であるが、夫よりも塔身四方の龕内に安置する四天王の種子を刻んだ石を至急用意して貰ひ度いとあつた。

塙塔120の模型を刳物で造らせる計畫をすすめ、奈良の刳物商を寺へ呼んでおいて貰つて、圖を見せて價を尋ねた。塔身と相輪とは文化塔に用ひた古槻材を寺から貰つてつくり、漆地として塔身は白色、相輪は箔置にする事。至極簡單なのだから、いくら今の世の中でも、高くて百圓位かと思つてゐたのに、彼曰く一個なら五百圓、數個なら三百圓づつとの事。餘りの高價に一驚を喫し、どうしてそんなにかかるのかと訊いたら、其返事は「此頃は米一升百圓します。奈良は工手間の割合に高い所です。せめて米一升買ふ位の金を儲けさせてやらなければ、働くものではありません」と。私は直に製作保存の考へを放棄したが、寺では或は一個位つくらせるかも知れない。併し何といつても餘りひどすぎるから、次回相談の結果どう

なるか判らない。

私が14日に寺へ行くことを、M君から遠齋居士に知らせたさうで、午後見えた。去る6月4日、朝粉河驛から一緒に汽車へのり、王寺驛で分れたきり、約百日位間であつたが。随分元氣がなかつた。居士は學問もあり修養も積み、殊に語學に造詣深く、罹災前は土一升金一升の船場で、何不足ない所か、飽食暖衣今日此頃充分立派な生活をして居られ、暮鹽組羨望の的であつたのに、お目にかかる度毎に頽墮委靡の度を増される様である。尤も第一回の時は何一つ持出す事ができず、せめて倉にあづた現金だけでもと思つたが夫も駄目で、全部焼かれたと御本人が仰しやるから、洵におきのどくに存じ、充分同情を表したが、夫が事實なら第二回目の6月7日罹災のときは、殆んど焼くものはなかつた筈である。併し池魚の殃も二度では念が入り過ぎるから、精神上の打撃は大きかつたらう。幸に罹災を免れた小生には、此點同情を表する資格はなく、いくら慰めてあげても、口先だけになつて了ふ處がある。二度ならず三度四度とやられた人もあるし、私のきいたのでは六度が最もひどい様である。さ

うすると何も居士獨り不幸に遇つたのではない。生存競争圏外に居られた今迄が、よすぎたのだと思召され、其上に御家族御一同が御無事であつたのが、何よりの幸と言はなければならぬ。第一回の罹災後、廣島市か長崎市あたりに親戚でもあつて、そこへ行つておいでであつたとしたらどうなつたでせうか。居士は今年還暦ださうだから、私より十歳も若い。此際屈原が汨羅で漁父と問答を始める直前の様な顔つきと態度とをやめて、心機一轉切に奮起を望んで止まない。居士は遇ふなり私におそろしく元氣の様だが、何かうまい物でも食べてゐるのかと質問されたが、冗談を仰しやつてはいけない。さう見えるのは空元氣の附元氣で、金がないから貧巷で【夜窓鬼談】の挿繪の様な貧乏神を相手に、長期に亘り、夫こそほんとうの聖戦を展開してゐる迄事、馬鈴薯一貫目四十圓甘藷同じく六十圓、砂糖は一斤百九十圓したのが三十圓になつたといふから、唯の三十圓かと思つたら上に百がつくのだと。最近には大豆一斗が四百圓といつた。こんな話をきいてゐるだけで、「闇」をする腕前は遺憾ながら持合はしてゐない。さらばといつて曲肱の樂なんて事を味はふほどの修養も積めてゐない。現在貧漢唯一の望は、大福餅と鹿の子餅とを鱈腹食べてから、あの世への安住が願望であり、

年中腹の減り通しだが、廣い世間には私以上の人もあらうと思つて我慢してゐるので、うまいものなんかあるのですか。

午後は驟雨が何度も降つた。居士は五時辭去された。夕食はD師の厚意で、同師の自坊で心盡しの饗應に預かつた。愛知縣の知多半島在住の令弟が来て居られ、國から土産物を持参したから、夫を食べさせるとあつた。まことに有難い次第だから。涼しい顔をして蝙蝠傘を片手に、指定の十八時に出かけた。席定まるや否や出て來たのは、ものもあらうに濃厚な善哉。大東亞戦が始まつてこのかた、昭和十九年十二月中旬、今は焼野原だが、東區安土町のY氏の堂堂たる邸宅で、夜晩く思ひがけなくも、空腹で寒からうとて、小豆の煮たのを充分戴いた以來の出來事だから、器は直に空になり、何度お替りをしたか、應接に違がなかつた。あとでよく調査してみても判然しなかつたが、或は「 $x^4 + \text{アルファ}$ 」くらゐであつたかも知れない。

D師は元來愛知縣の人ださうである。令弟N氏は知多半島の横須賀町——熱田から常滑へ

の電車の通過せる海岸の町——で、手賈く海産物商を營んで居られるさうだから、令兄とは全然異なつた職業である。其居住地の邊りは「ヤガニ」と「モガニ」と「車海老」とが名産で、いくらでも捕れるから、餘る程あると。「モガニ」とはどの様な蟹か判らずにしまつたが、「ヤガニ」は「ガザミ」の方名といふ事が知れた。捕りたての新鮮な「ガザミ」の肉を米に交ぜて炊いた「蟹飯」を戴いた。これはほんとに初物で其美味な事はいふ迄もなく、感謝しながら十分腹ができた。N氏とは元より初対面であつたが、知人美伊田ホテル支配人舎間さんを、もう少し圓い顔にするとN氏になり、反對にN氏を少し長くすると舎間さんになるといつた形で、一見舊知の如く感じのいい點はよく似てゐた。尙ほN氏の話に、捕りたてのガザミの足をもぎとり、甲を二つに割り、臍物のまま四つに切つて、一緒に炊いた飯は、風味例ふるにもなく、殊に産卵期に於いては、其卵子の味は何物も及び難いさうである。併しお話しただけではどうも徹底致しませんから、一度見學會といつたところで、見ただけでは駄目でせう。これは一つ試食會を開いて戴き度く、さうしたらはつきり納得ができるかと愚考致します。お考へ置きを願ひ度いものですな。

9月15日。土曜日。晴。

晴れてゐたから早起し境内を一巡したら、半出來の鐘樓に鐘が下がつてゐた。ほんとうは此日に運搬する豫定であつたが、都合により前日持つて來たとの事、藤井寺(地名。同名)かから此所迄さつと三里、中位の大きさの鐘で左程重くもないのに、外して持つて來て吊るだけの賃金750圓とは、言語道斷全くお話にならず、さう聞かされただけでも氣が遠くなりさうで、小生如き時代後れのものには、想像もできかねる金額であり。これも亦おそろしい世の中になつたと、つくづく感心させられた。此事についで昭和二十年九月十九日發行の毎日新聞(大阪本社)は「お彼岸に響く四天王寺の引導鐘」と題し

大阪四天王寺名物の「引導鐘」は去る三月空襲罹災以來、哀れな屑銅の姿となつて焼け跡に轉がされたままになつてゐたが、お彼岸を迎へて諸靈供養の引導鐘が鳴らないやうでは英靈や戦災者の靈も浮ばれないと、同寺では舊鐘樓附近に丸太組のバラック式假鐘樓をつくり、同寺經營の養老、孤兒院である藤井

寺の悲田院にあった小型の梵鐘を持ち込み廿一日彼岸入りの早朝その第一聲を響かせて焦土ながらも彼岸氣分で潤ひを添へるとともに、一般参詣者の供養の依頼に應ずることになった。

と報じた。批評は他日にするが、成程見かけは如何にもバラック式建物に違ひない。併し夫にしては恰好も割合にいいし、其平面は大に我意を得てゐた。

約20日前即ち8月28日午前、さしも喧噪を極めたクマゼミは、9月15日には鳴いてゐるのを一つきいただけで、殞んど全滅の姿。ツクツクボウシは僅かに四五疋ばかりが、靜かに奏樂してゐたくらゐ。D師と茶室で對話中庭前の低い臯月二三株に、羽化して間もないらしい美しいオホスカシバが來訪した。多分雌で卵子を生みつける爲、クチナシの樹を探しに來たのかも知れない。何れにしても目的を達し得られないから直に飛び去つて了つた。大阪市中で此蛾を見たのはこの日が最初であつた。

* 此蛾は昭和21年5月27日朝、此年初めて法隆寺貫主室の庭の花に飛來したのを見た。

(昭和21年5月31日挿入)

此廣大無邊の庭園では、夜もすがらエンマコホロギとツツレサセコホロギとが盛に鳴きたつた。さうして此朝はクサヒバリの鋭い聲も交つてゐた。クロタイマイが二疋樹の間を飛んでゐるのも見えた。空襲下「警警」や「空警」がひっきりなしに出てゐては、其様な氣分になれないが、此頃ではさすがに秋といふ感が深い。午前中博塔の龜に使用すべき石を石屋に注文した。北木島産の花崗岩を以てする事に決まつた。

歸りがけに、豫て話のあつた新聞記者との座談會を、29日に開いてはといふ事であつたから、承諾をして歸つたが、考へてみたら土曜日なので翌日を懸念したのと、來る22日には罹災死歿者及大東亞戰死者の回向をするから、夫へ出席を兼ねて21日から來てはどうかといふ話も出てゐたのを思ひ出し、來月に延ばすと餘り間があき過るから、さうしようかと考へて速達便で其旨を書いて出したら、丁寧な電報を戴いたので確定をした。

9月21日。金曜日。晴。

四天王寺の焼失と復興

此朝ほ京都市電の都合もよく、奈良電の切符買ひも行列が割合に短かく二十分で買へ、極原神宮行急行に樂に乗れたし、「上六」迄は早く着いたが、近鐵終點前で安部野橋行を待つ群衆の行列は驚くべき長さで、十五分待ったが電車も來ず、見切をつけて歩いて寺迄行った。このため往路四時間と十分を費し、十一時五十分着。あとできいたのでは、弘法大師の日と四天王寺彼岸参りと重なつたための雑沓ださうである。

午後境内を一巡。塔址・金堂址・太子殿址は其儘であつたが、假鐘樓は出來した。丁度講堂址の西で回廊址と鐘樓址との中間に、西から入る様に建てられ、西門から自然に道がついて兩側に露店が一ぱいに出てゐたし、参詣人はいふ迄もなく比肩隨踵。ここに和かな彼岸氣分が漂つてはゐたが、小生が嘗て昭和塔の再建中、會ま秋の彼岸に参詣して出あつた人出に比べると、やはり少ない様な氣がした。併し吊鐘は間斷なく微妙な音を傳へ、鐘樓の正面は一ぱいの人。回向料の領收證を差出すのを處理するため、専門に坊さんが二人かかつてゐた、文字通り寸暇のない状態であつた。

〇君には出遇はなかつたが、私一人で金剛の仕事場に行き、相輪はどうなつたきいてみた。

先日一部分造つてゐた第五輪は輪郭以外全部出來、第一乃至第四輪は、中心柱に固定する八角形の木と、輻に用ふる木の大體の木取ができてゐた。輪全部の出來期限を尋ねたら、暫く考へて、來月中頃には出來ませうかといふ返事。10月末迄はかかりさうだといつたら、夫迄なら必ず出來るさうだが、大分怪しいものである。老齡の大工が一人でやつてゐるのだから、作業進捗の度は緩慢と見るのが至當である。夫が10月31日出來せば、寧ろ早い方ではな

* 昭和21年1月22日に行った時にも、未だ完成してゐなかつた。少なくとも春の彼岸迄には着手をし、せめて基礎位は出來てゐないと、たしかに工合がよくなからう、といふ意味の來を當局へ進言しておいた。無論先刻御承知の筈ではあると思ふが。

(昭和21年2月17日追記)

昭和21年3月14日(罹災後滿一年の記念日)には、相輪五個共、ともかくも出來して大工小屋内に、第一輪から順に積重ねてあつた。ほんとうはいつ出來上つたのか知らないが、これで瓦さへ積み上げれば、さうして夫れ迄に仕上げてあれば、塔は出來する次第である。せめて盆までには、何とかさせたいものである。

(昭和21年3月25日追記)

此塔は、其中心に心柱をたて、一〇二でみる様に昭和20年9月10日に、淋しい立柱式を行ったまま長期間放置され、漸く昭和21年3月になつて基礎の瓦を積み始めた。春の彼岸の入り、即3月18日から再び着手するとの事であつたが、中實行されず。4月22日私が四天王寺へ行った時、天高女の上級生

いかと懸念される。

D師は四天王の種子を未だ書かないさうだから、これは成るべく早く書いておいてください。さうしし又薬研彫にするなら、石工は梵字を知らないから、鎌倉・室町調子のもは出来ませう、御面倒でも時時みて變なものにしてはなない様に願ひます、と頼んでおいた。夫れから塔の轆轤模型は、寺でも一先づ見合はせるつもりだとの事であつたから、勿論さうでせう、あんな不當な値段のものはやめるに限りますと申しておいた。夜は時時雨。

9月22日。土曜日。曇後晴。

が列をつくって並び、焼瓦をリレー式に壇上に運んで来た。頗る壯觀であつた。此分なら愈よやるのだらうが、女生徒の瓦運びは、つから始めたかきいたら、「今日から」との事であつた。21日迄は學校は休みであつたからの事。其翌日即23日一〇・三〇頃、塔址を通つたら、丁度また瓦運びをするため、女生徒の一隊が二列側面縦隊で、塔のところへ来た。其數凡そ一〇〇名ばかり。盆迄に埒をあけるつもりといふのはほんとうらしい。相輪五個は此前(即3月14日)見た時と、同じ場所に同じ様につき重ねておいてあつた。

(昭和21年4月26日追記)

手許の明るくなるのを待かねて起床したら、雨が降り出したが、六時少し過ぎに幸に歇んだから、誰も来ないうちに鐘樓の寫生をしようと思つて出かけた。嘗て毎月22日には萬障繰合して大阪行を決行した記念日であるから、而も罹災焼失後最初の秋の彼岸で、お太子さんの日だから尙更である。大急ぎで——雨がいつ降つて来るか判らないから——目的を達し、歸室して朝食をすまし休憩をしてゐたら、M君が室に出現したので、寺の平面圖を青寫眞に焼付たのを一枚請求した。これは伽藍復興につき、小生の意見を發表する際。速に納得の出来る様に新聞記者に説明する爲、ある程度の着色をして其節持参しようかと考へてゐたからである。夫と八月十一日の朝日・毎日兩新聞登載の塔の中間設計圖の凸版、これは毎日で造つたものが寺にあるとの事であつたから借りた。これを拙著中に小生の原圖と並べて載せて、後日の思ひ出ししようといふ目的である(第五〇八・五)。(〇九頁参照)

八時頃D師が見え。今日は例の回向を十時からつとめるし、大和會の會長として知事も出席するから、小生にも是非出ると交渉があつた。小生は大和會には關係がない、従つて出席の資格もないが、前回歸りがけの話もあり旁、後ろの方の嘘偽のない末席か席末かを汚す分

には、殆んど目立ちもしないし、又大して不都合でもあるまい。尙ほ目下いろいろ寺との關係もあるから、夫では出席しませうと申しておいた。十時になつたら誰か来て案内をしてくれるものと考へてゐた。

十時が過ぎても誰も来てくれなかつた。丁度室の傍を通つた寺の人に、回向はどこであるのか尋ねたら六時堂ださうで、私の席も設けてあるといった。夫では行かなければ義理がわるい。堂の椽下から禮拜をしておいたのでは粗末過る。そこで廊下へ出たら久久で元大阪時事新報(今の大阪新聞)記者のA君にであつた。四五年前市中のある所の往來で出遇ひ立話をした以來の事。久瀧を叙した後塙塔に就いて二三質問應答等。これも廊下へ立つた儘でやつてゐた時、D師をみかけた。六時堂の西側に席がある。靴や傘は自分で氣をつけると。私はA君と連立つて出かけた。

席は西側の外陣に東向きに、座蒲團が十二枚二列に敷いてあり、前の柱に「大和會席」といふ札が貼つてあつた。一番前の北側に毛布を敷き、其上に座蒲團が一枚おいてあつたのは、いふ迄もなく會長席。其會長席の直後に誰か一人座つてゐた。誰もゐないのに上席に獨りゐ

るのだから、大分ゑらい人だらうといふ想像がついた。前述の通り小生は無資格者で、臨時有格者に昇進したのだから、第二列の左から三番目(一番目と二番目とは終送、つまり貫主の送)に空席のままであつた動作がよく見えるところで、自分の存在は左程目立ぬ位置を確めたら。A君は私の右に座つた。當分の間は夫れきり誰も來ず、空席の方が多かつた。

十時半貫主以下奉仕の僧團入堂、所定の位置に就いたあとから、大和會員四名、ゑらい人との間を一つあけて座つたが、扱であのあき間はと思つてゐるうちに、其空席にはあとから來た老翁が坐り、あちこち眺めまわし、三四人が敬意を表したら、割合に大まかに會釋をした。此人も大分にゑらさうだが、後ろからではよく判らない。どうもどこかで見た様にも見ない様にも思はれ、さて誰であつたらうかと、しきりに考へてみたが、思ひ出せないうちに會長入堂自席に就いた。此間にも勤行は進行し、焼香となり、此もまた順調に進んだが、A君が餘りすすめたので、臨時末席の小生も無事に終る事ができた。

晝食は私の泊つた室で、記者一同と一緒にする様に聞かされてゐたが、これは取消となり、湯屋方丈で會食するのだとて、D師が迎に來られた。米こそ半搗位であつたが、副食物は近

來稀な豪華精進料理。今度は僅か一週間目で、復び腹の蟲は眼を廻したらう。先刻會長の直後に居た人は、此席へ來なかつたので、遂に誰か判らずに終つたが、老翁は正面から見たので思ひ出した。先日ある所である人の紹介で初對面の挨拶をしたXといふ人。其折同席したのは僅か二十分間位であつたと思ふが、初めてなのだから、いくら先方が社會に幅をきかしてゐるからとて、遠慮をする時にはすべきだと思ふ。あの時はついつかりしたのかも知れないが、人を馬鹿にしなければ、あの様な傍若無人の振舞はできない筈である。實に奇怪至極批評の致し様もない有様であつた。だから何とかして夫を忘れようとしてゐるが、どうしても忘れられない。其X老であつた。併し念のためだから「Xさんではありませんか、先日は失禮致しました」といつたら、先方で肯定したからもう確かだ。夫つきり話をしなかつた。併し彼も會長にはお世辭を振り蒔いてゐたので、いよいよやな感じがした。そのうち十二時半になつたから、誰にも断らずにそつとぬけ出して、寺務所へよつたらS師が居られた。挨拶をして歸りかけたら、誰か忘れたが「お供物」をあげませうといつて、小さい紙包をくださつた。持つてみると少し重い。其まま隠して入れ、十二時四十分寺を出たが、四電車全

部が私の爲に動いたと思ふ程都合がよく、十六時八分歸宅ができた。約三時間半で着いた。前にもこんな事があつたが、奈良經由で急行なしといふ目下の状態ではこれが最少限の時間らしい。D師からは先日提出した塔塔設計圖を借りて來た。寫真にとつて凸版につくり、これも亦拙著に入れて記録に残すつもりである。うまい拙いは此際問題ではないのである。歸宅後貰つたお供物を出してみたら、上に「御供大阪府社寺係」と印刷してあつた。寺のではなくて府廳のか、併し打物にしては重過ると思つてあけて見たら、讀者諸君何だと思召ますか。夫は綠色をした、假名で「ニッサン」と打込のある心持ち薄手の浴用石鹼であつた。

今回D師から、太子殿も鐘樓も、中間設計をやめにして、最初から本設計のつもりでやつて貰ひ度いといふ事に、一同評議の上決めたと聞かされた。こうなつて來ると實際簡單に定規と鉛筆とは取れない事になる。先の先迄考へて、悔を千載にのこさない様にしなければならぬ。太子殿の方は離れてゐるから稍やしいが、鐘樓は中中むづかしい。潛心考慮を巡らさなければならぬ。

9月20日から一週間續く彼岸の間は、何となく氣が落付かないし、其翌日はお賽錢の勘定でゴタゴタする。夫から自分は旅行する事になつてゐる。だから旅行から歸つて來てから會合するのが最も好都合だと、改めてD師の話があつた。所が來月は7日の第一日曜日に、私は用事で終日不在だから、5日6日位にするか、左もなくば8日は休養の必要があるので、9日から12日の間にして貰ひ度いと申出でた結末、夫なら10月10日前後に決めようといふ事になつた。其頃迄になら太子殿のスケッチ位、うまく行けば纏まるかも知れないから丁度よろしく。

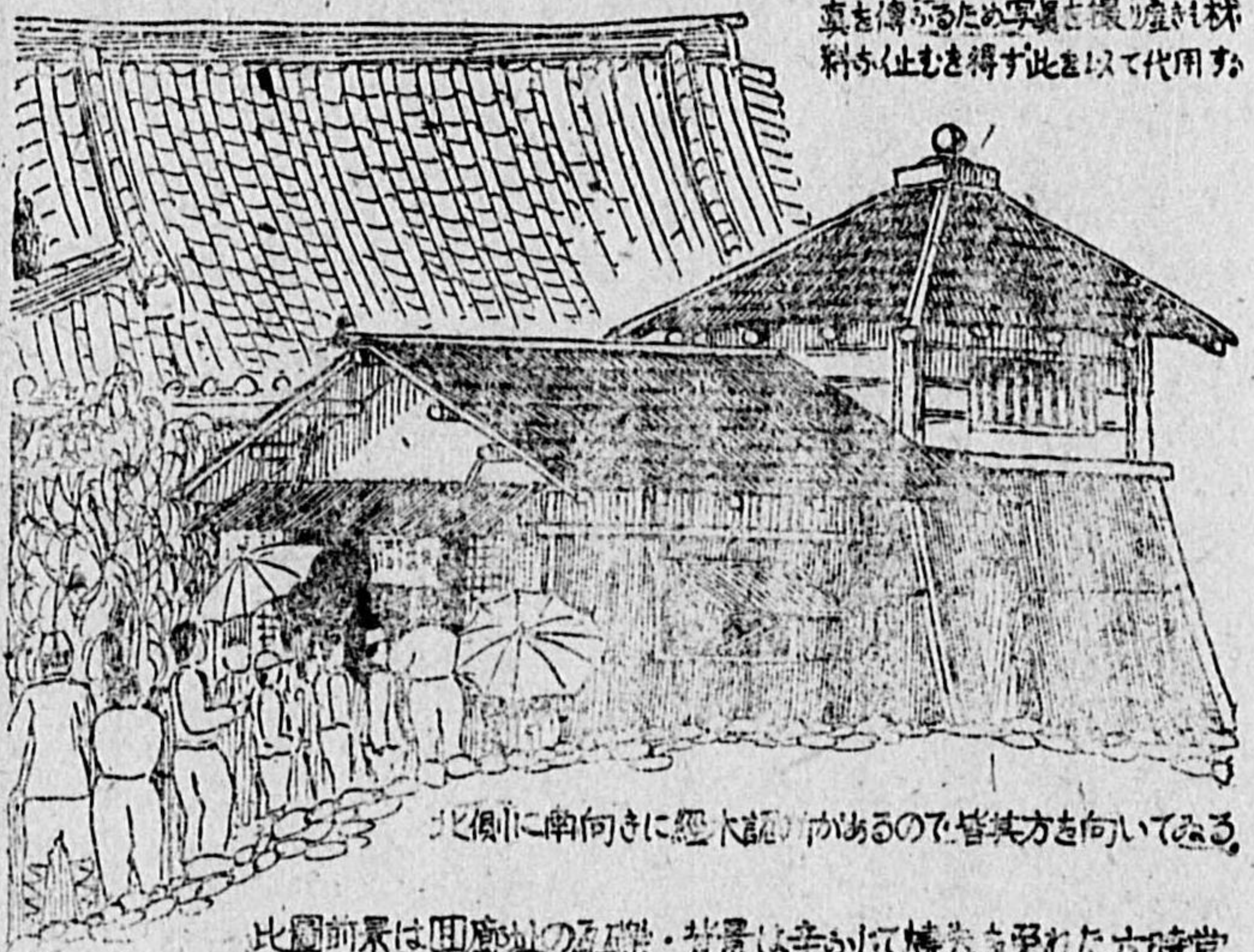
***假鐘樓。**空襲焼失後、正に半年を経過した秋の彼岸に、其後罹災死没者も、不幸にして其數を増した有様だから、引導鐘がなくては勤行回向もできない。就いてはほんのバラック式の鐘樓を金剛組に建築させるが、鐘さへ吊ればいいのだから、恰好は拙くとも餘り問題に

*假鐘樓は金剛組の大番頭、大野新一君の案ときいた。古い寄せ集めもので、よくもこれだけ氣のきいた恰好のいいものを造れたものだ。敬服にたへない。

しない様にとて、前記の通り寺院當局から話があつた。元より異議のある筈もなし、寧ろどんなものができるかと思ひ、興味を以て期待をしてゐた。所が一週間前に見た半出來のものは、形が割合によかつたから、此分では上等だと思つてゐたところ、果して可なりなものになつた。

鐘樓内で回向をするなら、參詣人もあるのだから、せめて四疊半位の室が一つ位あつてもよからうと考へ、先日持參した原案は四疊敷二間とし、樓の方は寺の希望通り袴腰をつけた純然たる鐘樓たらしめ、其前の座席に當てる部分は屋根もすつと低くして目立たない様にし、其前方に荷物や傘下駄等の置場所をとり、正面に向拜を附したものにしておいた。この座席の部分は、場所がなければ西側にとり、目立つと思へば周圍に目隠のため植樹をする。さうすると東側の鼓樓との釣合上、何等差支はあるまい。ところが寺では座席の必要はなからう。焼失前は吊鐘の下に坐つた位だから、といふ意見がなくもなかつた様だが、さてこの假鐘樓の平面は正に拙案の様に前方に一室とつてゐたところを見ると、やはりこの位にしておかないと足搔がとれないだらう。寺院當局も其後考へ直されたものと見える。ただ小生は樓を入

一〇四 大阪市・四天王寺鐘樓址に近く建てた假鐘樓を西南方より見る。



真を傳ふるため写真と模造材
料も仕込まず此を以て代用す

北側に南向きに經水路があるのを皆其方を向いてゐる。

此圖前景は圓廊址の五五景・背景は幸かて焼失を免れた六時堂。

昭和二十年九月二十一日十三時頃撮影。大野先生とて賑ひの最中写。

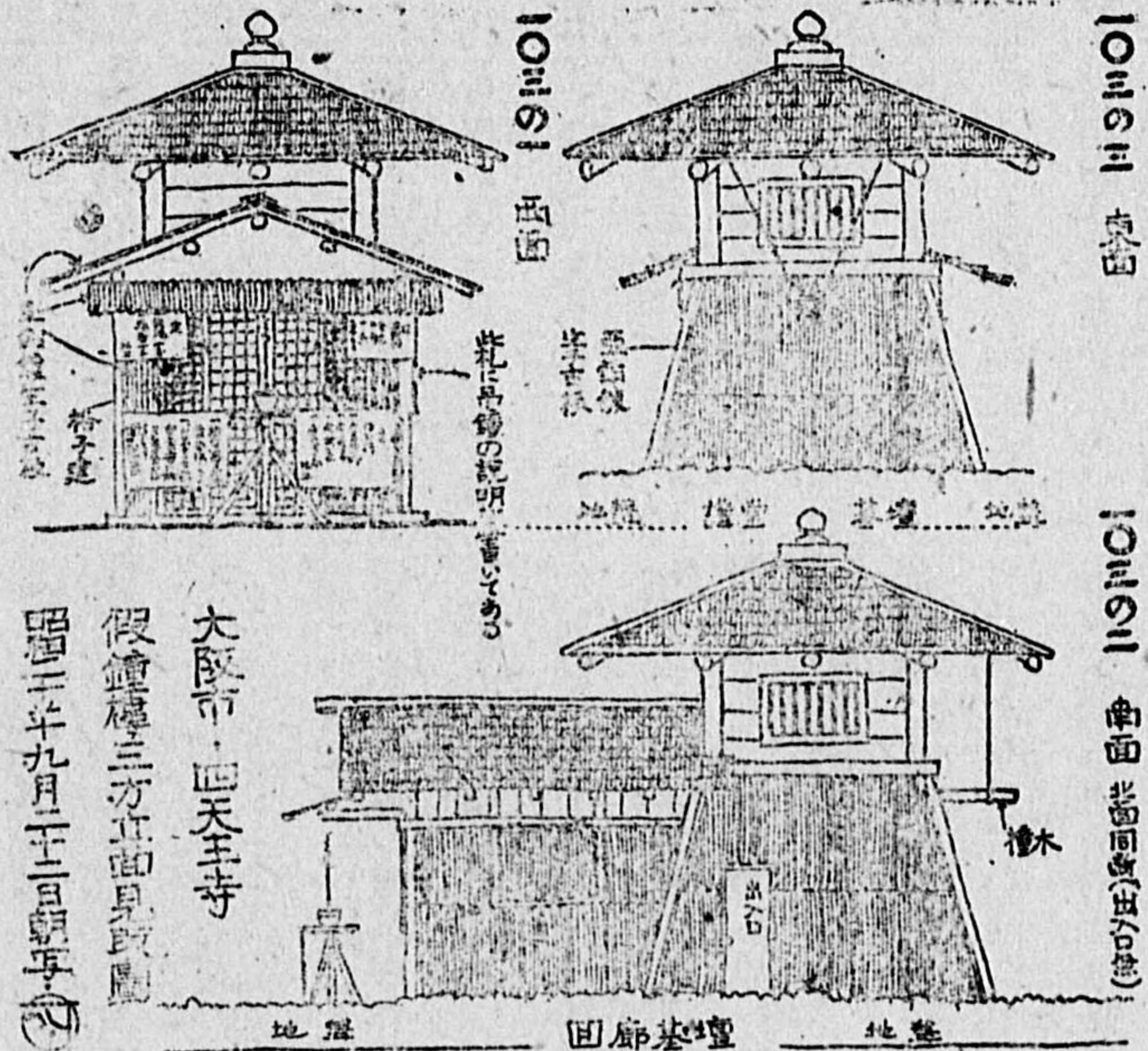
四天王寺の焼失と復興

五五三

ものを横に用ひたらしく、兩側面と後方の連子窓だけが新しい。柱は丸太各面に三本、隅木も丸太、扇形に配置した賢明な方法をと、軒反りは極く僅かつけてある様に見える。下方の袴腰も四方に轉びをつけただけで、南側前室に近く出入口を設け (I 0115 II) 東側極から撞木を吊り、生子板に孔をあけて、内部に座つてゐて自由に鐘を撞ける様にしてある (I 0111)。

前室は丸太の母屋に角樞、長押上は古羽目板を縦に張り、下は生

四天王寺の焼失と復興



I 0115 II 西面

I 0115 III 南面 圓廊(假鐘樓)の礎

大阪市・四天王寺

假鐘樓三方正面見取図

昭和二十年九月二十一日朝写

五五二

母屋造とし、前室は切妻妻入として正面に庇をつけ、本瓦葺として鴟尾をあげておいたが、これは假だから樓は寶形造とし、前室はやはり切妻妻入で庇附、但し屋根・袴腰・前室の羽目は、總て亜鉛鍍生子板を用ひ、コールタールを塗つてあるから、黒光りがしてゐるが、勾配が低いから大變に落つて見える (I 0110 I・II・III・I 0114)。

樓は古い方柱を應用し、上層羽目板も亦古いものの目板を外した

子板を貼り、左右側側に突上窓を設けてある(1011)。正面は其殆んど全部を開放する事ができる様にしてあり、明治末か大正頃の鐘を吊つてあるのに、梵鐘は祇園精舎の鐘の音同様黄鐘調だといふ解説をした札が下げてある(1012)。前室の前には臨時粗末な机を据え、其右端に回向料(最低五拾錢・壹圓・貳圓・參圓)左方には

- 一、經木は回向の上龜井水にお流しください
 - 一、お急ぎの方は回向の上當寺に於て龜井水にお流し致します
- 懷中物御用心

といふ親切極る文字を書いた紙が下げてある。其他「蠟燭十錢線香十錢」といふ紙も下がつてゐた。

要するに此假鐘樓が材料は古もの疵ものばかり用ひてあるが、洵によくできてゐたので、大に氣に入り満足をしたのである。だから後日思ひ出す事ができる様に寫生圖を掲げておいたのである(寫眞をとりたかつたが、種板もフィルムも入手不能であつたから、やむなく拙い寫生圖にした)。

一體此鐘樓、建築するのにいくら費用がかかつたらうか。材料は何れも古い寄せ集めもので、言はば寺に有合せばかりだから、これ等は只々五分として、おそろしいのは手間賃である。尤も金剛事務所で造つたのだから、特別であらうが、夫にしてもいくら位だらうか、私共には全然見當がつかない。M君にきいて見たら、未だ何とも申出がないとの事。そこで判つたら知らして貰ふ約束にした。總坪數六坪前後らしいが、坪いくらに當るか、私は非常に興味をもつて知らせを待つてゐる。

序だから書いておく事がある。回向所は鐘樓だけでは間に合はないとて、六時堂前の舞臺の上にも、もう一所設けてあつた。中央に壇を置いて廚子入上品上生阿彌陀如來の座像を安置し、其前に上に梵字(ア)、其下に三界萬靈と記せる塔婆があり、向つて右に爲戰災死者各々諸精靈位追善菩提也向つて左に

爲大東亞戰々死者諸英靈位追善菩提塔

と記した塔婆がたててあった。今度の長期に亘つた戦争のために戦死した人人の追善供養は毎年の事と思ふが、空襲の犠牲となつた不幸なる人人のは、恐らく本年最初の事であらう。朝早いので未だ回向も始まらず、誰も居なかつた。併し私は此等の塔婆に向つて禮拜しただけでもさうであつたが、況や六時堂に於ける勤行に参詣して、焼香をして心から冥福を祈つた時は、洵に千萬無量の感に打たれたのであつた。

一般参詣者の爲めに回向を勤めるのは、八時からとのことなのに、早や七時前からそろそろ詰めかけてきた。22日早朝、六時五十分を一時間まちがへて七時五十分だと思つたと見えもう十分待てばいいといつて、石舞臺の上に前日から敷放しになつてゐた簿縁の上に坐り込んだ男女四人連れがあつた位で、引續いてあとから押かけ、此日の盛況が思ひやられた。この様な有様だから、取敢えず假鐘樓を造つたといふ事は、此秋の彼岸に際し、寺としては必要にして充分なる條件を充たしたことと言はなければならぬ。

9月28日午前の便でD師から葉書、M君から封書が来た。共に天王寺局の消印があり、夫夫24日25日とあるのでみると、一は5日一は4日目で着いた事になり、相變らず緩慢なものだ。「豫ての座談會は10月9日午後二時から開會の豫定だが差支はないか」といふ照會であつた。差支なき故必ず出席するといふ返事を別別に兩氏へ出した。かく背水の陣をしいた理由は身體の健康状態が極めて良好だし、最早空爆の虞もなく、其上に最初の行違ひから40日間も延びてしまつたのと、そんな事から決めたのである。二人に別別に出しておけば、少なくとも一枚は必ずつくだらう。だから間違は避けられると思つたからである。いづれいつか一度は愚人の愚論を開陳しなければならぬ運命の下にあるので、いくら逃げ隠れをしてみても別段逃げられるものではないとあきらめたからである。

夫迄、及ばすながらいろいろと考へてはゐたが、ともかくも何とか原案をつくらなければならぬので、9月29日以降、數日間考慮の結果、先づ第一案として次の様に記してみた。これを持參して、青寫眞へ彩色により各期の工事を明らかにした平面圖と共に、皆さんに御覽に入れて説明するつもりである。

四天王寺伽藍復興第一案 昭和二十年十月九日提出

- (一) 南大門。(樓門)新築する事。
- (二) 新築の南大門・中門・塔・金堂・講堂・回廊(及び附屬門)は、主要部分に我國最古の建築様式を採用する事。但し雲料・雲肘木の如き特殊のものは避くる事。東大門・西大門の様式は右に進ず。
- (三) 鐘樓は袴腰付として主建築に準ぜしめ、全體としての調和を圖る事。以上第一期工事。建築材料。總て木材とす。以下同斷。
- (四) 經藏は敷地を考慮し、外觀を主建築に準ぜしむる事(三と同様なるも、内部は輪藏式となす事。
- (五) 西大門前、南北に相對せし諸堂は萬燈院(位置を考ふる事)と共に現代の要求に應ずる様其平面を決定し外觀も亦他建築との調和を考慮する事。
- (六) 鼓樓は鐘樓と同様式とするも、前室を設けず。樂屋同斷。以上第二期工事。
- (七) 龜井堂・經書堂・用明殿等殘餘の諸殿堂門等。以上第三期工事。

太子殿(特別工事)。

禮堂 板敷、周圍疊敷、又は全部疊敷とし、座式に適する様にする事。
あひの間 板敷、石の間の時は歩み板を置く事。
奥御殿 内陣を一段又は二段高くし、太子尊像は厨子入として壇上に奉安す。外陣は石敷(又は板敷)。八角堂とす。
建築材料としては成るべく檜材を用ひ素色とする事。様式は飛鳥式を採用し、伽藍同様特殊の細部を除き、又周圍に木椽を設くる等隨意とす。特に俗化せざる様注意する事。

(特別工事)

右に關し第一案として、全く私の自由意志による平面圖を添附した、規模大體左の通り
禮堂 六間に五間。あひの間、四間に六間五尺。奥御殿、徑四間八角。

附帶工事

- 一、南大門前の民有地を買収する事
- 二、出來得れば舊境内の回收

(昭和二十年十月六日 起案)

10月9日。火曜日。大雨。

本月は5日頃から殆んど毎日雨が降った。6日には時に日がでたりしたが、7日からまた晝夜降り続け、殊に9日朝は如何ともなし難い豪雨であった。相不變河原町今出川停留場は、この雨の中に一町程の長行列が二行並んでゐる有様。京都驛前の觀光案内所で奈良電の切符を賣るといふ事を初めてきき、試に行つてみたら買手は一人も居ず、つまり待たずに買へた。近來珍しい事で、正に特筆大書するに足りる。其爲め辛くも九時六分橿原急行に間に合つた。途中の餘興として大雨がジャンジャン降つてゐる最中、河原町三條四條間、驛行電車(中には折返のもあるが)が二十臺ばかり珠數繋ぎ。断線でいつ動くとも見當がつかないさうで、仕方がないから下車して四條通を烏丸に出で、二度のりかへて漸く驛まで行く事ができた。これで家を七時半に出てゐるのである。

「上六」(ウヘロク)の近鐵終點に於ける市電停留場亦大變な人。係員曰く、雨のため故障車が多い、三四十分に一臺の割だから、急ぐ人は歩けと。仕方がないから京都同様の豪雨中を歩き、十

一時四十五分寺へ着いた。右の靴の底に孔があき、今日は可なり心細い目にあつた。最早雨の日はきものは全滅となつて了つた。

十三時半頃から、朝日記者T₁氏を先頭に、大阪T₂氏毎日U氏參集、D師は十四時半頃、府廳前でいくら待つてゐても電車が來ないのでとうとう寺まで歩いて來たから遅れたと。雨中半みち以上の所を歩いたのはさぞ大變であつたらう。これで一通り揃つたので十五時十五分から湯屋方丈に於いて愈よ座談會開會といふ事になつた。此日説明役は私だからといふので中央に座席があり、右手にD師・S師・O助教授(廣島文理大助教授・臨時)・T師・左手にU(毎)・T(朝)・A(大)・A(大)(大阪・事故のため遅刻出席)各記者、遊撃手としてO君とM君と中間に坐つた。先づD師一場の挨拶の後、小生が復興案に就き、圖を指しながら瓦釜雷鳴の冷評を甘受するつもりで始めた(前記復興案参照)。

議論百出と思ひのほか、意外な事に大體に於いて承認を得た。但し五重塔と太子殿に關しては次の様な説が出た(便宜上、異見と私の答へ)と並べて次に書いておく。

五 重塔

一層の事印度式のもの、つまりサンチの大塔の様なものにしては如何。

右に對して私は「石造なら朝鮮に於ける石築佛塔の型式の方が、サンチあたりより遙によりよるしくはあるまいか。印度式では餘りかけ離れてゐるし、其上にも如何にも直寫で相應しくない。私なら朝鮮の様な型式に、我國に傳はつた石塔式、即ち純日本式にやってみる。さうすると門初め金堂・講堂・廻廊等との調和も決して拙くないと思ふ。併しやはり従來の様な日本の木造層塔式でないと、大衆殊に大阪市民は承知ができないであらう」と答へた。

太子殿

太子殿に就いては、寺側から可なり異見が出た。私は知らなかつたが、前殿の中央にも本尊として太子十六歳の尊像を奉安するのだから、單に「あひの間」として通路にするだけでは困る。奥殿は少し離して建て度い。

位置も成るべく奥に東によせたい。つまり従來の位置より東北方によせ、門はできたら正面に開

き、一廊となすため周圍に築地塀をつくる事。奥殿たる八角圓堂の中心は、遠く鳥居・西大門・西重門・玲門（東側廻廊の門をアマモンといふ）を通る東西の線上に在らしめ、「猫の門」——猫の門は是非共復興を希望する旨私が主張した——も亦、其線上に建て、其左右即南北に復興せしめた「繪殿」と「鯨鐘樓」を相對せしむる様にする事。

右に關しては總て修正案通り配置を試みるべく確答をした。

右修正案により、小生は再び平面圖（配置）をつくり、來る10月22日に持參し、本日同様午後座談會を再び開いて協議し、翌23目の紙上に發表するといふ事になつて閉會した、時に十七時半。此間小歇なく而もぬける様に雨は降り續いた。夕食の膳が運ばれ、合せて九人歡談に時の移るを忘れた位、二十時半雨も少し靜かになつたので散會。洵に楽しい半日であつた。覺悟はしてゐたが、幸に餘りつつかれずに切りぬける事ができて一安心した。

夕食は先日の晝食の如くであつた。此頃腹の蟲も勝手が違ひ、こんな筈はないがと、さぞ目眩してゐるだらう。雑談も何にしる相手は新聞記者だから、小生等の聞いた事がない珍ら

しいものが多く、甚だ面白く拜聴した。但しO廣大助教の原子爆弾の話は、實に驚くべきであつた。一般にデマは實際の數倍に誇張されてゐるものだが、あれに限らずに其反對で、其無慘な事は到底筆紙にも口舌にも盡し難いと言はれた。同助教は最近姫高より廣島の文理科大學に轉任され、出張不在中爆撃により令夫人を失はれ、令息のみ辛くも無事であつたといふ、洵にお氣のどくな方。名前だけで想像してゐたのとは全然あらゆる點に於いて正反對であつた。

定めて牛田の不動院本堂の消息を御承知であらうと思つて伺つてみたら、あれは焼けては居ない筈だと言はれたので安心はしたが、續て本堂には戦争中ガソリンが格納してあつた、と聞かされ、あきれてものが言へなかつた。軍人さん達も、何とかしてもう少し古建築といふものに關心を持つて戴き度いものである。あの内へガソリンを入れるなんて、誠にどうも何と申していいか判らない。夫にしても無事であつたとは、ほんとに有難い事である。

部屋に引あげた、さすがに今夜は蚊がゐない。雨は劇しく降り大分寒い。東海道・山陽・山陰各線並に阪神・阪急電車不通との事。可なり厚い蒲團をかけてもまだ寒い。明日奈良廻

り京都行が不通にならなければいいがと念じながら消燈、時に二十一時十五分。

10月10日。水曜日。大雨。

昨夜もよく降つた。昨夜から停電が續き、早く起きても不景氣だから、がまんをして明るくなる迄床の中にゐた。朝になつて雨は辛くも歇んだ。最早蟬等は一疋も居ない。十時頃黄蝶が一つ飛んでゐるのを見た。秋に相應しい。支那省からH君が焼跡調査に来てゐたさうで今朝遇つた。焼かれた國寶建築の報告は未だ全部集まつてゐないから、文部省でもはつきり判つてゐないさうだ。其緩慢さは此頃の郵便局に負けない様だ。戦争がすんで二ヶ月たつた

*昭和10年10月17日の新聞紙上に、16日に文部省から發表されたとして、戦争のために焼失した國寶建築物五十九件、同寶物類二十六件、重美十六件、合計百一件が掲げてあつた。だから10月10日頃には既に判明してゐたのであらう。併し私はH君の返事をきいた時、如何に文部省が他方面に多忙で、夫れ所ではなかつたとしても、餘りひど過ると思つた其感情を、歸宅後直に書いたのだから、其ままにしておく(10月17日記)。

にゆつくりし過ぎてゐる。

十一時過ぎD・S・Tの三師より太子殿の建築に就いて、昨日の決議の修正案を申出られた。夫によると寺側の希望として

太子殿の規模は大體焼失以前と同様に差支はないが、他にももう一棟その位の大きさの建築があると都合がよろしい。その建物は集會をしたり、講演の時に用ひたり、先づ二百人ばかりは入れる様にした。

とのことであつた。扱て其位置をどこにするかといふ段になつていろいろ説も出たが、結局今のところ太子殿と一直線上に、其後方即北に南北に長く建てたらよからうといふことになり、復興案の太子殿の終りに

別殿。太子殿奥殿後方に、同じ南北線上に新に一棟建設する事

太子殿・別殿を一廊となす樓築地塀を設け、圖の如く門、門の一の左右に「繪殿」及び「鯨鐘樓」を建つる事

と附加へる事にし、歸宅後速達便にてM君迄申送つた。今日は夜迄降つたり照つたり、結局降つた時間の方が多かつた。よく雨が無くならないと感心させられた。

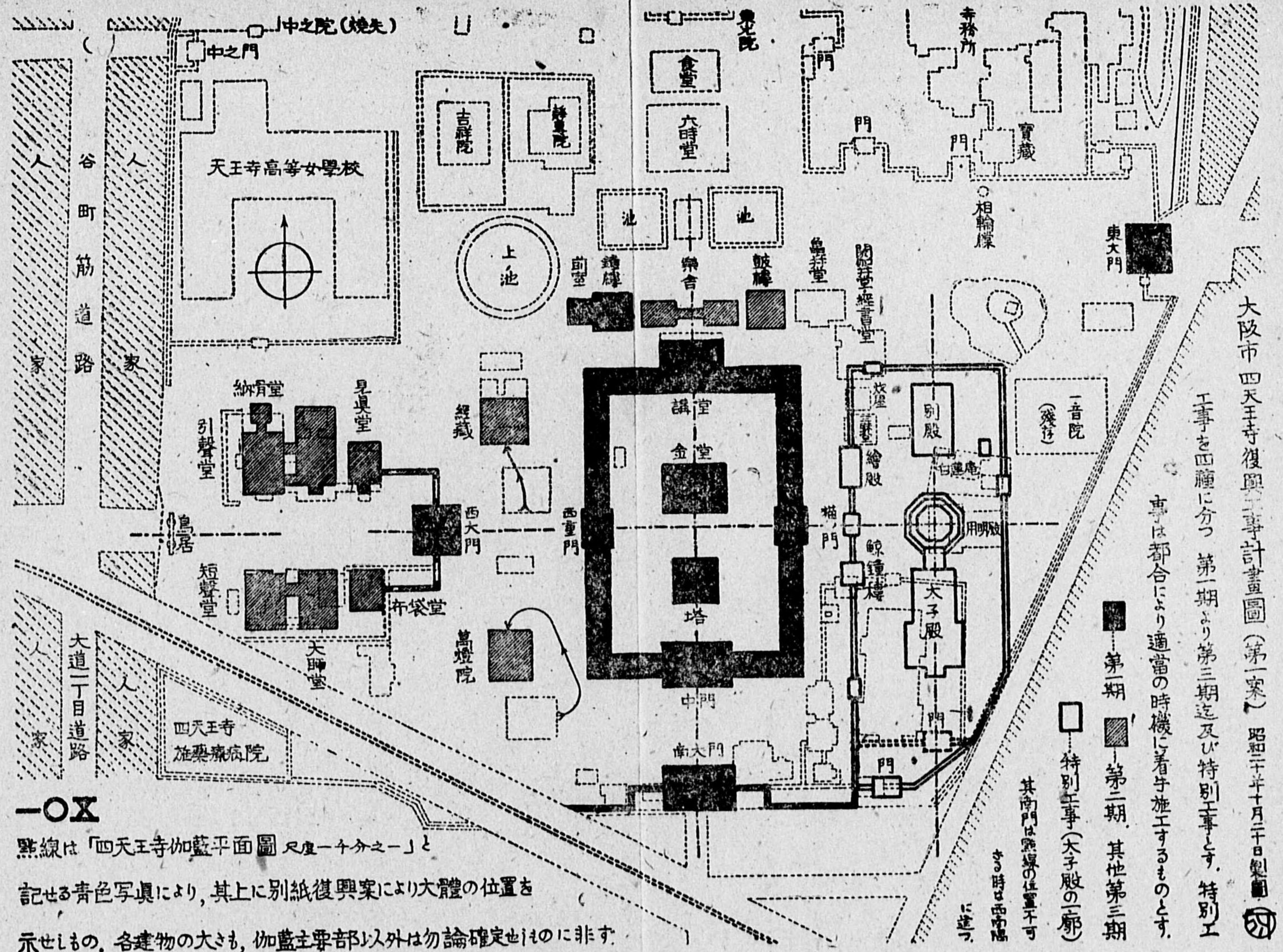
假鐘樓建築の中間賃、請求書は出たかM君にきいてみたら、前例により金剛組から寄進するさうだとの答に不審を抱き、尙よくきいたら、享和の火災後文化再建の時も、此鐘樓を第一に建てたが、其時總てを金剛家から寄進した。前例とは夫を指すのださうな。さすがに金剛家だ、三千圓としようが五千圓と書かうが、ものは既にできてゐるのだから、寺は支拂をすべき義務がある。然るに約一世紀半も前の、最早とうの昔に時効にかかつてゐる様な古い例を出して、綺麗に權利を放棄したのは、正に近頃の美譚である。馬力の750圓といふ對照である。私はこの話をきいて、言ひ現はせない程の嬉しさに満たされた。この話、私一人で聞いて置くには勿體な過る。

* 10月11日の朝日紙上に「五十五年目の大雨」とあつた。

10月22日。月曜日。晴後曇。

新聞社の報道班員に説明するため、寺へ提出する復興案を記入した圖は、私の自己流よりは一目瞭然簡單なものに限る、と思つたから、寺にあつた「一千分之二」と銘打つた頗る怪しげな平面圖を元とし、在來の建物を點線で描き、其上に復興工事を第一・二・三・特別と別け、黒・斜線・肉太輪郭等で誰にでも判る様に製圖をした。もう一枚同じものをつくり、此方は點線でかいた焼失前の建物へも、できるだけ名稱を記入しておいたが、これは隨筆中へ圖版として挿入し、この時の拙案を後に残すつもりである(一〇五)。

此圖は不合格になつても少しも差支はない。謂はゆるキー・プランの様なものだから、手間もさうかかつてはゐないし、異見が多く落第すれば復た考へ直す迄の事。併しこれには寺側の希望も相當に取入れておいたから、ただ太子殿一廊の南門の位置がどうかと思はれるだけで、地所の關係上無理をしでまで正面に持つて來る必要はない筈である。だから舊位置の少し東の方を撰定して、夫夫點線と實線とで記入をし、どちらでも都合のよろしい方にする



大阪市四天王寺復興工事計畫圖(第一案) 昭和二十一年十月二十日製圖

工事を四種に分つ 第一期より第三期迄及び特別工事とす。特別工事は都合により適當の時機に着工するものとす。

■ 第一期
 ▨ 第二期
 □ 特別工事(大子殿の工)

其南門は遺蹟の位置不可
 する時は西南隅
 に建つ

—OX

點線は「四天王寺伽藍平面圖 尺度一寸分之二」と
 記せる青色写真により、其上に別紙復興案により大體の位置を
 示せしもの。各建物の大きさも、伽藍主要部以外は勿論確定せしものに非ず。

様なところ迄、ともかくも注意はしておいたから、旁大概落つくだらう。併し如何にしても始末によくないのは、此一廊の地所が少し長過ぎて、形がよくない事だが、これは圖上だけで、実際には少しも判らない。だから出すが早いか頭から敲き潰され、無下に葬り去られる様な事はあるまいといふ自信はもつてゐる。

此日も約四時間を費して四天王寺着。前回迄の茶室を明渡して本坊寺務局の二階の隅、八畳間に移る事になった。前回此室を見た時は、永い間使用しなかつたせいで、随分ひどくなつてゐたが、畳表を取替へ障子を貼りかへ、回轉椅子に机と木の寢臺とを備へつけ、150燭の電燈をつけてあつた。だから部屋は見違へる程美しく明るく、折柄薄曇りではあつたが、正面遠方に生駒山、其頂上の航空塔迄が見え、茶室とは全然異なつた風景が眼前に展開してゐた。床・棚・書院があり、書院の棚板の上には焼けた銅鐙瓦、床の置物は銅の鬼板の中心飾の大型蓮花の完全に焼け残つたものを平たくおいて臺とし、上に前回復興の時記念品の一として造らした百萬塔の模塑一個をのせてあつた。掛軸は殊に注目し値した。頗る大幅で紺紙金泥「梵文般若心經漢譯對照、昭和九^甲年一月七日、天台沙門孝潤校訂拜書」とあつた。

駈出しや附焼双の企て及ばざるところであるのは、いくら素人でも一目で判る。D師にコー
ジューンかキョージューンか、これはどういふ方ですかときいてみたら、大宮コーニンといふ元
甲谷他大學で講師をして居られた天台宗の學僧との答。成程どうも其位の學者でなければ、
とてもできないであらう。梵字は一つも讀めず、漢譯は終りの一行が辛ふじて讀める程度の
小生は、この掛軸がうれしくて、何度も飽かずに拜見した。この飾りつけは總てM君が、小
生が喜ぶだらうと思つて、すきさうなものばかり並べたと言はれた。正に其通り總て有難い
ことである。回轉椅子と机とは、拙宅に於ける小生の書齋のと同じ式で、これでは家にゐる
のも同じ事、居心地もよく100%の満足ができた。

廣い二階に部屋は五つ位はあらうが、多くはものが入れてあり、誰も居ない。又居ても小
生に提供された室は全然他室と没交渉。大聲を出しても他に洩れる處は先づない。寢台の上
には充分の設備もできてゐたから、M君に何度も禮をいつてゐたら、やがてD師が出現、「お
氣に人りますか」と言はれた。無言で笑ひながら小生としては最大最高なる深謝の意を表現
した。同師は「今日の座談會は十五時から先日の室でやります」と言はれた。

朝日新聞社は今日午後重要會議があるさうで、先日のT氏出席不能の由、代りとしてKと
いふ記者が始まる前に面會を求めてきた。おそろしく若い人、さうしてものを言ふのに急ぐ
せむか少し吃る。四天王寺の件については全然何の豫備知識もなく、質問もまるで裁判官が
罪人を訊問する様な口調。老熟のT君としては、他に皆出拂つて人がゐなかつたので、不馴
れを知りよこされたのだらうが、小生も少し驚いた。あとから新聞記者に接する機會の多い
M君の批評があつたが、公開はせめておく。K君が一人前の記者になるのは、まだ暫く時日
がありさうだ。

復興案は單に俊一の試案に過ぎないが、金剛組としても聽いておく必要があつたのか、K
代表社員とO君と二人來會。豫定の時が少しおくれ、十五時五十分から湯屋方丈で始まつた。
先日の通り小生が中央、左にU他二氏(共に初対面)・T(大坂)・右にD師(空席)・A(大坂)・T(大坂)師席
を占め、小生の眞向のみがK代表社員・O君・M君といった順序。先づD師の挨拶につき、圖
を前に置き、印刷物にした試案を讀みながら説明をしたのであるが、とにかくこれは議論を
ひき起す種子の様なものであるせむか、漸く蔭いただけで、未だ芽を出さない。だから承認

も否認もなく、何等かの方法で紹介するといふ事になり、大毎社員の一人が圖を持って先に歸つた。時は十七時だから圖は明日には間に合ふまいが、寫眞はとつておくといふ事になつた。小生としてはこれも先づこれで一段落、やり直すにしても、ここ十日位はゆつくり休養ができるのが有難い。

夕食は先日の通りであつたが、但しドライで、T師の一言「探したがありませんでした」で鬼。一同おとなしく箸をとりながら雑談、十八時半解散。其雑談中、小さい蒸薯三本を往來で立賣りが十圓、此頃の食物は十圓が單位だ、あんな蒸薯を買つてゐるのは、どうも見たところは其日暮しの様な頗るお粗末な人が多い。何でも腹一ぱいしようと思つたら、此節は百圓食はなければ駄目だといふのが常識だと。終にはどうなる事か。

十九時頃からM君が話しに來た。今夜は同君蒐集の例の畫帖、關東篇東北篇二冊を観る。

【太子讚仰】(昭和二十年)三月號が漸く校了になつたといつて、ゲラ刷を持って來られたので、同君辭去後丹念に讀んで了つた。三月號の發行が餘りおくれたから、通卷にして百十二號と

して書いたさうだ。合計36頁、注目すべき要點は英文が入つたこと。

十七條憲法の三、「承諾必謹」の章。前頁に原文と和譯文とを掲げ、次頁に CONSTITUTION IN XVII CLAUSES. ARTICLE 3 と表題がおしてあつた。誰が譯したのかさうだが、返事は「寺にあつたのを利用した」のださうで、譯者は判らなかつた。もう一つは To The Allied Forces の題下に四天王寺の紹介で、書き起しは The Shitennoji is a temple established 1350 years ago by Prince Shotoku, a staunch advocate of democracy in Japan. とある。他は裏表紙に英文で目錄をあげてゐる。折角三月號が校了になり、刷るばかりになつて印刷工廠が焼かれたが、夫にもめげずに漸く京都でやり直す事になつて努力中、天下の情勢一變したので、内容を然るべく取捨したさうだ。夫は實際大變な手間と苦心とであつたらう。M君の活動は、小生には多少拜察はできるが、こつといふ方面に無關係の諸君は、到底想像も及ばないのである。同君は後記に

漸く本號を合併増頁の上、新面目を加味して諸賢に見ゆるを得ることとなつた。御不満もあらうが時局下印刷の苦勞は知る人ぞ知るである。御了解を得たい。

と書いてゐるが、正にこの通りである。「時局下印刷の苦勞は知る人ぞ知る」で、つまり「知らない人は知らない」のである。知らないといつたら全く知らないのである。「知らない」といふのは寧ろ「判らない」といつた方がよからう。いつれ近日寺から郵送されようが、若し受取つて何だ今時分やつと雑誌ができたのかと悪口でも言はうものなら、忽ち罰が當つて眼がつぶれるかも知れない。

併しながら率直にいふと、俊一の氣に入らない點が二つある。一は表表紙の標題・發行所・年月日等が右横書になつてゐた事と、英文のうちの羅馬綴が總て舊式である事とである。序ながら日本を Nippon としなすで Japan としたのも數へれば數へられる。いつ迄たつても舊套を脱し得ないのはなまさない。随分頑固な鐵道省でも、新聞紙の報する所によると、驛名は此度左横書にする事にしたとあつたし、發行した案内記の一、昭和十三年に印刷した「SOUVENIRS... What and Where?」には日本式羅馬綴を用ひてゐるではないか。俊一にやらせたら斷然改正して了つたらう。此際思ひ切らなければ、いつ迄たつても駄目だらう。次號からでも晚くないから、やつては如何でせうか。夫ともやはり今更左横書でもあるまい

といつて、このままにしてお置きになりますか。表紙まで入れて40頁の雑誌に、右から左へ上から下へ、左から右へと三種あるのは、不統一と思召ませんか。併しこれでも此頃の書物の奥附よりいゝかも知れない。あれと來た日には、小さな一枚の紙のくせに、文字の並べ方に三種類あるのが普通である。私も實は被害者の一人で、知らないうちに印刷され了つて、紙不足を知りながら、すり直しもできず、泣寝入をした經驗がある。

10月23日。火曜日。不定。

昨夜は夜通し降り続け、朝になつて漸く歇んで天氣は有望になつたが、又降りだし、遂に不定に終つた。併し夕刻から持直しさうになつてきた。前回大阪から歸つて以來兩足に水腫がきた。醫者の卵子のHは脚氣だといつた。小生も至極同感であつたので、D師に相談をした結果、今日は靖國神社の臨時祭で病院は休みだが、特にとあつて宿直の看護婦が部屋へ來てネオ・パラマトリン²を注射してくれた。四天王寺施療病院は、院長さんの鶴の一撃で幸に今の所録寡孤獨ならぬ小生も、恩典に浴し得た。無産患者として施療施藥をしてくださ

つた事と有難く思った。

二階で鐵筋構造。椽には厚い硝子入の「上げ下げ窓」がある。だから昨夜は止むを得ず生き残ったゴホロギの悲鳴もきこえず。勿論今日此頃蟬等は居ず、天地靜寂、降り出せば其音が幽かに耳に入るだけ。他には萬籟聞として聲なき別世界で、まる一日而も大阪のまん中で暮した。この點でも拙宅の自分の室と同じだから、どこ迄も非常の親しみを覺えた。

歸りに奈良迄至極都合がよかつたが、列車事故のため京都へ行く人は、大阪行へ乗り西大寺で乗換ろといふ揭示が奈良終點にてゐた。仕方がないから直に西大寺へ引返し、京都行を待つてゐたら、事故は解消したと見え、京都方面から來た電車は奈良へ向つて發車をした。もう僅か十五六分奈良で待つてはよかつたのだが、そんな事は一般旅客に前から判る筈はない。これで完全に金錢と時間と努力とを損して了つた。併し其うち權原神宮前から京都直行が來たので夫にのつた。勿論満員だつたから、例の折疊腰掛を利用した。往路も混雜を豫想して

*上げ下げ窓。Sash window

新田邊行へのり、奈良行へ乗りかへてあの腰掛を利用し、立往生をせずに助かつた。此度の大阪往復位、あの腰掛が役に立つた事はなかつた。事故さへなくば都合がいいのだが、電車はまことに豫期しない事が突發する。例へば停電とか斷線とか、豫告なしだから、豫定なんか全く狂つて了ふのは珍らしくない。今日は歸りにまごついたが、西大寺驛から直行であつたせむか、大阪から併せて約三時間半で歸宅ができた。

10月30日。火曜日。晴(京都)・曇(大阪)。

河原町六條停留場に近付いた時、前の車が荷車挽と衝突、割合に簡単に済んだが夫でも三十分許停車。此日は驛前の奈良電切符賣場も珠數繋ぎで、切符を買ふのに二十五分を費したり、折角相當に早く家を出ても大して効果はなく、やはり十二時に寺へついた。危いところでD師他行前に出會ひ、午後病院で注射をして貰つた。其足で「書物」を取りに行つたところ、大鐵終點傍の住吉行電車を待つてゐる二列側面縱隊の烏合行列は、從來私が見た最長の

四天王寺の焼失と復興

五七七

もので、これでは電車が五六臺位来なければ埒はあくまい。空は大曇りでいつ降り出すかも知れない。蝙蝠傘は持つてゐるから安心はしてゐるものの、土砂降りになつては困る。住吉方面からの電車は来ず、大鐵終點へ郊外から車が着く度に客数は増す許り、といった状態が何分かの後、不景氣な檻籠車が漸く一臺着いたら、係員の努力が大に預つたには違ひないが、夫でも私の前の半分位はどうか詰込まれた。

實際此度の戦争のお蔭は、烏合の衆が整然(?)と行列をつくる様になつた事である。先づ如何程ズーゾーしい人間でも、此頃は間へ割り込まなくなった。小生は昔英國の雑誌「スチエチオ」の原色圖版に「QUEUE」と題し、交通巡查の袖章をつけた右手と、一列に並んでゐる男女の足元だけを現はしたのを見た記憶がある。此時我國の群衆が先を争ふ無秩序無統一一をなさけなく思つたことがあつたが、これだけはやつとできる様になつたらしい。併し、さとなると出来たてのホヤホヤだから、係員でもゐなければ——時にはゐても——洵に脆く、碎れ易いのが缺點である。同じキューでも英國製のはとても堅固で、棒で突いてもこはれる心配はなし。

次の車は幸に大型であつたので、やつとのれたが、とても大變な有様。辛くも豫定の停留場で下車し無事目的を達した。これでは到底途中から乗車見込はあるまい。時刻が晚くなる程人数は増すだらう。先方でも私にもう少しあとになつたら一層増すだけだと注意してくれただでも判る。終點からならいくら見込もあらうと考へ、態態「すみよし」迄行つたところ、これはまたどうしたと空明きで、空席の方が多し儘發車、天王寺に近くなつて十人ばかり立ち、僅に十八分で大鐵前の起點に下車する事ができたが、先刻私がつた住吉方面の行列は終りの方は朦朧として見え、途中で擦違つた車は何れも壽司詰、各停留場には人山の有様。

大分くたびれたので市電を待つたが、大阪驛行の④といふ札を出したのが中中來ないのに、行列は此亦同様蜿蜒數百メートル。前の人は、こんなでは五臺待たなければ駄目らしいといつて乗權した位だつたが、終點だからいつか順は巡つてくる。急いで損するのは夕立に遭ふばかりではないから根氣よく立つてゐな。幸に大型が「臨」と共に三臺續いたため、其お蔭で歩かずに「上九」迄のり、歸寺したのは十六時五分。雨も降らず明るいうちに歸れたのは有

難かつた。併し遂に十九時頃から雨となり、二十時消燈した後は雨も可なり劇く、風も少し出て来た様であつた。前から氣になつてゐた「書物」がWさんの手許から希望冊数だけ著者に戻り、頼まれた方方に手渡する事ができ、満足をして戴けると思ふと、私も嬉し氣がする。よく今日とりに行つたと思つた。

夜はM君蒐集の切抜帖の一なる「趣味隨筆集」(同君が勝手に命と、新刊【東大寺】(これは寺文庫に)とをゆつくり明るい電燈の下で讀むことができた。兩方一緒に讀み度かつたが、さうはいかないから、交替で通讀(本文)通覽(圖版及び挿圖)を。時間正に三時間半でつかれた。尤も後者は實はあちこちと拾ひ讀み程度で、佛像解説は全部ぬかした。

京都印書館から價四十圓で「東大寺」といふ書物が出版される事は、前から新聞廣告で承知してゐたし、M君から寺である目的のために購入の由をきいてゐたし、解説の様子も薄薄承知はしてゐたから、寺で買つたら夫を見せて戴いた上で、欲しかったら買う事にしようと思つて居た。ところが此日自室に入るなり棚の上のせてあつたので、扱ては愈よできな。いつも變らぬM君の厚意、早速おいといてくださつたのに相違ない。帽子もとらず外

套も既がす鞆もかけたまま、机上に運んであけてみた。

頗る大きな書物で菊倍版、今の事だから無理はない、決して文句をいふのではないが、アト紙もインクも大變ひどい。奥附に初版一千部、價五拾圓の稅拾參圓六拾錢、併せて六拾參圓六拾錢は少少高い様だ。昔なら拾圓でも考へる程度のもの。紙がないのなら致し方はないが、ある所にはいくらでもあるさうだから、一層の事合計八拾圓位にして、もつと上製にできなかったものか。著者は東大寺管長大僧正清水公俊親下。ただし道路傳ふるところによると、管長さんは東大寺の代表者として、お名前を拜借したので、殆んど全部□□さんと仰しやる方が纏められたといふことである。併し奥附の注文協承認番號のあとに「企畫立命館出版部」とあるのでみると、數人の手で出来上つたらしく、尙ほ私はある方面から、計畫をしてから三年目に世に出たといふことも聞いてゐる。だから戦時下あらゆる物資が不足の際よくマアこれだけの書物ができた、關係皆様の御苦心を拜察し、自分の身に引比べて満腔の敬意を表したのであつた。序文は早大教授文學博士會津八一氏。

敬意は表したが、遠慮なしに言はせると、やはり不満な點がある。少しばかり拾つてみる

と、第一に三月堂の西側面は、見逃すべからざる立面の一であるのはいふ迄もないのです。されば筆者も態態二頁大の圖を入れておいてになります。惜しい事に綴込に注意が足らなかつたため、中央の折り目が深く入り、全部開く事ができません。其結果折角の目的は全然達せられず、洵に遺憾千萬と申すほかはありません。恐らく筆者もこんな筈はなかつたがと思つて居らつしやるでせう。あんな場合は脚を思ひ切り幅廣くすべきだと思ひます。第二に圖版の解説に圖版の番號を入れてあると、翻譯の際引くらべるのに便利なのに、夫がないから探すのに時間がかかり、甚だ厄介である。第三に同じ頁に料・肘木即組物の圖二種を掲げ、一つの方は「□□堂組物」とし、一つの方は「□□堂料栱」としてあるのは目立ちました。素人は「組物」と「料栱」とは異つたものだと思ふでせう。これ等は不統一といふべきで、どちらも同じものだから、どちらかに一定した方がいいでせう。第四に南大門の説明に、天竺様の遺構は此門と播磨の淨土寺の二棟を残すのみとあるが、これでは不完全で且つ不足であります。其あとに「然も七手先ナナテノサキといはれる差肘木の構築法は見事なもので……」と書いておいてなるが、七手先にルビがつけてあるのでみると、誤植ではないらしい。尤も昭和

五年の暮近く發行されたある案内記に、東大寺南大門の解説中、料栱は六手先なる旨を極めて判り易く、巧に記したのはいいが、断面圖迄掲げてゐながら、態態括弧に入れてまで「(上層は五手先)」としたものもある。此等で見ると、此等の筆者のみならず、一般に何れも「手先」といふ術語をよく御承知ないのではないかと思ひます。第五に大佛殿の解説に現在のものは「……公慶上人の勸進で徳川時代に再建され、七間四方の大佛殿となつた」とありますが、全然様式等に觸れてゐないからどうも物足りません。半行でも一行でもいいから、何とか書いて載き度かつた。「江戸時代の細部の混じた天竺様」だけでも結構です。第六に三月堂前石燈籠に就き、特に竿と中臺とに讚辭を呈してゐらつしやる様ですが、あんなのは鎌倉時代にはいくらもあります。あの燈籠は全體として傑出してゐるので、無論細部だつて申分はありませんが、他には遙に優れたのがあります。第七に一入粗悪な紙に「東大寺伽藍配置圖」を刷つて挟んであつたが、東塔院址・西塔院址に重要な「院」字をぬかし、單に東塔趾・西塔趾としてありました。「城址」等を「趾」に作るは誤、「趾」を「址」と混用すべからず、等と辭書にかいてあります。此點小生の様側に似てゐます。等等。

寫眞にしても、下から見上げたので、折角のところ判らなくなつたり、もう少し、といつてもほんの僅か下の方まで寫せば、いろいろの特徴が見えたり、數多くの利益があるのに、してないのは専門家を除外したせひでせう。近所の飛鳥園へ行けば完全なのが容易に入手できた筈です。飛鳥園主は管長猥下と親交ある由、豫て承知して居りました。だから御相談相手として申分がなかつたと思はれますのに、惜しい事をなさいました。又奈良には日本建築の専門家が多數居らつしやるから、其部分だけでも執筆を依頼なさつたら、完全なものができましたらう。勿論大衆向きのもので、論文集ではないのですから、専門家では固くなり過るとでも思召したのかも知れませんが、決してそんな事はありますまいと考へます。何れにしても惜しいものであります。私は只今批評家の位置に居りますので、自分の事はすつかり棚へ上げて、勝手な事を書きました。妄評多罪。

10月31日。水曜日。雨後曇。

昨夜は小暴風雨であつたが、夜が明けてからは雨も歇み風も風ぎ、天候恢復の徴が見えだ

した。豫て寺側から話があり、焼残つた建築物の内、見込のありさうなものを一應觀て貰ひ度いとこの事であつたから、午前中M君と一緒に通用門(本坊に出入の門、元和三年再建といふ。元の乾門、明治四十二年現地に再建。)・元三堂(同元和三年の再建と云)・中之門(元僧坊の西門故一に僧坊門といふのだ。さうで、同じく元和三年再建と傳ふ。)・六時堂(元推寺本堂、文和九年再建と云)とをみた。此うち「中之門」傑出。今日迄何度も通つたが、實は一度も注意しなかつた。「通用門」此に亞ぐ。

中間設計として提案した塔の五つの輪は、大部分できてゐた。併し出來上るのは11月一ぱいたつても、此分では保證ができない。尤もいくら輪ばかり出來上つたところで、石が出來なければ何もならないし、石が出來ても四天王の種子の彫刻が完成しなければ駄目である。夫に復興事務所の開設も、今の所相當に遼遠感がある。急いでみても實は何にもならない。先づ來る昭和21年春の彼岸迄には、塔も形ぐらゐは纏るかも知れない、といふ工合に氣永く構えた方がよささうである。去る9月2日、製作中の輪をみて、10月末迄にはむづかしくはないかと思つたが、果して出來なかつた。

歸りの電車、上六・奈良間は二輛連結でも割合にすいてゐたが、奈良・京都間はとても大

變、奈良で既に満員の有様、途中停車の度に怒罵・慢罵・悲鳴・小兒の號泣が騒然として耳朶をうつ、腰をかけてゐても身動きは勿論、顔を左右に向ける事さへ出来なかつた。つまり右にも左にも手があつて、窓枠なり硝子戸の框なりにつかまつてゐたからである。各停留場に残されたものも相當にあつたらしい。此状態で夫でも京都驛に着いた。奈良終點から米進駐軍の兵隊が三人許りのつた。京都迄来たか、途中下車したか知らないが、さぞあきれたらう。こんな有様であつたものの、電車は大阪でも京都でも、市電まで殆んど待たず、何れも二三分のことでのれたせむか、三時間十五分といふ記録的短時間で歸宅し得た。書齋へ入るなり室の時計は丁度十六時を打つた。

後記

脱線に脱線を重ね、いくら隨筆でも少し度外れではなかつたかと、我ながら怪まれる「復興記」は、滿4ヶ月を以て一先づ終りとした。實は博塔の落成した時が手頃ではないかと思

つたけれども、どうせ來年になるし、また毎回この様な記し方をしてゐては、徒らに長たらしくなる許りだから、夫でやめたのである。一度大阪へ行つて歸つてくると、時には即夜随分晩くまで起きてゐて、全部書いて了つた時もあるし、疲勞した時は早くぬる代りに夜中に起き出して書いたり、大概忘れない間に記載したのである。6月の極末に初めて話があり、7月1日に行けば尙更きりがよかつたらうが、其時はそんな事は少しも考へてゐなかつたから、今になつては何ともならないが、10月の末迄に出かけた事が十回、其内譯

7月 一回 2日、26日。

8月 三回 2日・3日、14日・15日、27日・28日。

9月 一回 14日・15日、21日・22日。

10月 三回 9日・10日、22日・23日、30日・31日。

で、其日歸りが二度に一泊が八度。可なりの頁數になつて了つた。

漸くの事で近日中版の種板一箱入手ができさうだから、此際焼址の寫眞を撮り直して見ようかと思ふ。尤も相當に苦心してブローニー型ではあつたが、イーヌトマンのパンクロ二本、

富士二本、オリエンタル二本、やつとこさで掻き集めツァイス・イコンの寫眞機を借り入れ、寫すには寫したが、これは仔細あつて未だ現像ができず、全部無駄になり闇から闇に葬られて了つたのは、洵に遺憾千萬であるが、これは致し方がないとあきらめ、新規蒔直しにするつもりである。さうして幸に夫等が使用し得る程度にできてゐたら、増塔の落成迄のところを一段落として、文句を隨時書き足し、夫だけは別に纏めて置かうかとも考へてゐる。今度はもう前程脱線はさせもせず、又させるだけの材料もあるまいから、さう長たらしくなる心配はないつもりである。

而して最後に、初から終り迄を通じ、適宜取捨選擇して、できたら隨筆復興記を書いて見ようかと思ふ。

(昭和二十年明治節 稿了)

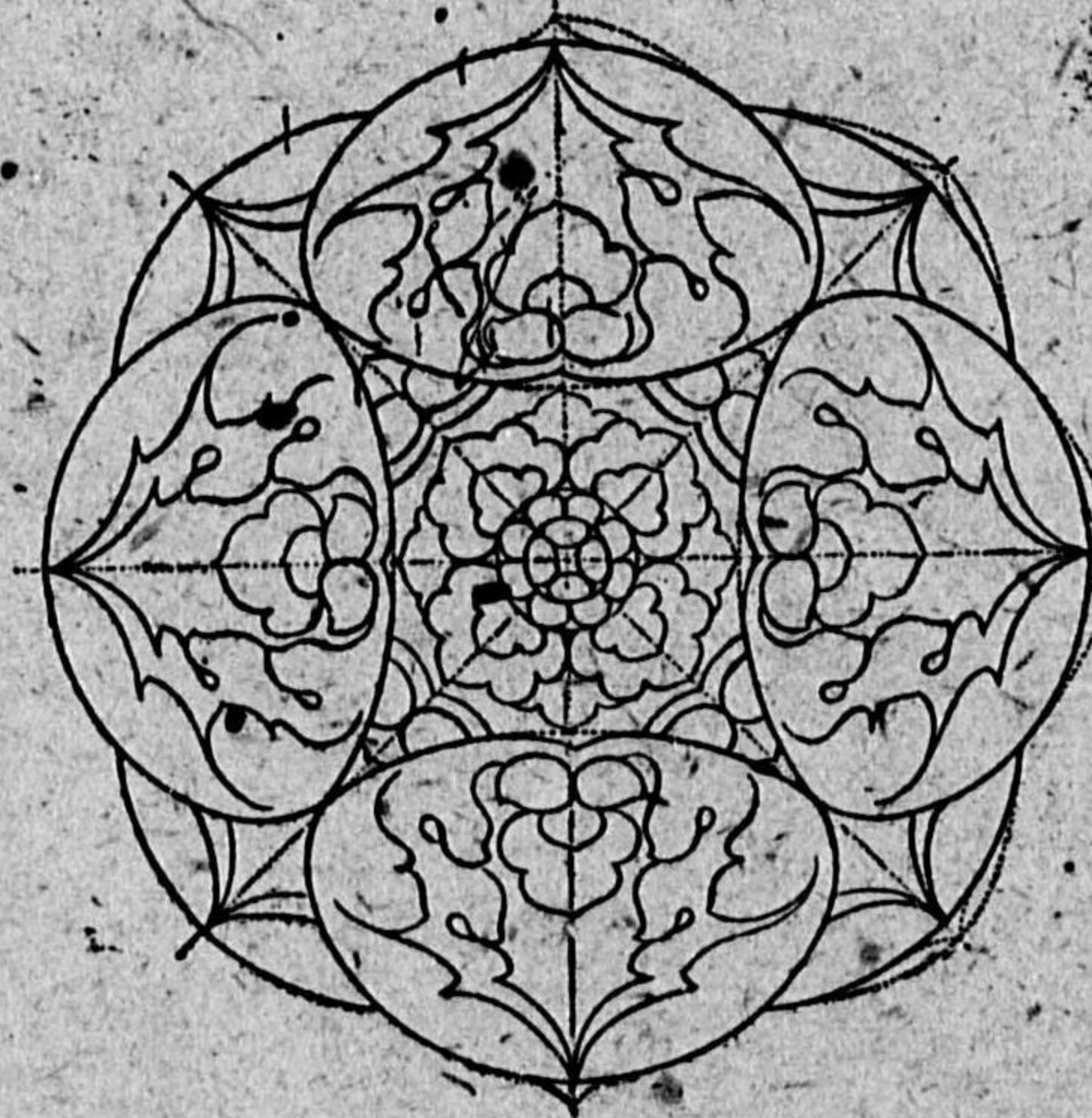
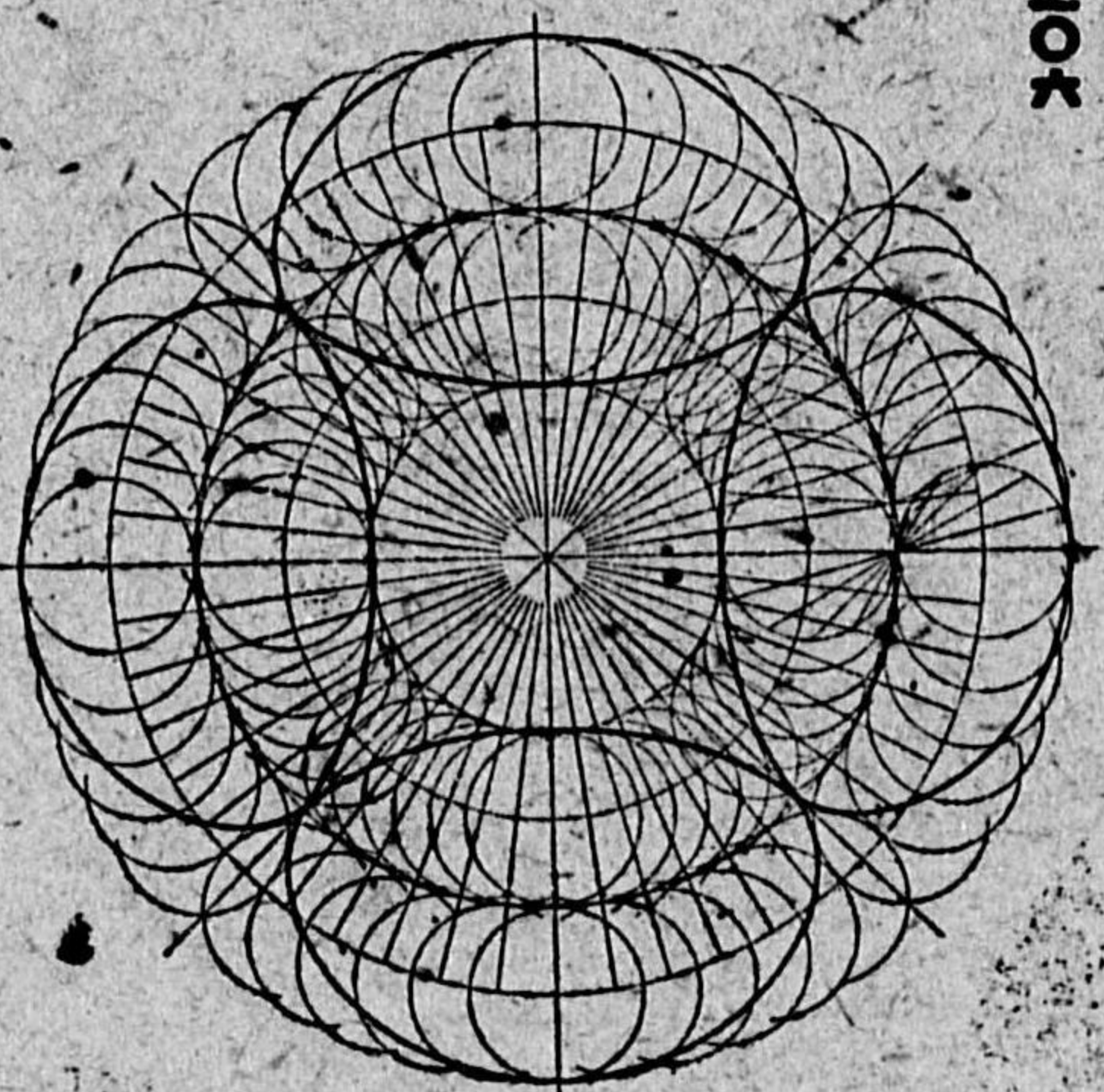


本文218頁註に「擺線サイクロイドの説明をしておいたが、外擺線サイクロイドのことを書いただけで、内擺線サイクロイドには觸れなかつた、其爲一般の讀者諸君は了解なきりにくかつたのではないかと考へる。拙著には時に此名詞を用ひてあるから、此際ここに一通り判り易くかいておくのも無駄ではあるまい。擺線とは一直線上を回轉する圓周上の一點の軌跡なる一種の曲線サイクロイド(Cycloid)の邦譯である。先づ任意の大きさの圓があつたとして、其圓周を小さい圓が轉がるとする。勿論小圓は大圓の内側でも外側でも、どちらでも轉がれるわけである。今假に小圓の直徑を大圓の1/4としたとき、此小圓周上の一點は、小圓が轉がれば點も一緒に轉がり、此小點は小圓が四度完轉すると元の出發した位置に歸るのである。其軌跡は「一〇六上圖」の様な花模樣、即我我のいふ四葉ができる。外側の曲線を「外擺線」内側の夫を「内擺線」といふ。

其四瓣のうちへ文様をかくと、「一〇六下圖」の様な面白いものができる。各瓣の先きを少し捲み出しても、其ままで、或は複瓣にしても、しないで同じ事でも、このままでどこにでも、建築裝飾として間に合はせる事ができる。時には反て面白いかも知れない。

若しまたある大きさの圓が、同一直徑の他の圓の圓周上を轉がった時、其回轉圓周上の一轉の軌跡はゆるる心臟形となる。これを「心臟形曲線」(カーディオイド(Cardiod))といふ。此もそのくりそのまま裝飾文様の輪廓たり得る。

107

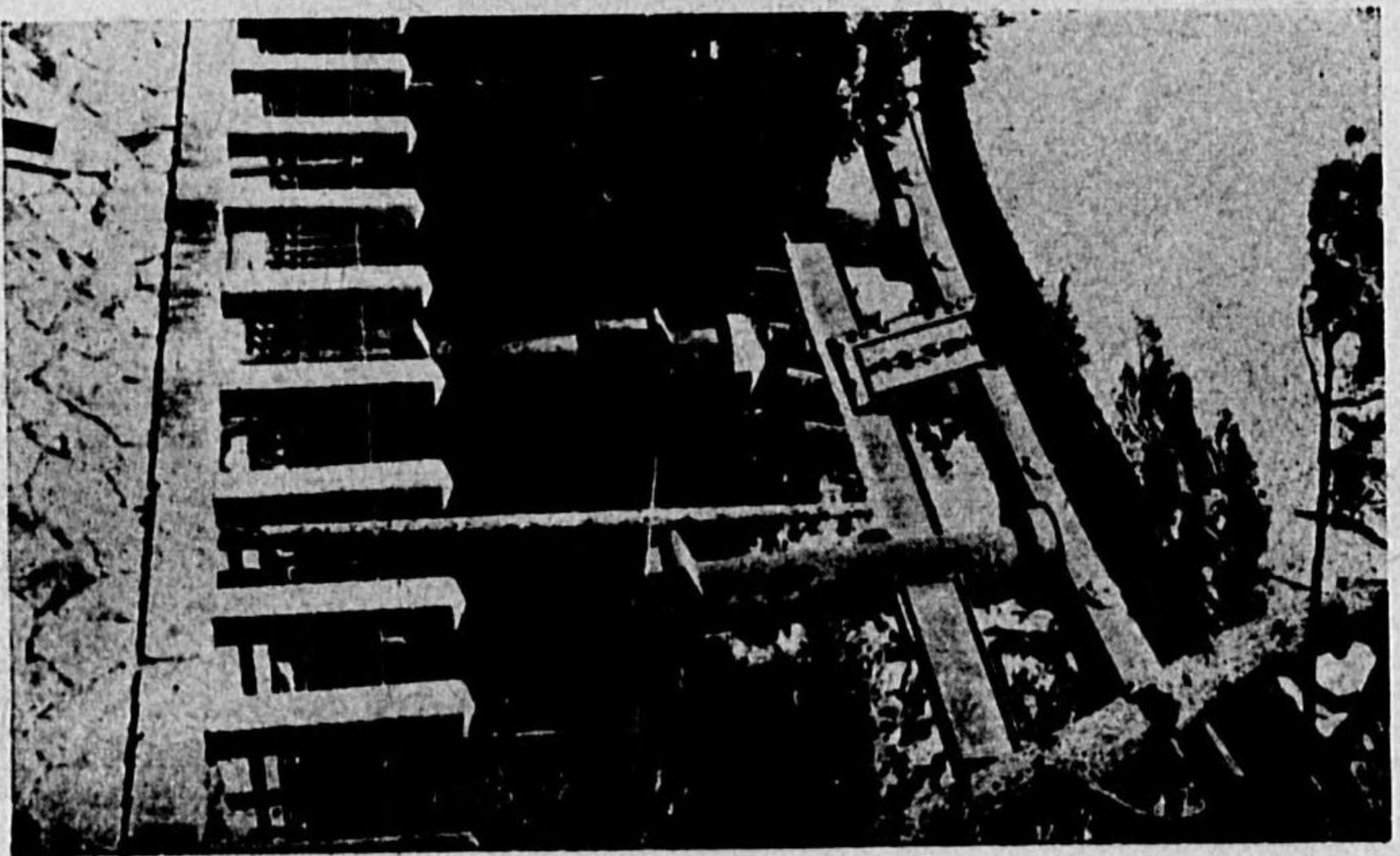
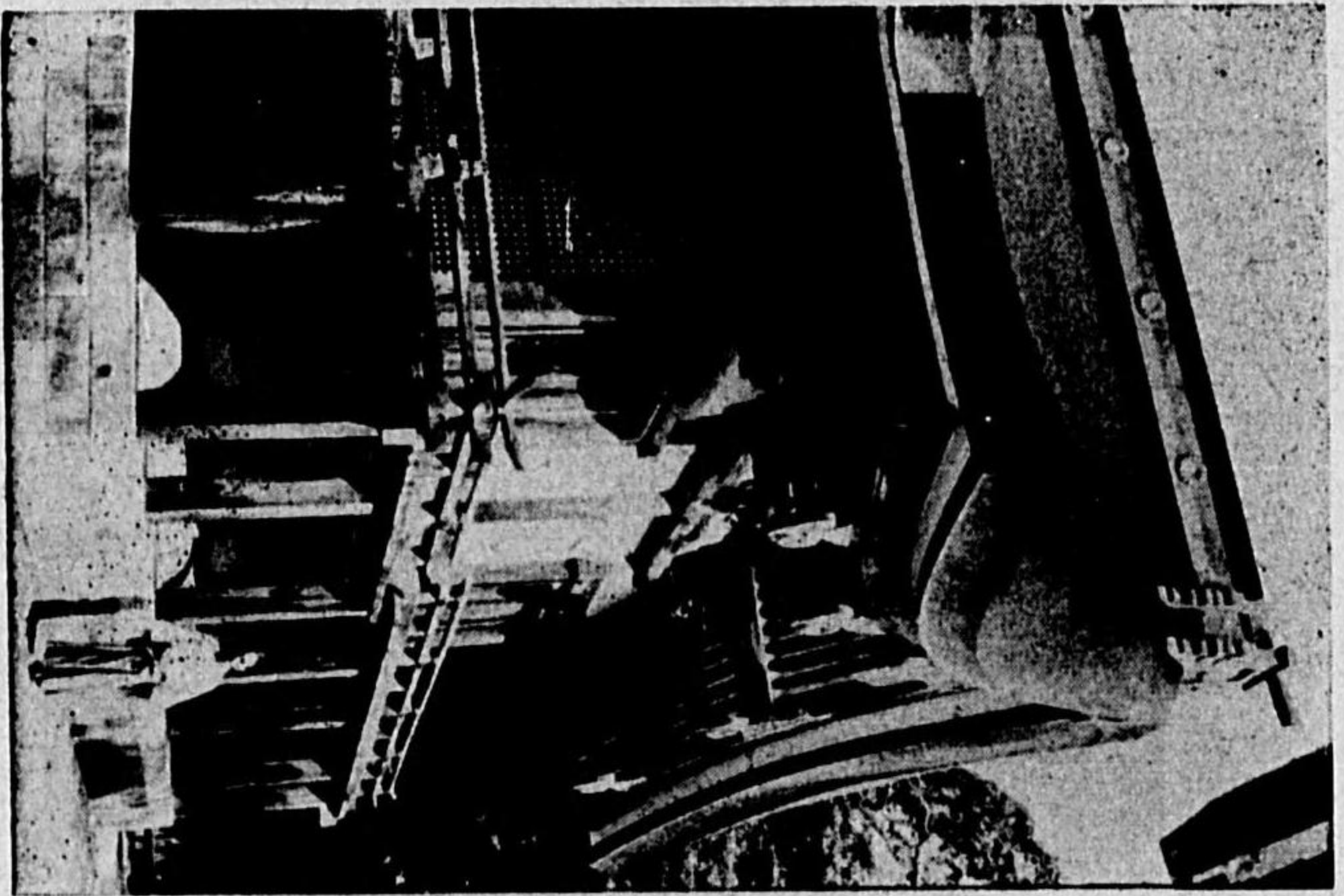


此場合は大圓の外側及び内側を直徑1/4の圓が回轉したとて、其圓周の一點の軌跡は、恰も四葉の花をなす。此圖の徑が大圓の1/4の徑である。又小圓の徑が大圓の半徑に等した時は、内擺線は曲線にはならず、且直線をなす。尚ほ此の曲線は其後でも建築裝飾の面白裝飾文様の輪廓に應用得る。

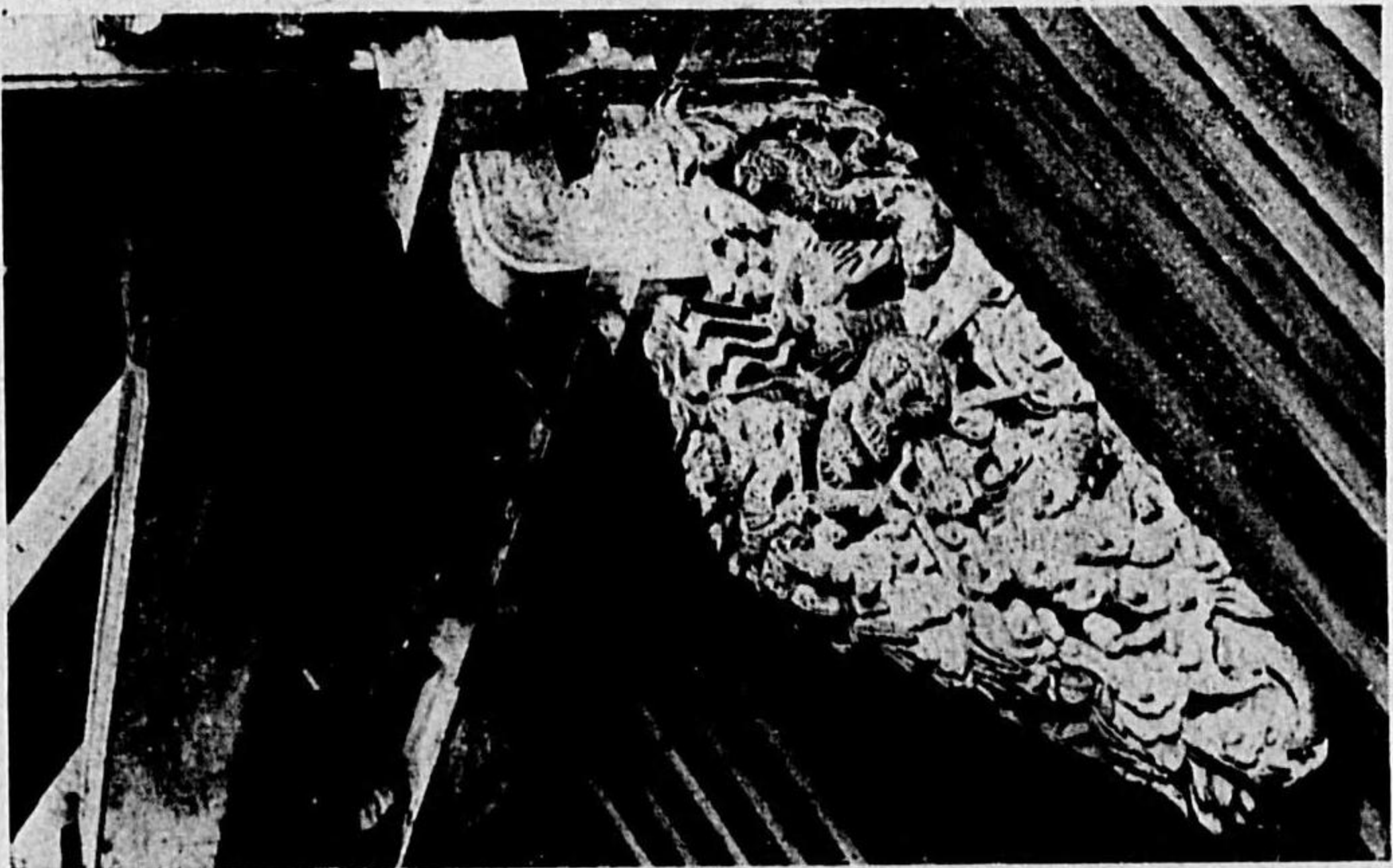
圖版 五八頁 圖數八七

但し左の番號の圖は本文中にあり。

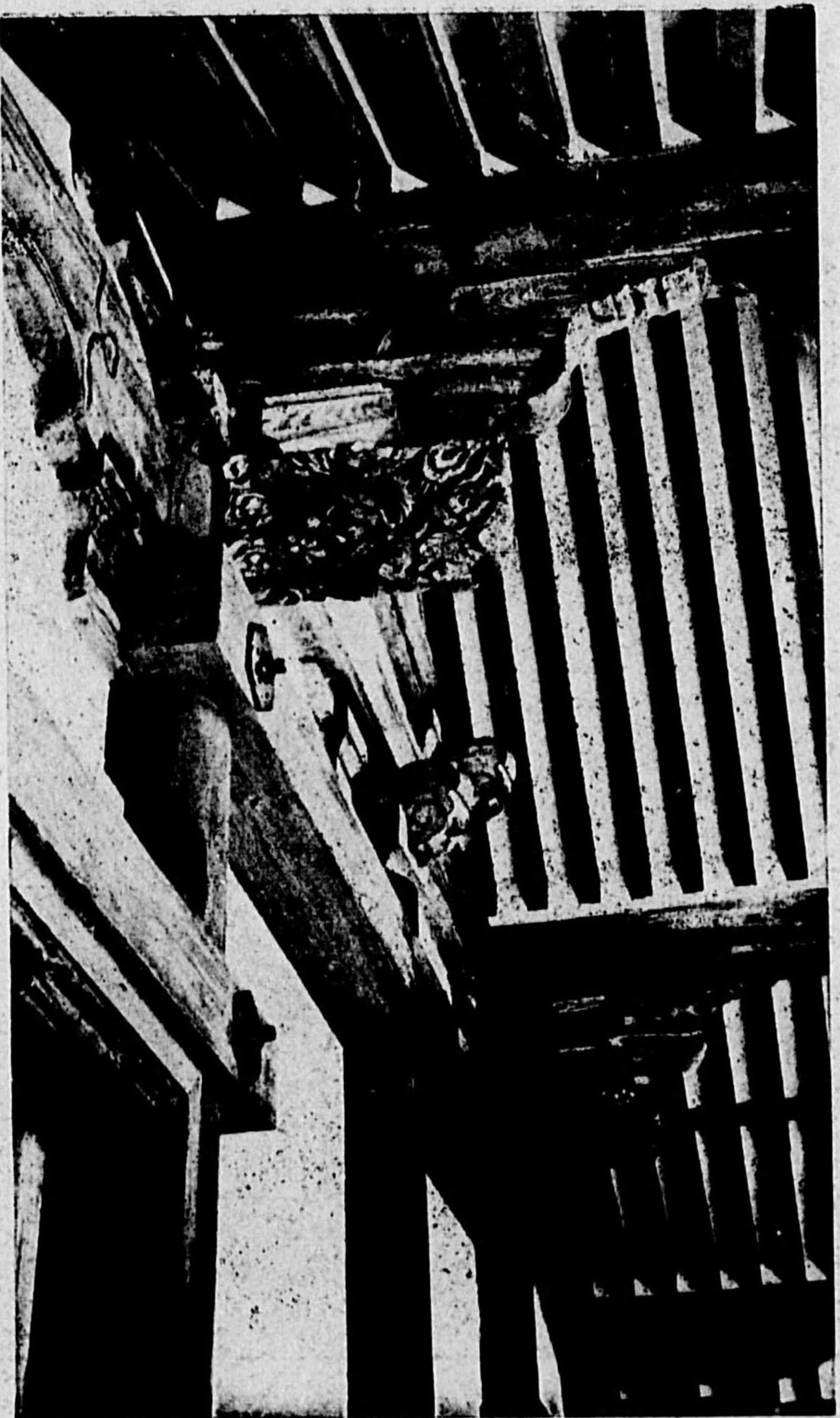
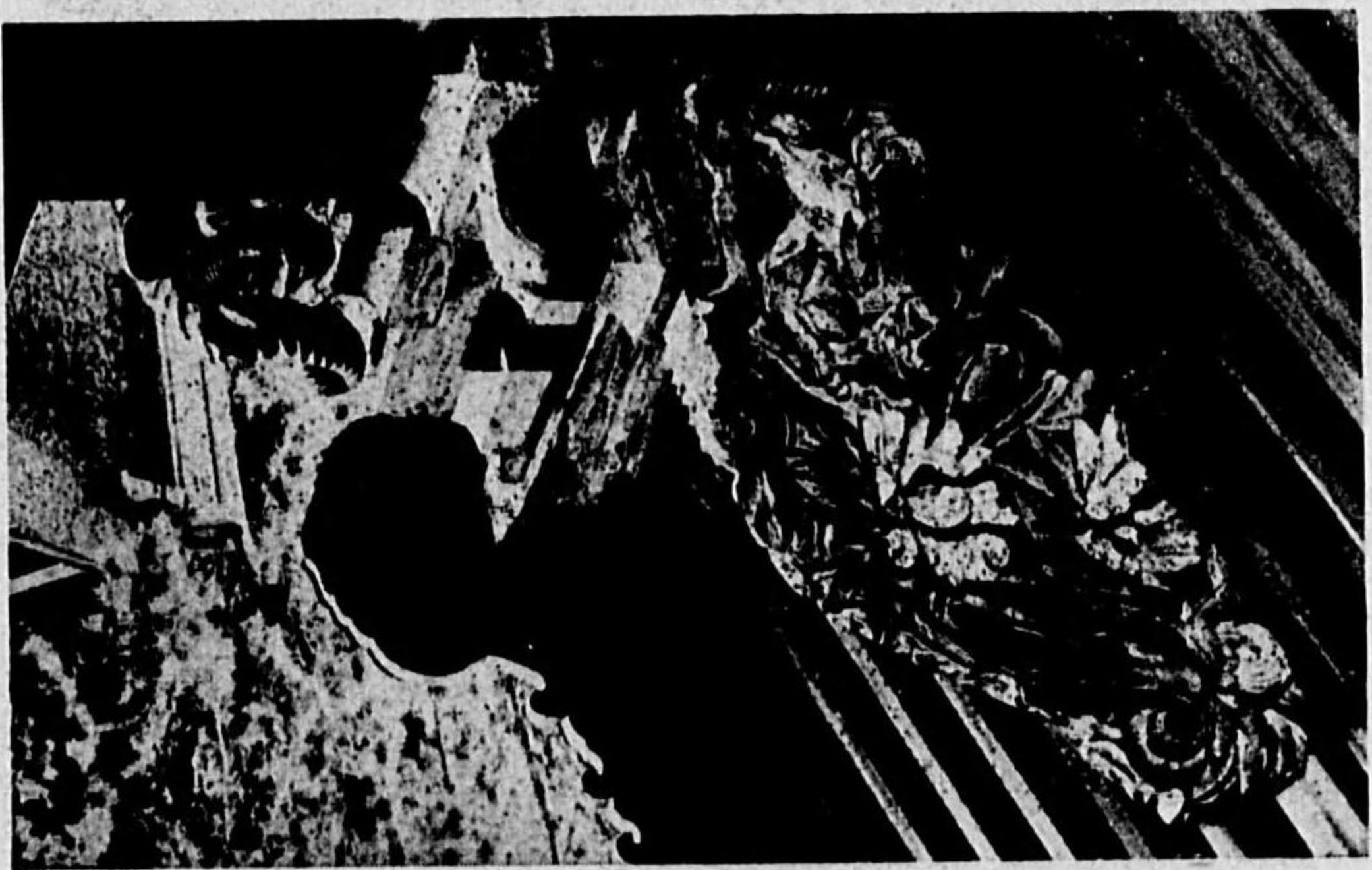
- 一四・一五、二二・二三、四二の二・四六、五二・五三・五四・五五、
七八・七九、八三、九三・九四・九五・九六・九九、一〇〇・一〇三、
一〇四・一〇五・一〇六。 以上



左、有、
 一。氣比神宮大鳥居
 二。同 本殿左側面
 (昭和十八年五月十二日)
 一は丹塗の兩部鳥居で、控柱は八角形。二は本殿の左側面。屋
 根の型式が特殊だからとて、兩流造といつてゐるが、つまり前後
 同じで切妻造に過ぎないのである。昭和二十年七月十二日夜半兵
 火に焼亡したが、大鳥居のみ幸に罹災を免れた。



右三。氣比神宮本殿向拜手扱 其一 内側
左四。同 其二 外側
内側は「牡丹に唐獅子」、外側は「雲に龍」。
(兩圖共昭和十八年八月二十三日)

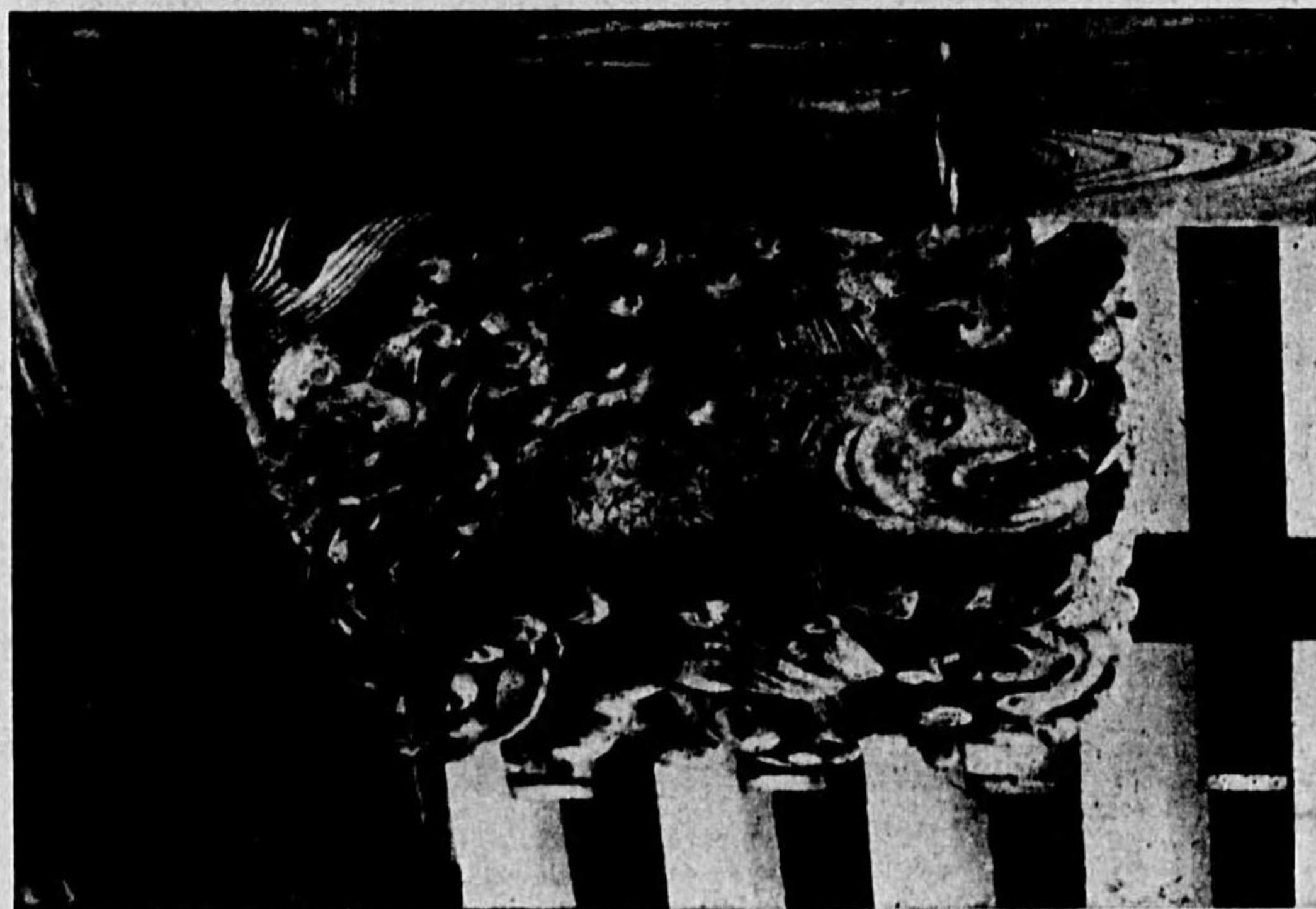


五。氣比神宮本殿左側面一部詳細
側面四間のうち、中央二間の木鼻・料枘等を示したる圖。

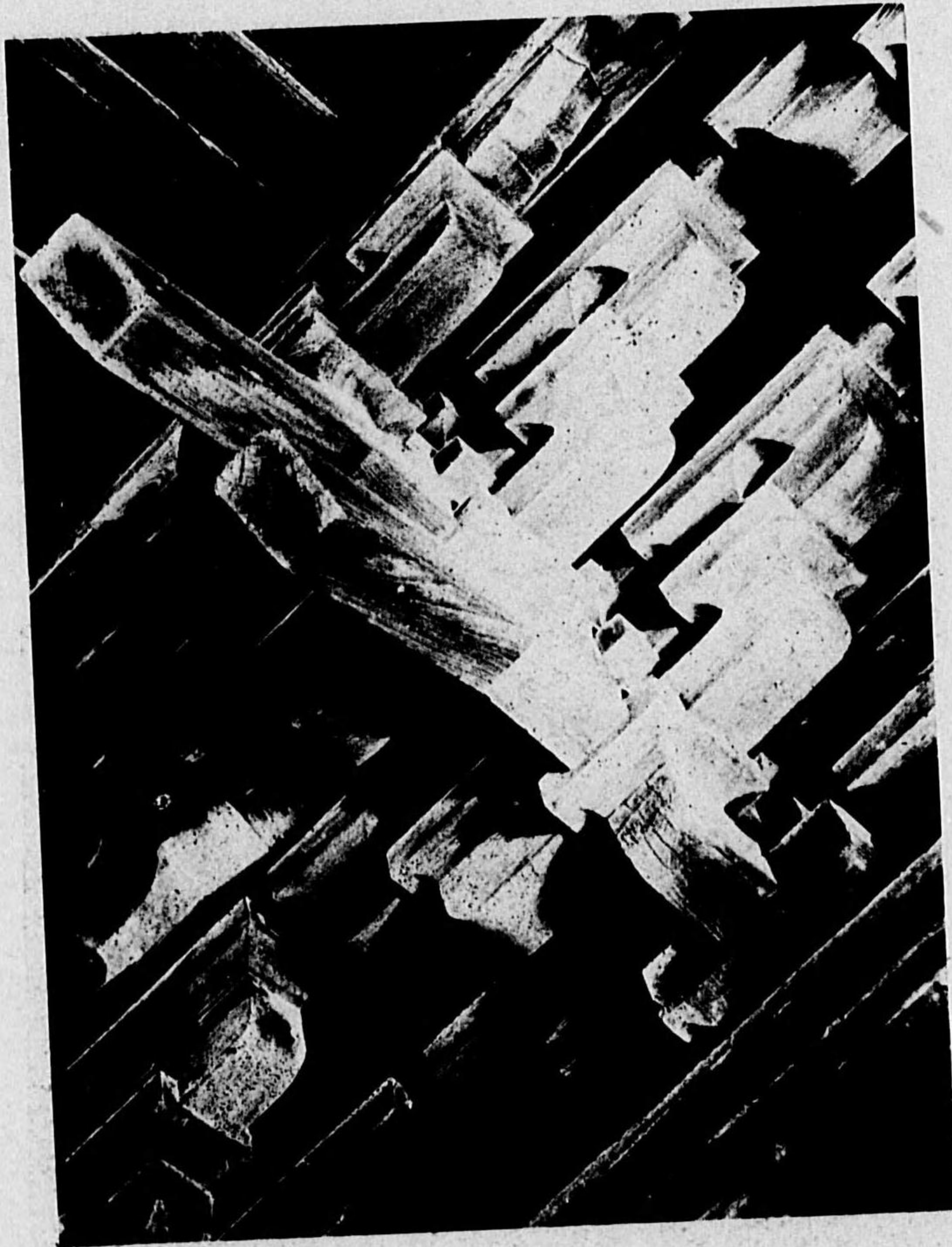
(昭和十八年八月二十三日)



上, 八。氣比神宮本殿木鼻 其三 (浪に兎)
 下, 九。同 其四 (桃に猿)
 (上, 昭和十八年八月二十三日。下, 昭和十八年八月二十四日)



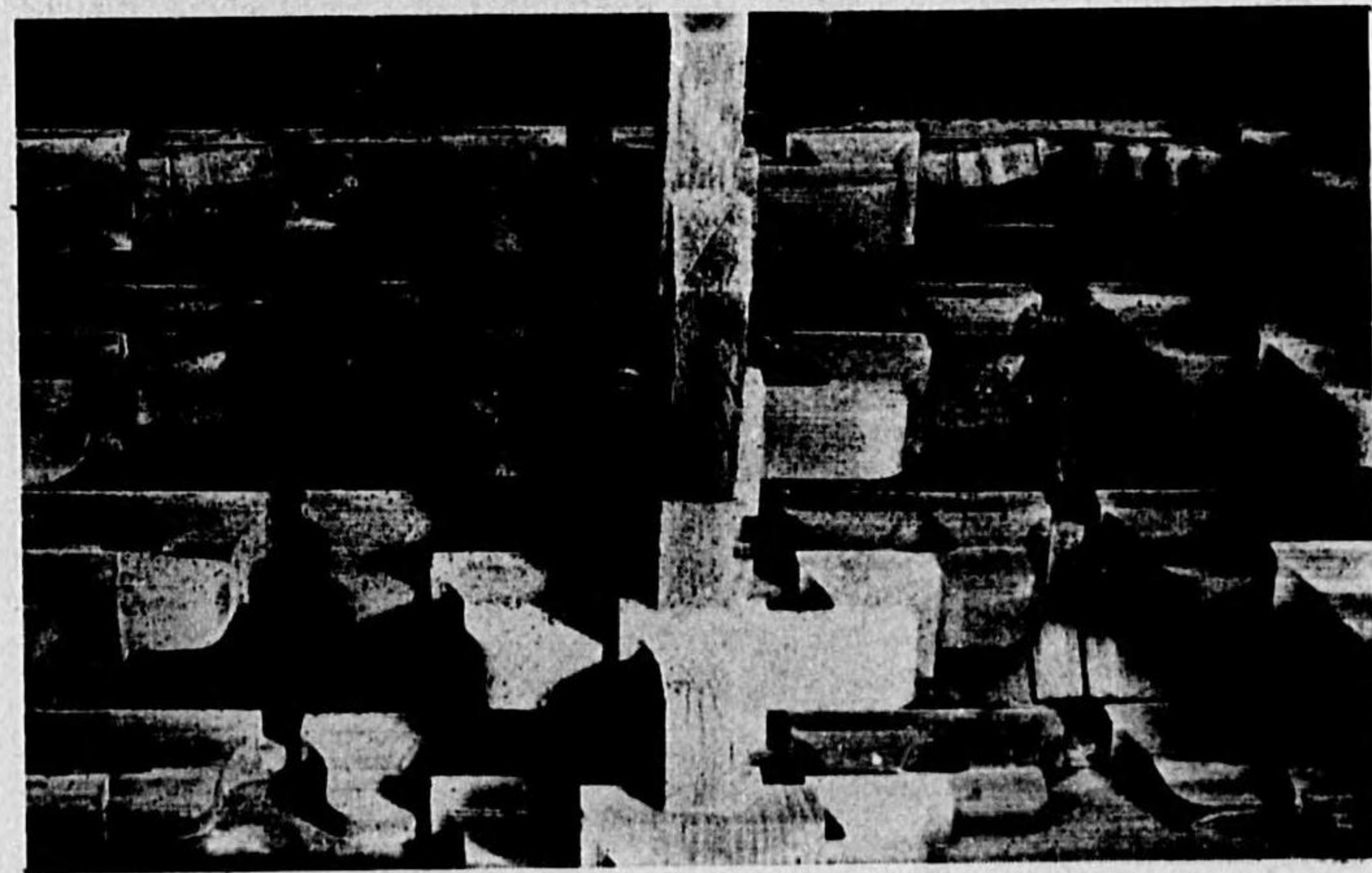
上, 六。氣比神宮本殿木鼻 其一 (桃に人物)
 下, 七。同 其二 (浪に魚)
 (兩圖共昭和十八年八月二十三日)

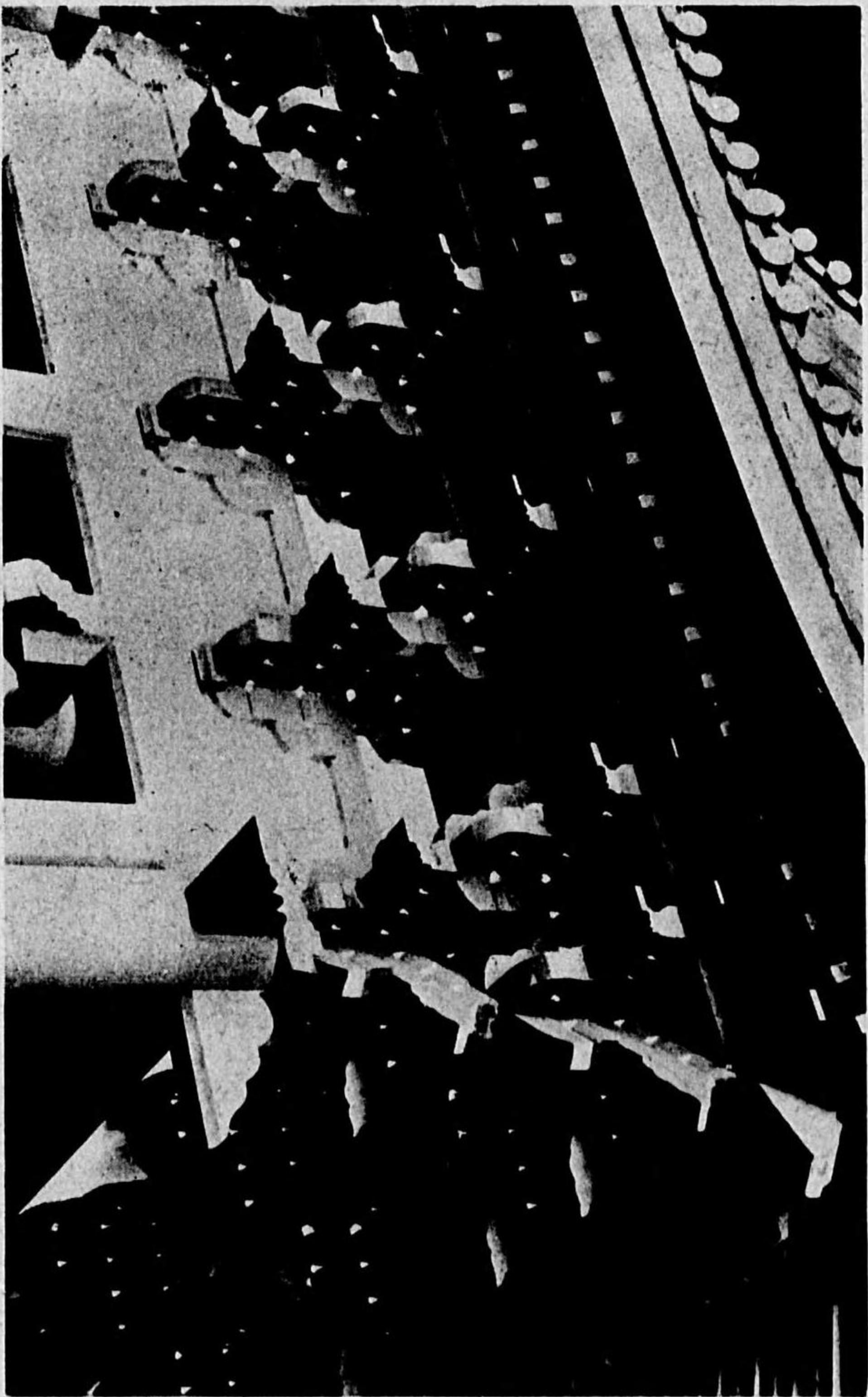


(前頁より)物を存したが、戦災のため、昭和二十年七月十二日夜半惜い事に全焼した。此塔は初重のみ唐様で料拱三手先、六個の「連料」を用ひてあった點に於いて類例を見なかった。

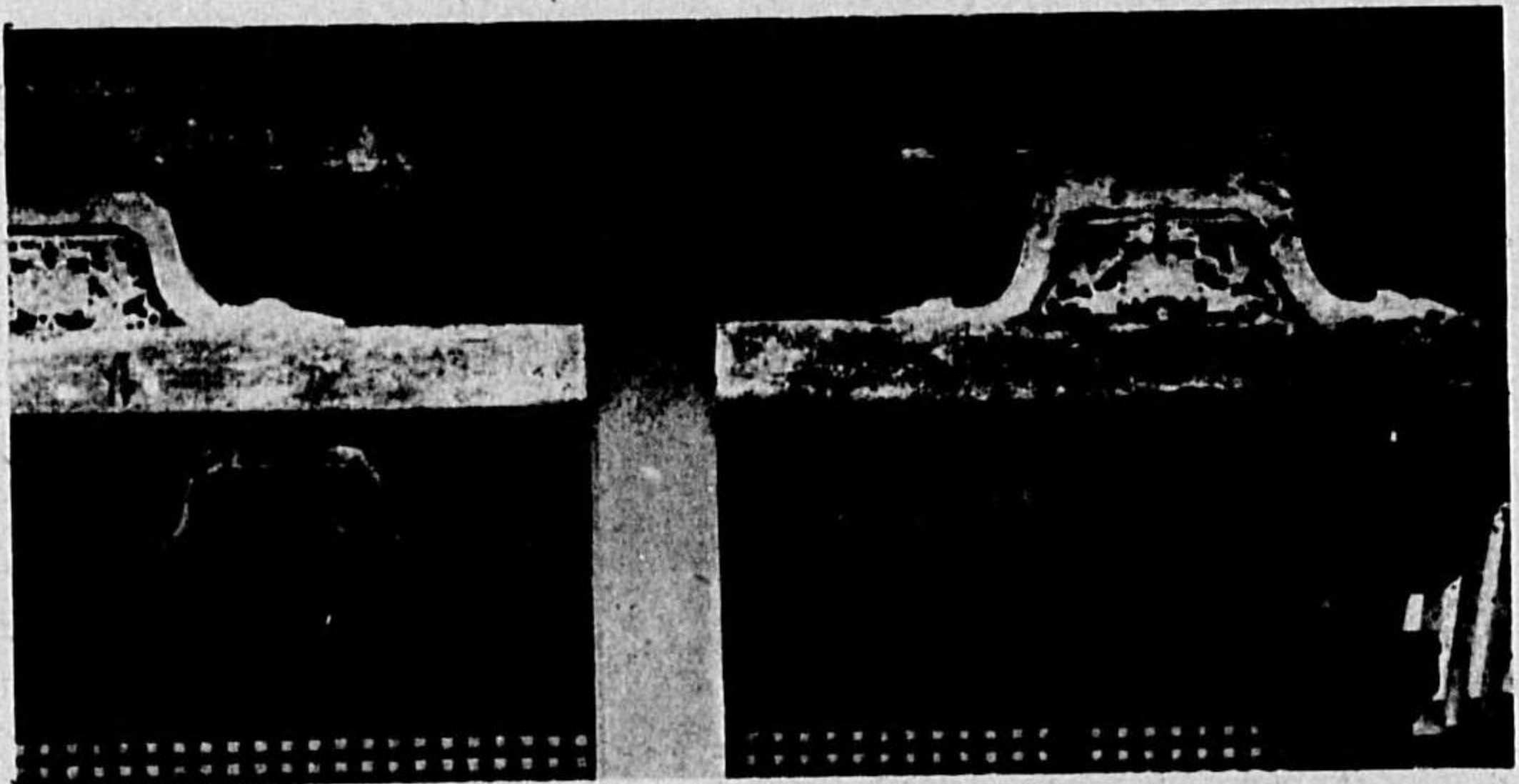


此頁上、一〇。香臨寺三重塔全景
 此頁下、一一。同 初重料拱 其一
 次頁、一二。同 同 其二
 (三圖共昭和十八年八月二十四日)
 香臨寺は敦賀市敦賀町大字曙、氣比神宮の裏手の狭い往來に面した寺で、本堂・三重塔及び其他二三の建(次頁へ)





一三。東大寺鐘樓梵刹軒料拱（明治四十三年一月九日）
今英國倫敦市南謙信屯博物館にある。



下、一六。廣八幡神社本殿部分 其一

（昭和九年十一月二十四日）

上、一七。同

其二

（中野藝術院）

一六は昭和九年初めて参拜した時の寫眞であるが、一七も其時の撮影に係る。上圖に於いて上方のは向拜葦股であるが、左方の輪郭が際立って拙劣な事が、此小さな圖でも明らかである。何かの都合で輪郭だけ取替たものと見える。



101

一八。廣八幡神社本殿中央墓股 (昭和十八年九月六日・竹原吉助氏)

文部省の調査にも「墓股の輪郭及び内部の透彫は頗る優秀である」とあるが、全くその通り、稀にみる優美流麗な唐草が入れられている。本殿に用ひてある六個の墓股は、向拜中央のもの輪郭が後補であるだけで、あとは全部元のまゝ。輪郭は源を平安後期に發し、鎌倉時代に十分に洗練され、夫がそっくり其儘室町時代に最も良好な状態で引繼がれたものである。一八に於いて脚間の彫刻は洵(下へ)



111

一九。廣八幡神社本殿左墓股 (昭和十八年九月六日・竹原吉助氏)

(上より)に珍らしい文様で、飛鳥時代の忍冬唐草の系統と考へられなくもない。元の色は未詳だが、現在は唐草は白線に、左右の花は白く塗っており、實に美しい。又一九の牡丹唐草は、室町としては類例も多いが、やはりこれも其發達の順序をよく現はしてゐる上に、申分のない出来栄である。平面的だといふ非難は、當代のものにはする方が無理である。



上、二〇。廣八幡神社本殿中央葦股裏面

下、二一。同 左 葦股裏面

(物差は曲尺の約一尺(一呎)・昭和十八年十月二十日・遠齋九郎氏)

片面葦股の裏なんか、何のために寫して面も圖示する必要があるかと、不思議に思ふ諸君は、表ばかり見ないで、好機會のある毎に、裏面の一見をすすめる。裏は此様に平たくしてあるのと、曲線の兩縁から肉をそぎ取ったのと二種ある。後者は曲線の輪郭を明瞭なら

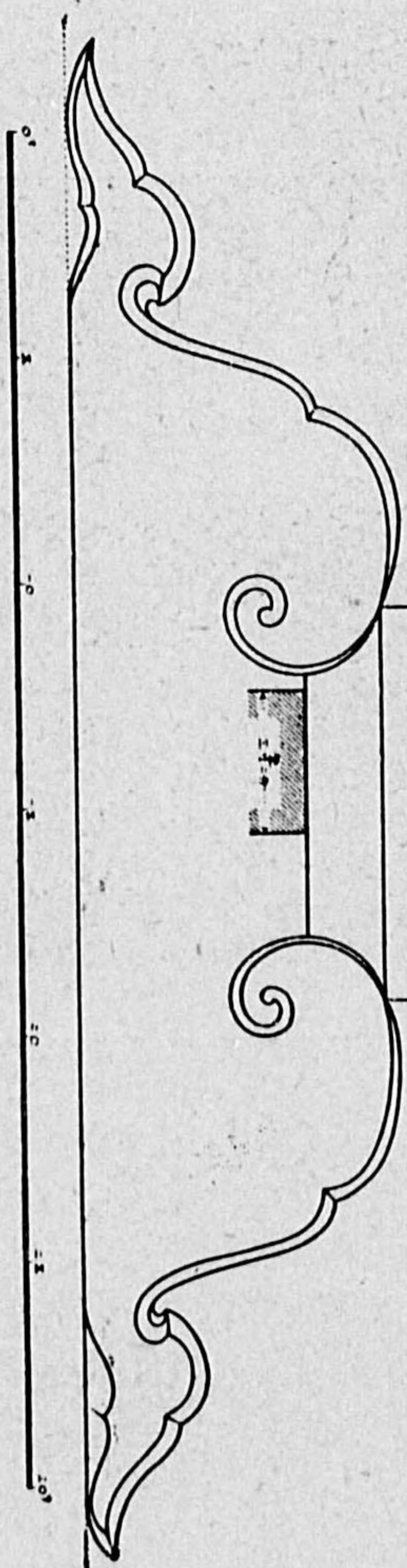
しむる効果はあらうと思ふ。これは破損の虞が多いの

で、さうしなかったものと推定してゐる。

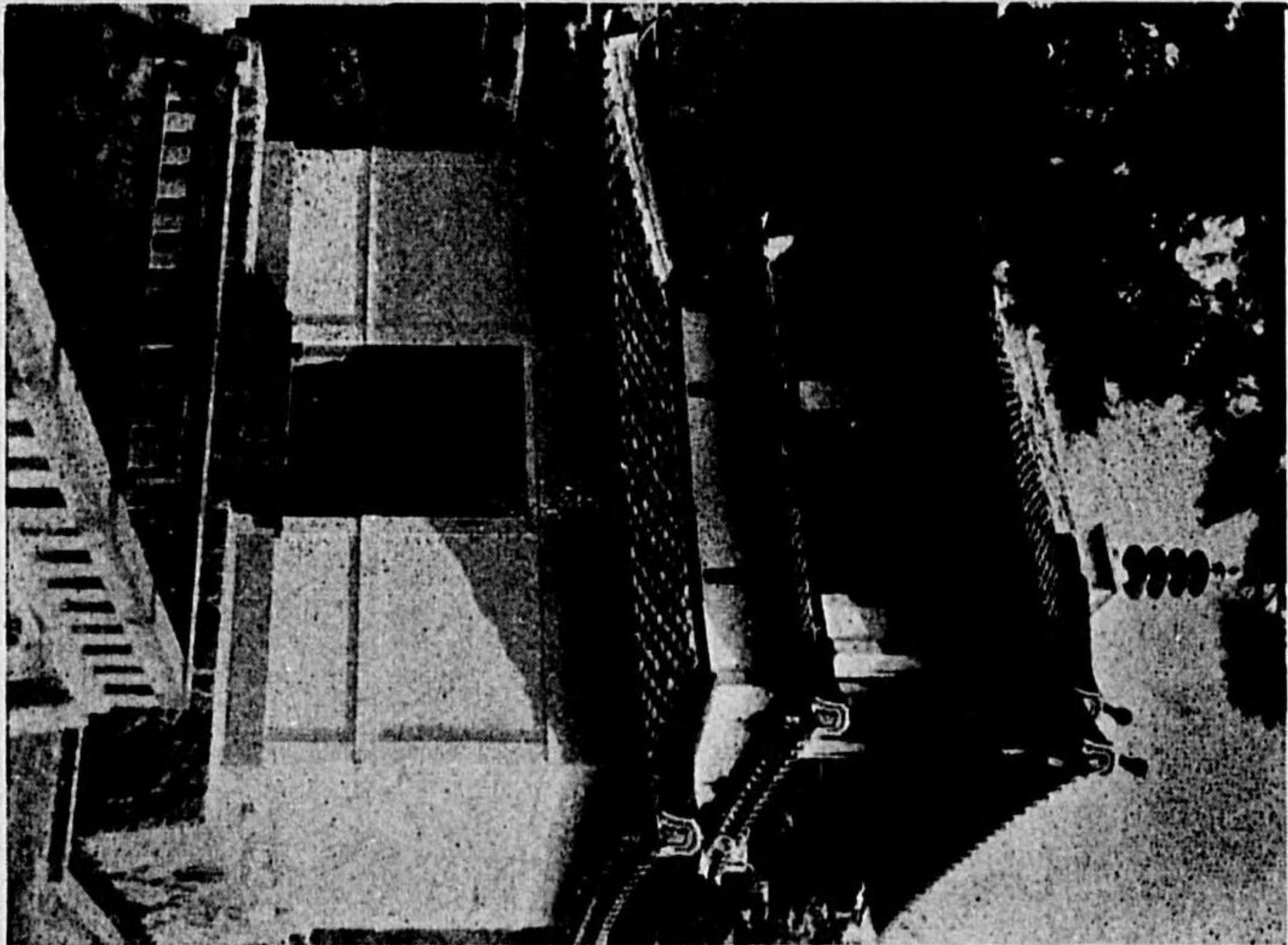
和歌山縣南田郡鳥屋城村大和川 藤王寺六堂

二四

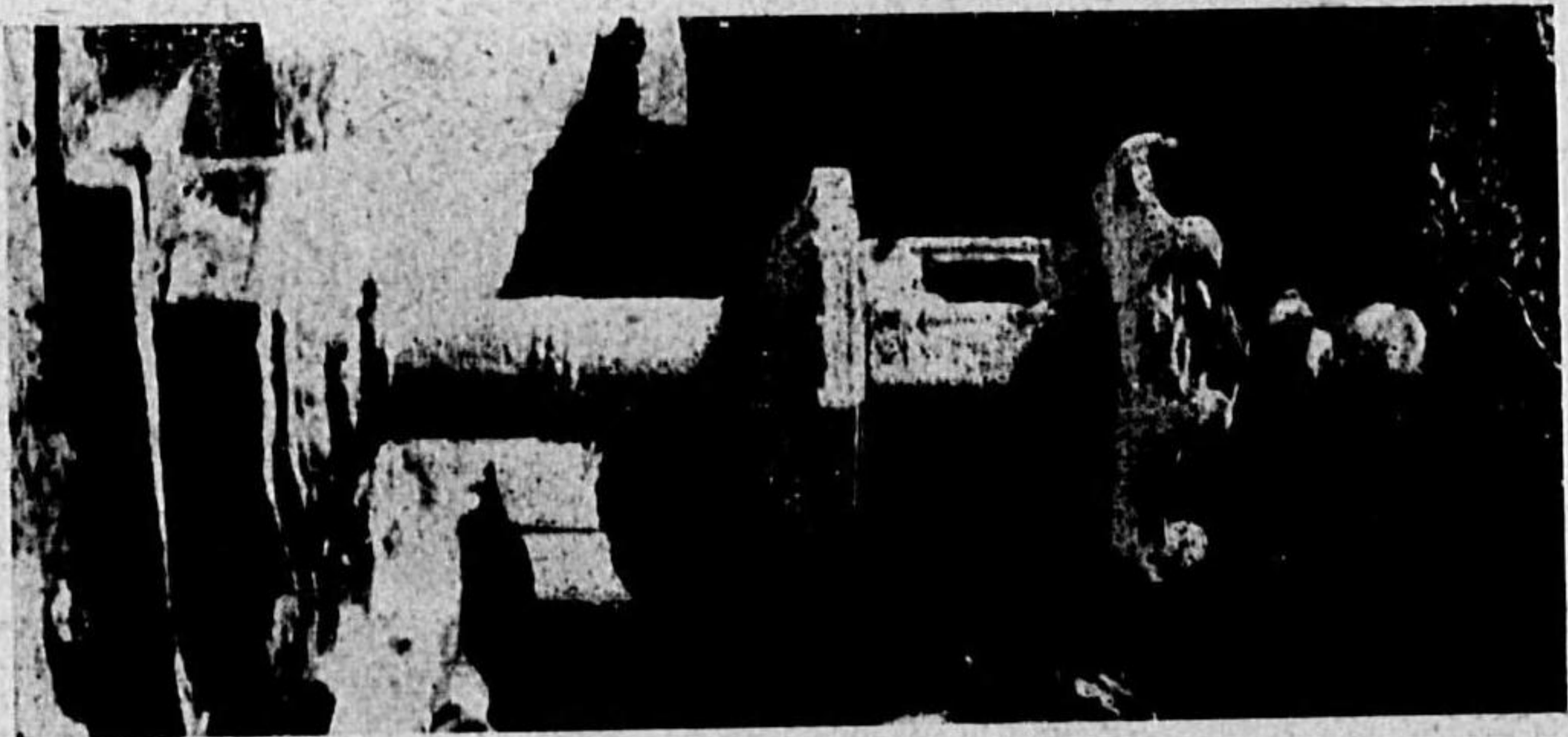
外陣空の上葦股 昭和十七年十二月廿四日製圖



此板葦股は左右の脚端が虹梁の上につかず、圖でみる様に跳ね上つてゐる。併し折角だけ跳ね上つてゐる有様は下からは見えぬ、梯子でもかけて上つて見なければ判らない。虹梁は四つあるから、従つて葦股も四つあるが(二ニ参照)、脚端の形も跳ね工合も何れも同じではない。これは単に其一例を示したに過ぎないのである。和歌山市片岡町の松生院本堂の外陣正面の入隅には、火打梁(虹梁)が用ひてあり、其上にのつてゐる板葦股は、これと同様に珍らしく兩脚端が上つてゐたが、戦災により惜くも焼亡したから、現今では僅かに此一例を存するだけになった。地方色とは言へないかも知れないが、とにかく珍らしい。

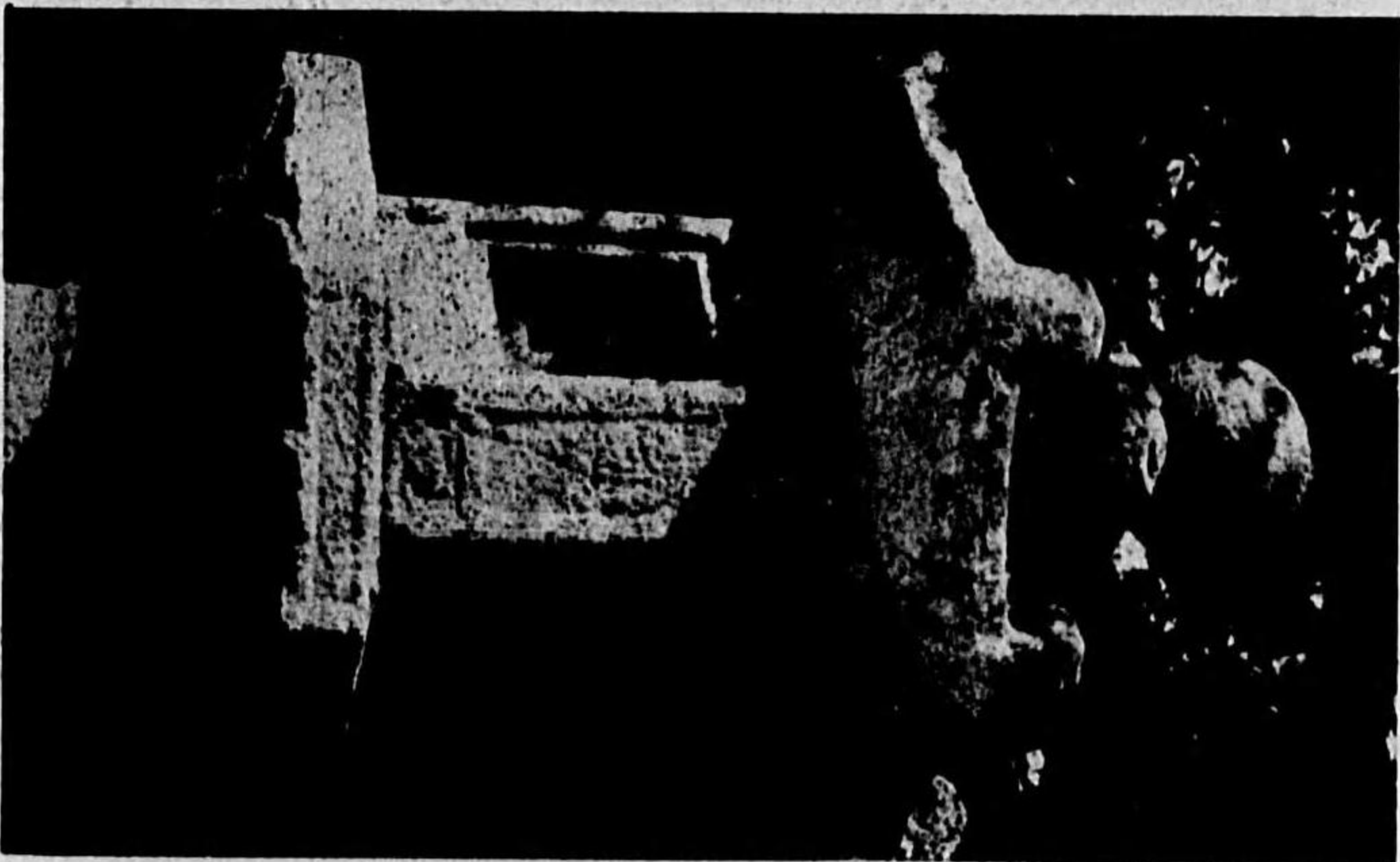


右、二五。四恩鐘樓遠望（昭和十八年十月二十四日・遠齋九郎氏）
 圓満寺の門前から山の中腹を遠望したものである。
 左、二六。四恩鐘樓近景（太田義隆師寄贈寫眞複製）
 其獨創的意匠より成れる點に注目の事。



右、二七。溝谷神社石燈全景 其一
 左、二八。同 其二

（右圖物差は曲尺の一尺・兩圖共昭和十九年二月二十九日）
 今は粗末なる拜殿を入ったところの右手にある。右は正面、左は火袋の前面を見せたもの。總高さ地上約七尺六寸、基礎より寶珠に至る迄變改の跡なく、而も完全によく創造の儘を存す。火袋の面には蓮花上の圓相中に梵字（ハク）を刻す。鎌倉中期以降の作なるが如し。



右、二九。瀧谷神社石燈一部詳細

左、三〇。一宮神社石燈全景 (昭和三十九年六月六日・園造氏)

右圖は夫が如何によくあの邊の地方色がでてゐるかが判るであらう。典型的、換言すれば公式通りのもの。左は古いには古いが遺憾ながら筆が揃つてゐないらしい。



右、三一。俗離山法住寺雙獅石燈全景

(物差は曲尺の一尺・昭和二年十月五日)

左、三二。朝鮮總督府博物館内雙獅石燈全景

(物差は曲尺の一尺・昭和八年九月六日)



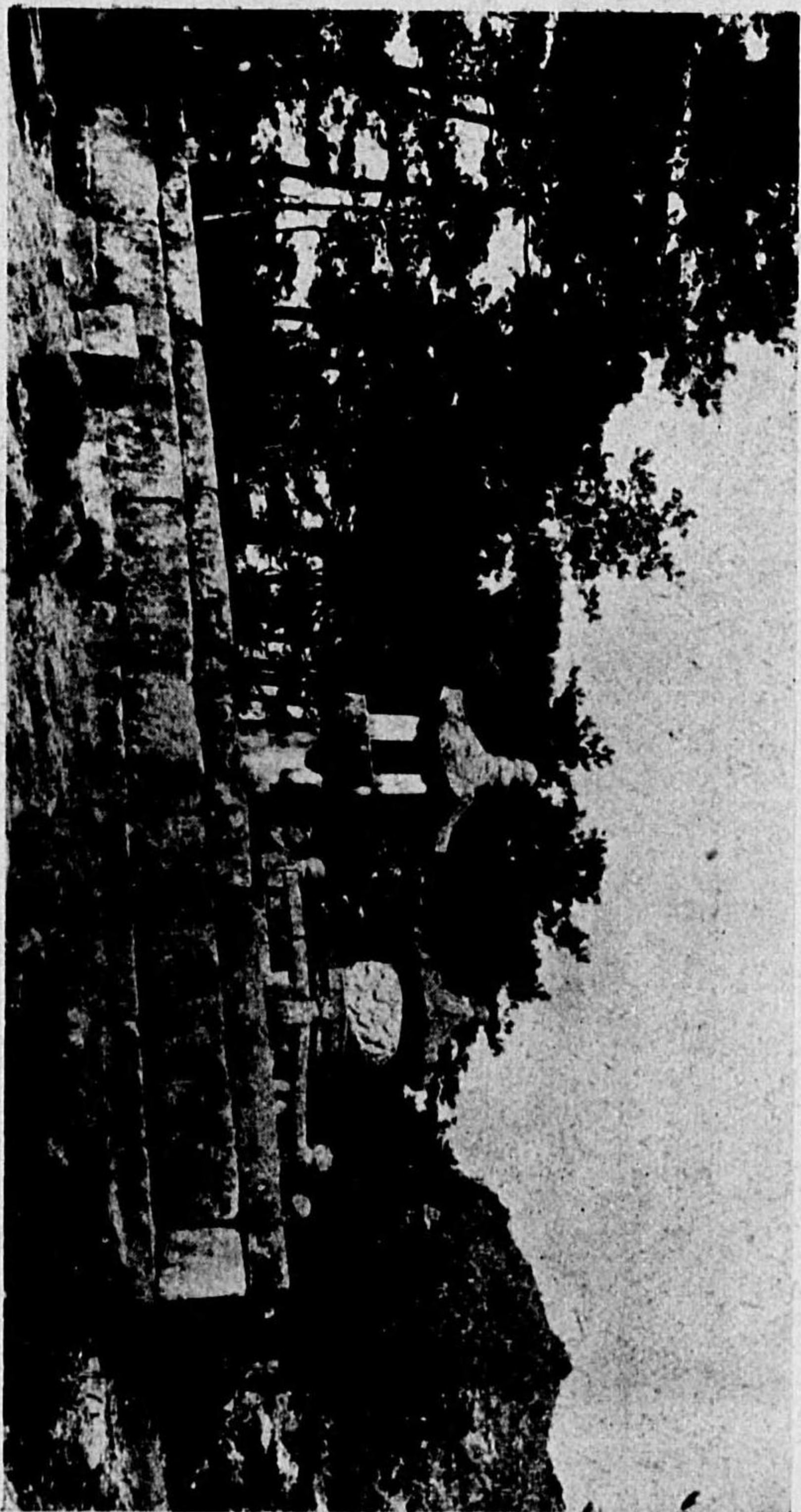
三三。俗離山法住寺雙獅石燈雙獅詳細

(物差は曲尺の一尺・昭和二年十月六日)



三四。朝鮮總督府博物館樁内雙獅石燈雙獅詳細

(物差は曲尺の約五寸(六吋)・昭和八年九月六日)



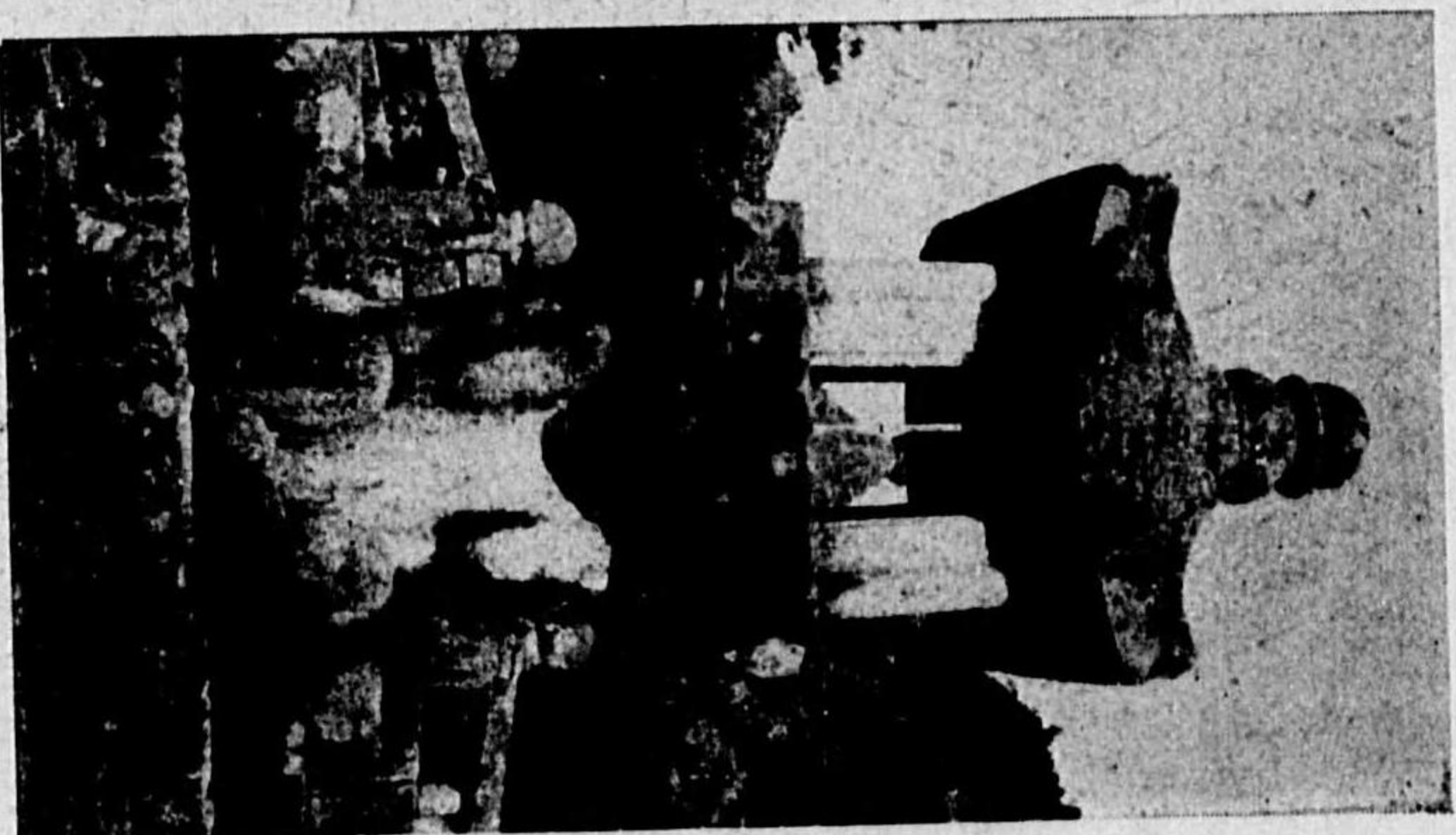
三五。檜巖寺無學禪師浮屠全景（昭和十五年十二月五日）

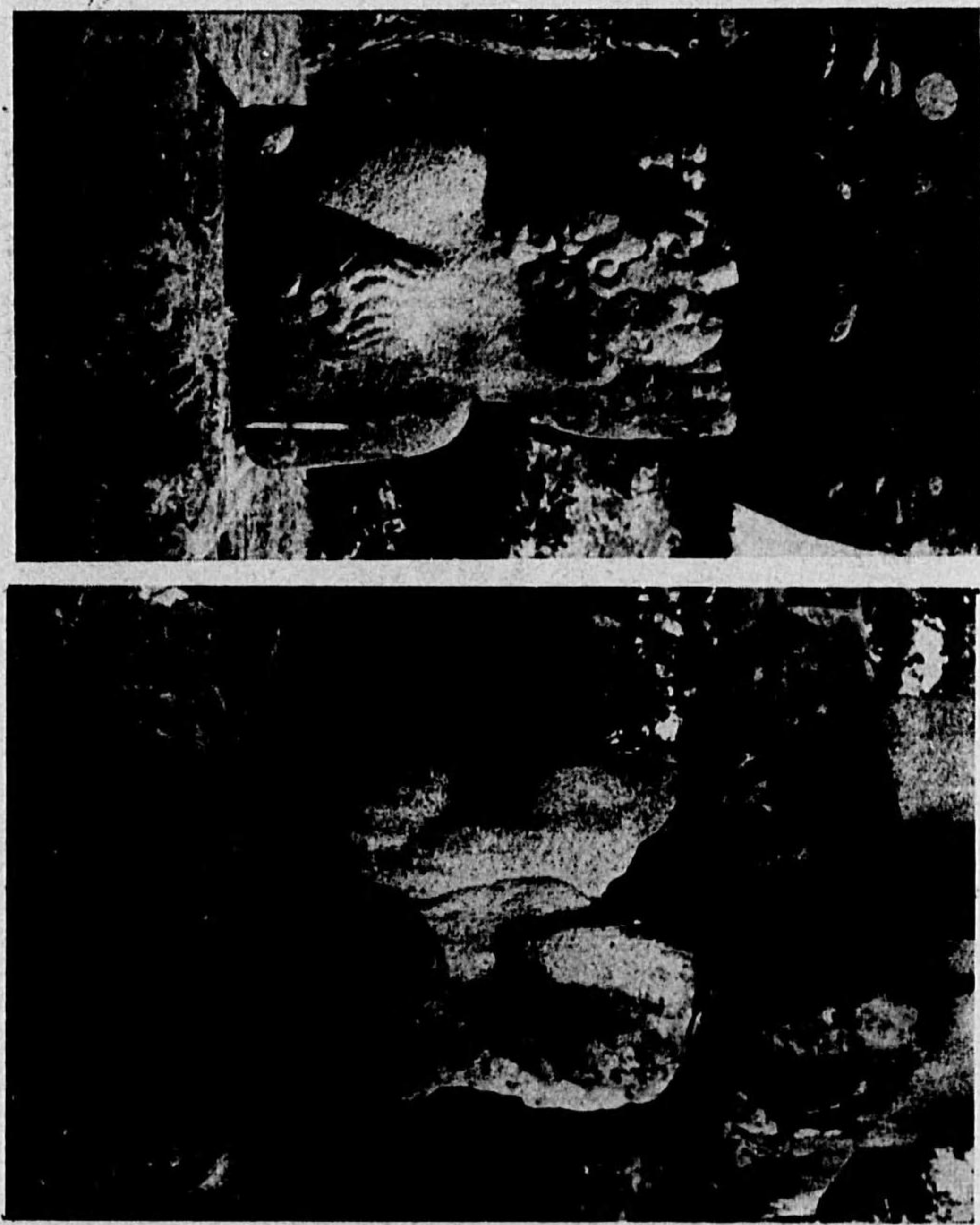
此寺には東方の高地に、南から東北方にかけて、廡に無學・指空・懶翁の浮屠があり、其前に何れも一基の石燈があるが、竿が雙獅になつてゐるのは無學のだけである。

右は東南方より、左は西方より見た全景。高麗時代の遺物が見出されてゐないので、間がぬけてゐるが、新羅時代のと比べて、其如何に甚だしく異なるかを見よ。



右、三六。檜巖寺雙獅石燈全景 其一
左、三七。同 其二



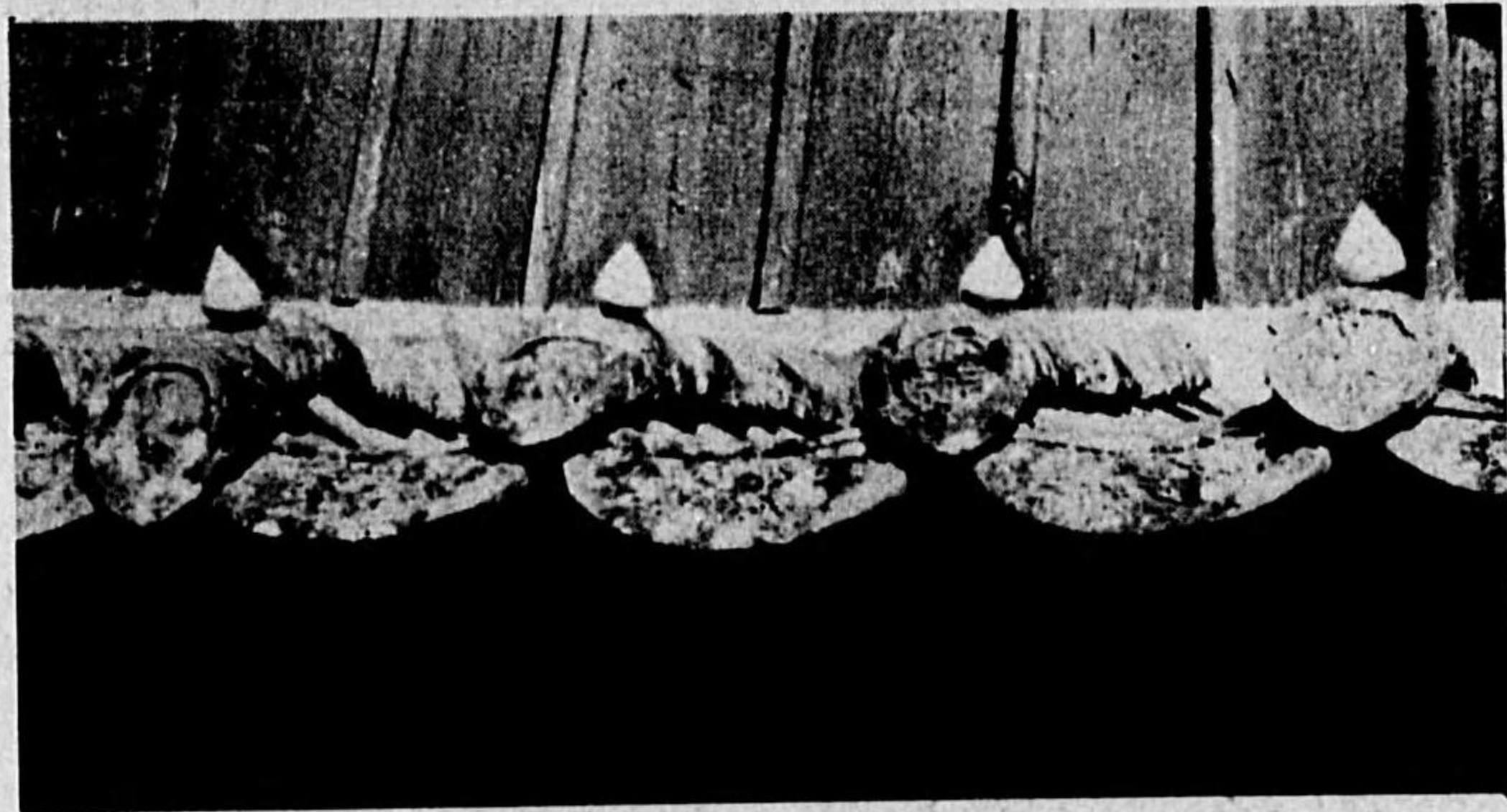
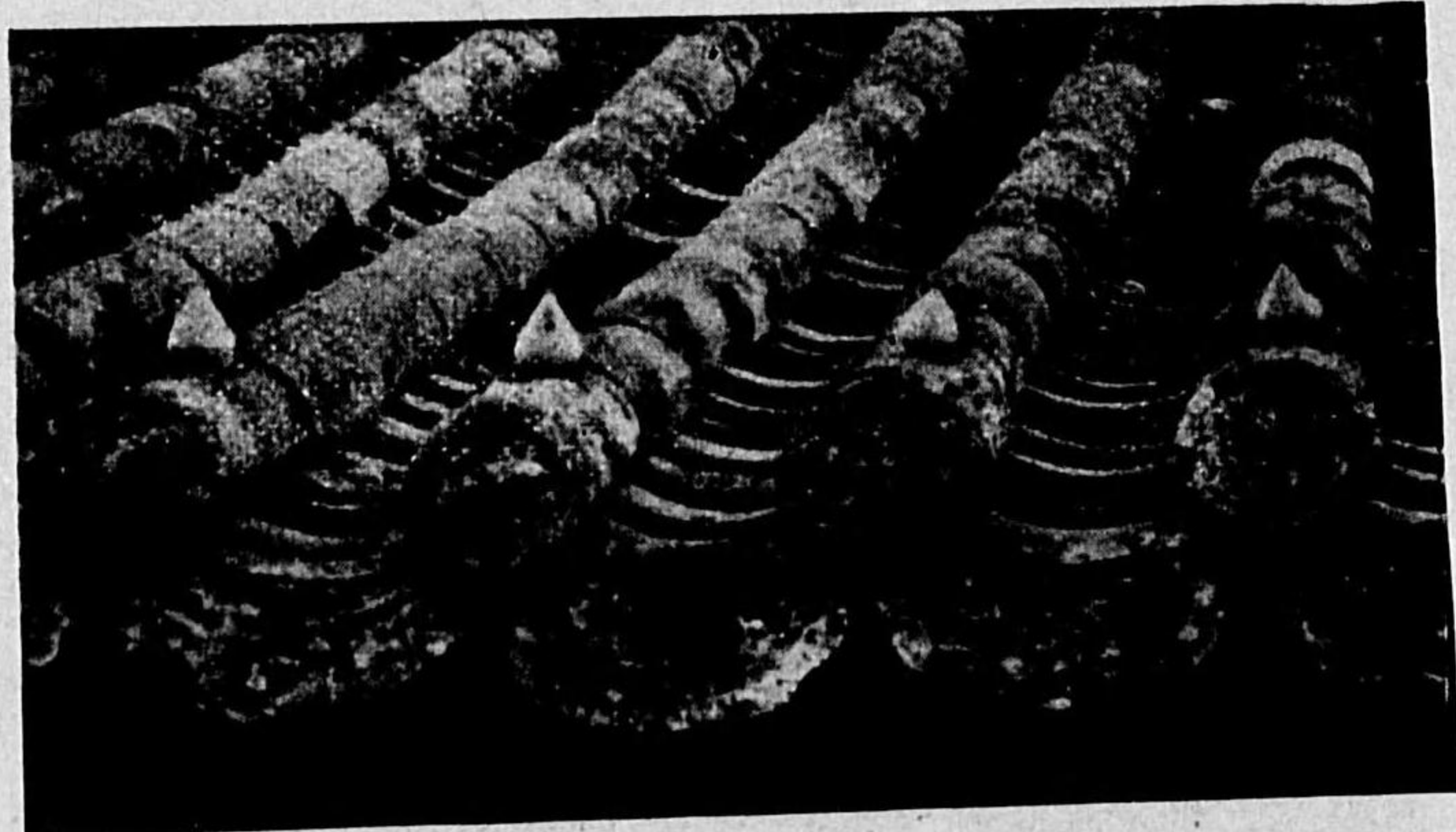


右、三八。檜庵寺雙獅石燈獅子詳細 其一
左、三九。同 其二

(物差は曲尺の約五寸(六吋)・右、昭和十五年十二月六日)
(左、昭和十五年十二月五日、雙獅の内西側の背面)



四〇。慈惠寺石燈全景
火袋には他に類例のない珍しい形の窓がある。尚ほ次頁の圖を参照せよ。
(昭和十六年十月十四日)



上、四三。傳燈寺大雄殿背面軒一部。

下、四四。同 西面軒一部。

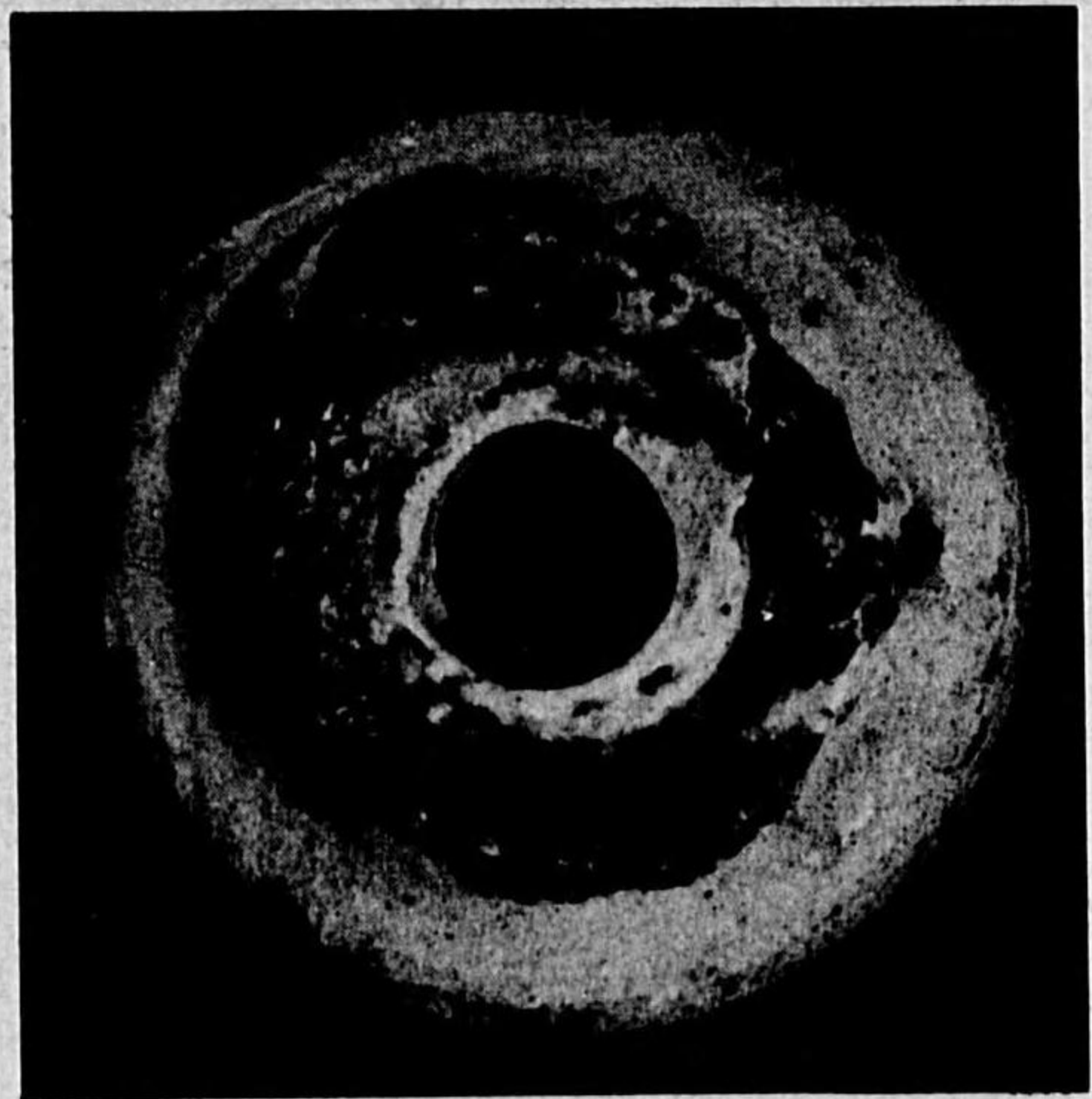
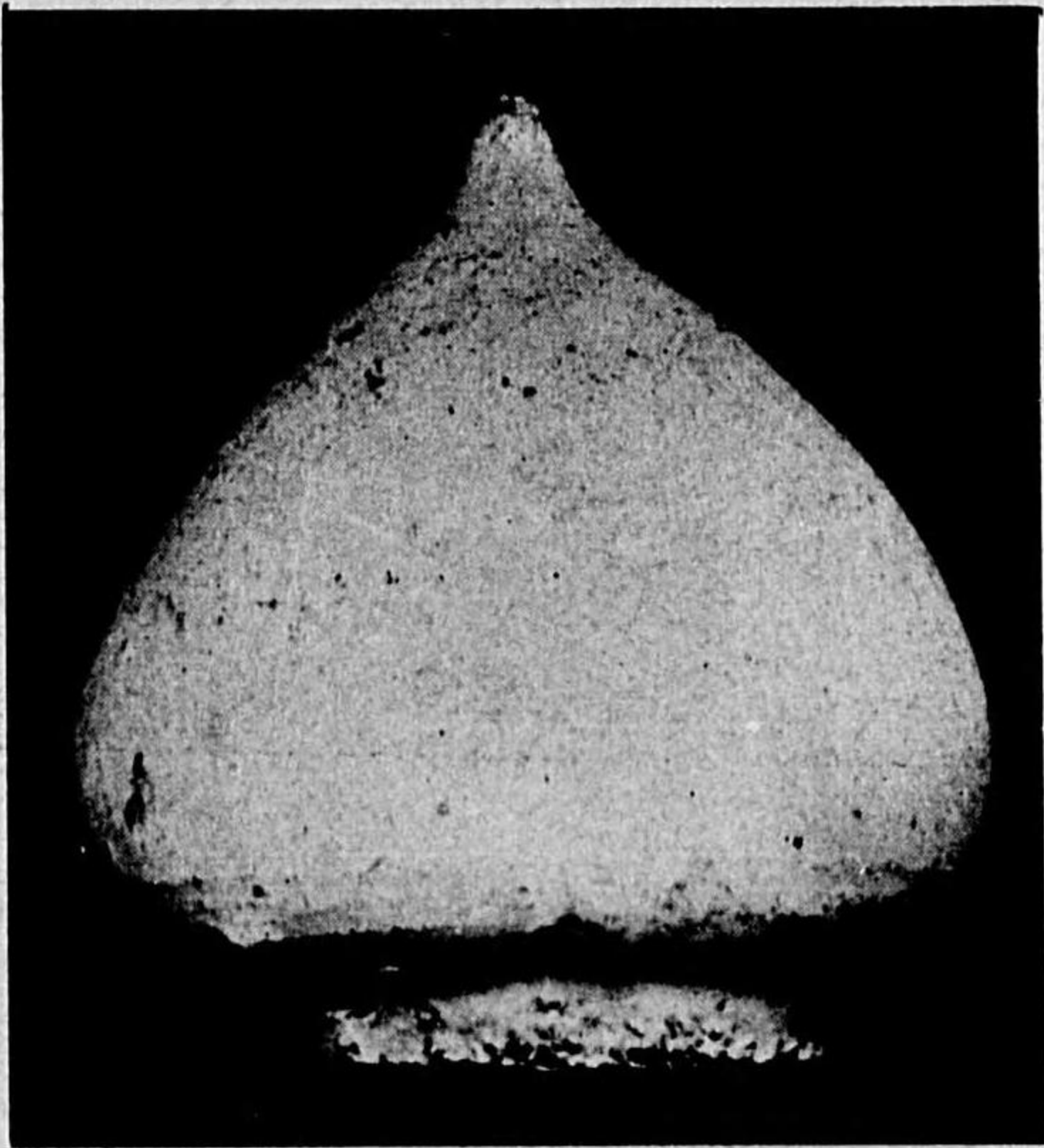
(上圖，昭和十三年九月二十八日，下圖，同二十九日)

本瓦葺の屋根に於いて，鑿瓦の瓦釘の頂上を飾れる寶珠型のものを見せたのである。此大雄殿には正面に古いのが残ってゐる様で，背面と西側面のは皆大正五年に補加したものばかりだが，止むを得ず此等を圖示した。



右、四一。慈惠寺石燈部分 其一
左、四二。同 其二

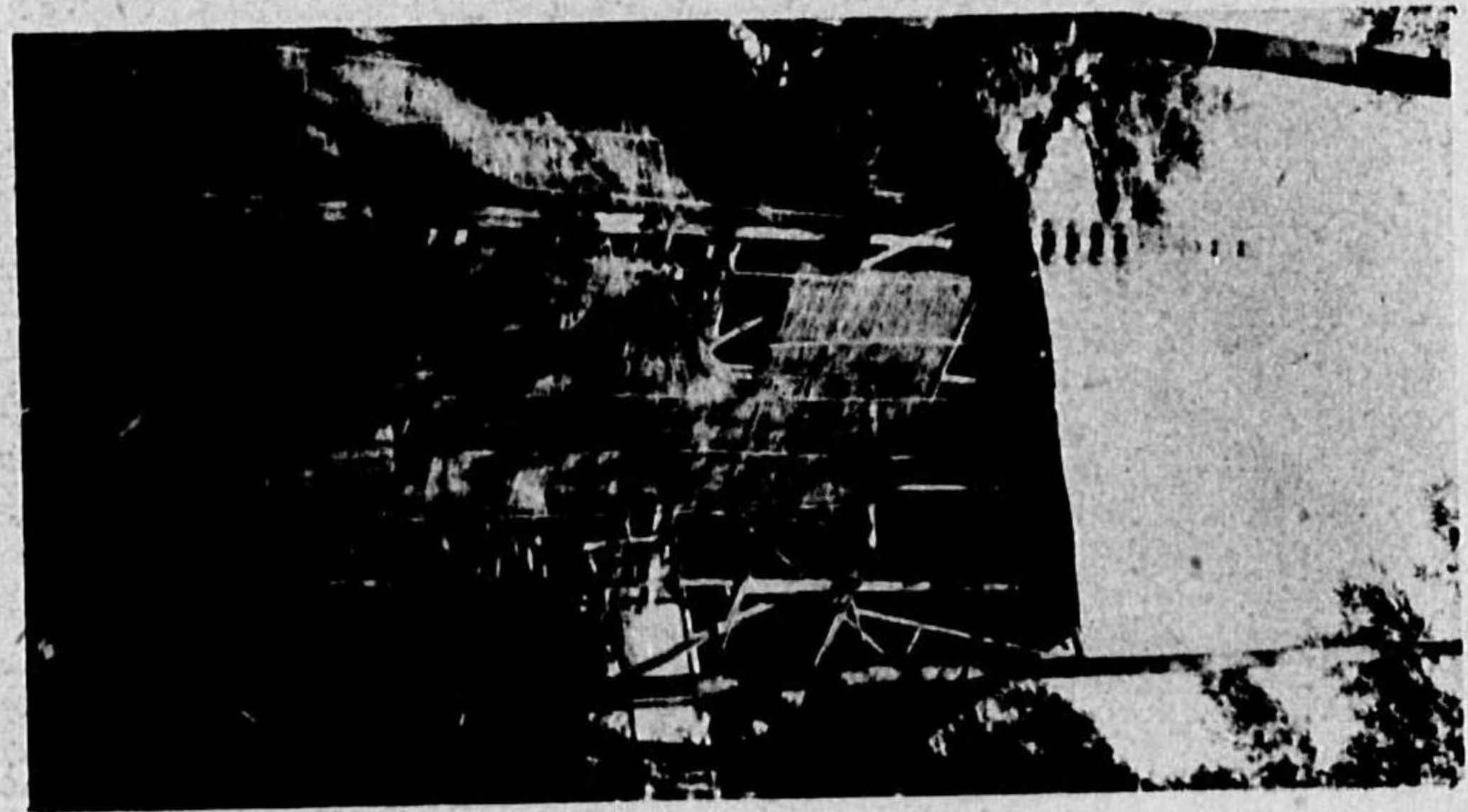
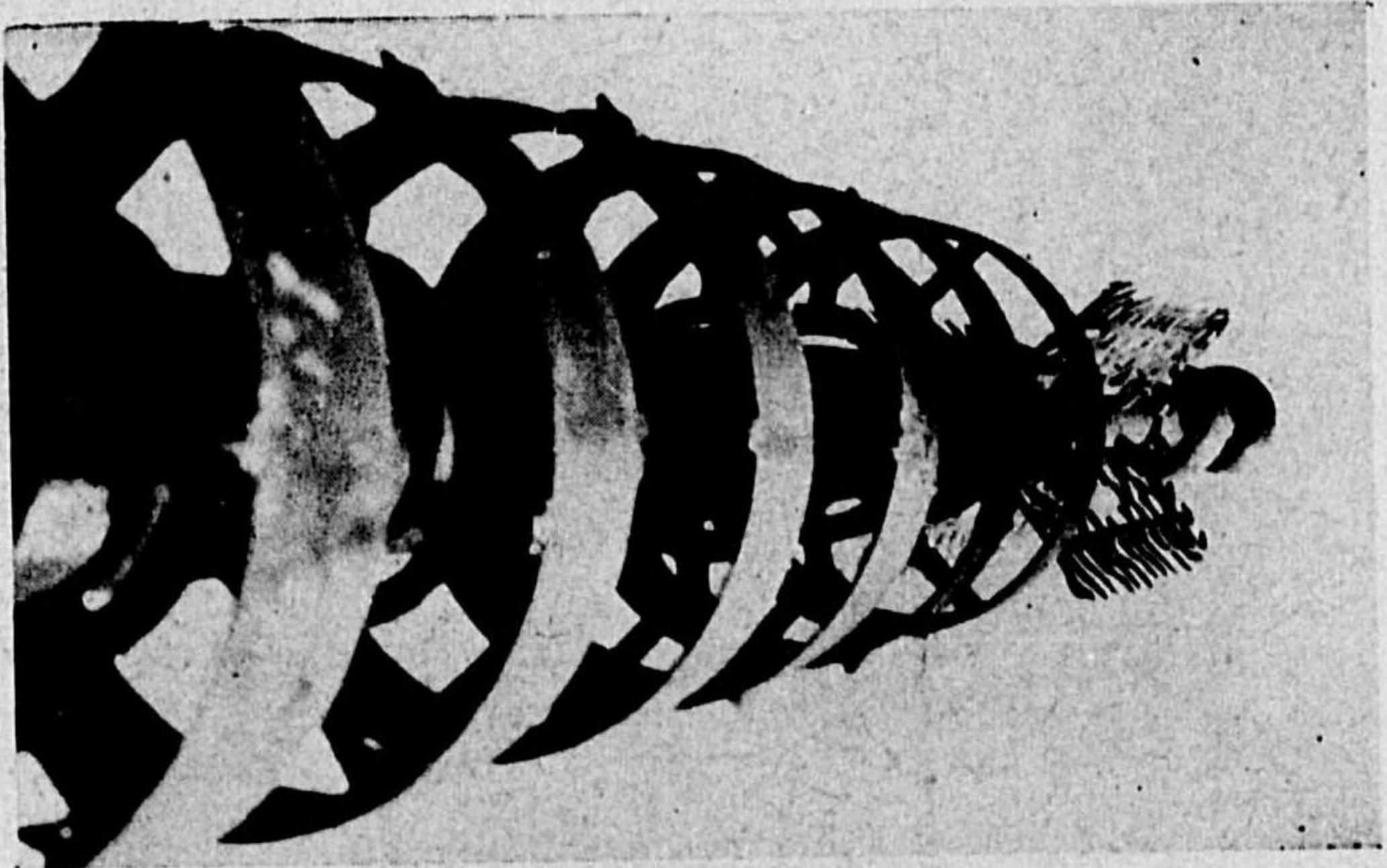
(兩圖共物差は曲尺の一尺・昭和十六年十月十四日)
主として火袋に開ける窓を見せるのが目的の寫眞。

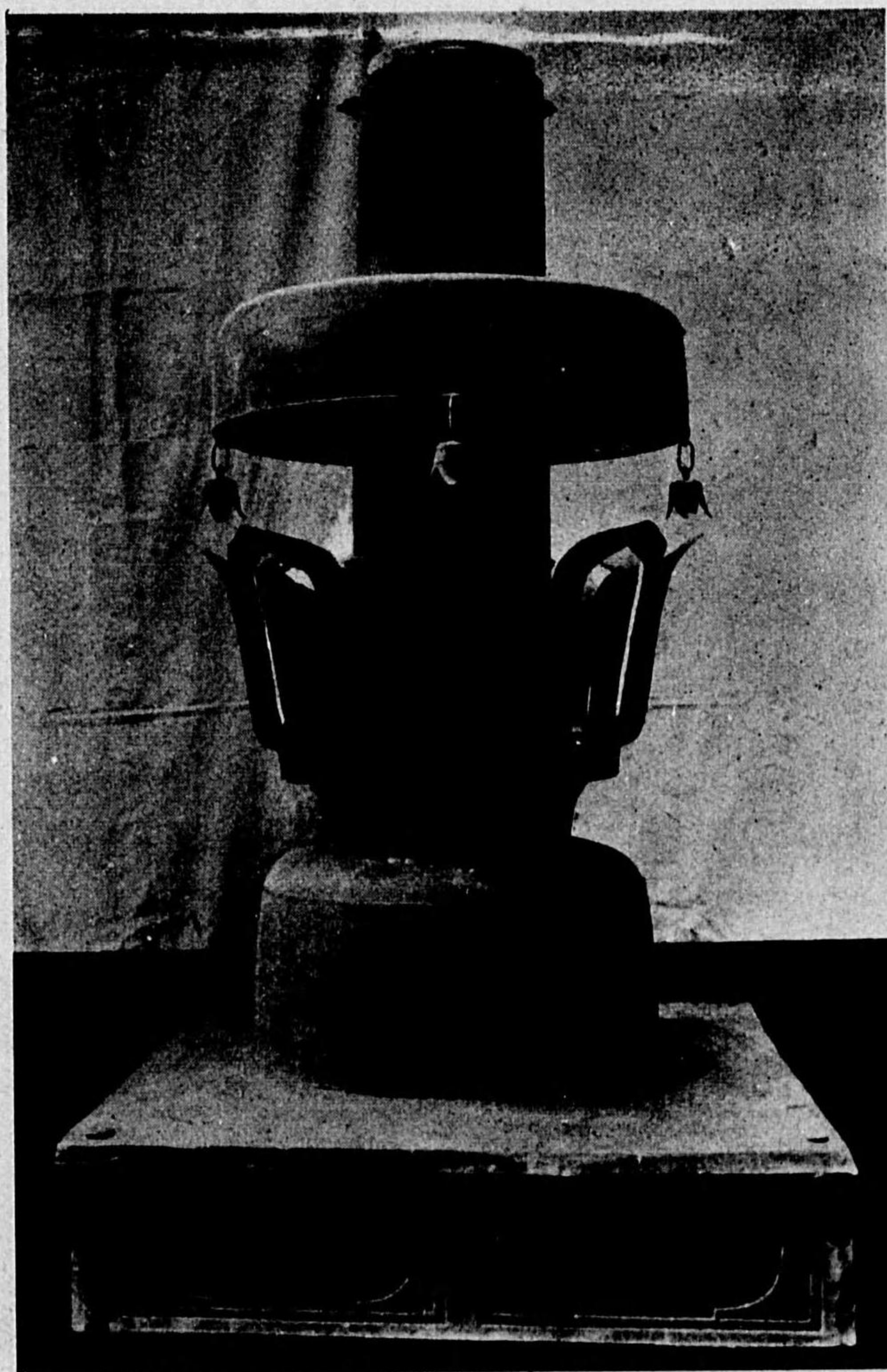


下、四五の一。朝鮮の佛寺建築に於ける屋蓋の瓦釘頭を飾る寶珠 底面
上、四五の二。同 立面

此標本は形もよく、古くもあり大きくもある。直径二寸五分五厘、高二寸七分五厘、何處の屋根に用ひてあったものか判らないが、先づ代表的のものの一であらう。其形は常に寶珠型とは限らず、もっと平たいのもある(本文一五二頁参照)。支那では「滴當火珠」といふ名もあるさうである。

右、四七。岩船寺三重塔素屋根
(昭和十八年十一月十日)
左、四八。同 相輪部分
(昭和十八年十一月十日)
右は好晴の早朝でなくてはとれない寫眞。素屋根除去の少し前の記念。これでも笹や木の枝を少しは拂った。左は此素屋根の頂上から上半身を出して相輪を見たところ。





四九。岩船寺三重塔相輪基部詳細

(岩船寺國寶三重塔修理事務所)



五〇。岩船寺三重塔相輪上部詳細

(岩船寺國寶三重塔修理事務所)

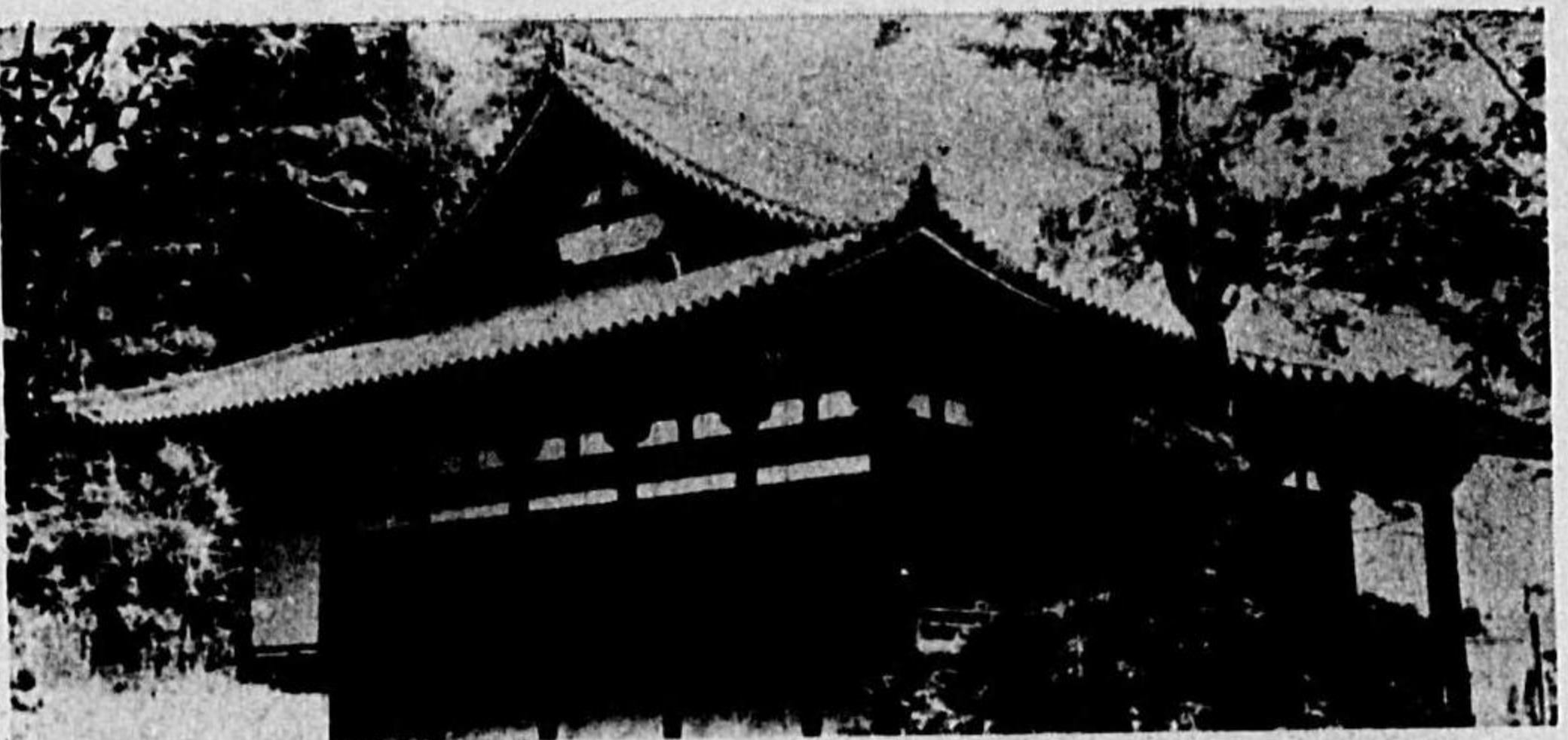
此等二枚も修理解体中でないと、いふ迄もなく撮れない写真。水煙の標本蒐集はめったに好機がないので、實は水煙の寫眞と拓本製作が主要な用事で、修理事務所を訪ふべく用意したのが後れて殊んど不能になり、そのうちに水煙は取りつけられて了ったが、幸に寫眞も拓本も事務所でつくつたのを得る事ができた。共に所員佃忠夫君の手に成れるもの。此二圖鎌倉時代代表的相輪と見ることが出来る。



五一。岩船寺三重塔初重天井來迎柱長押上格縁の納り

(昭和十八年十一月十日・佃忠夫氏)

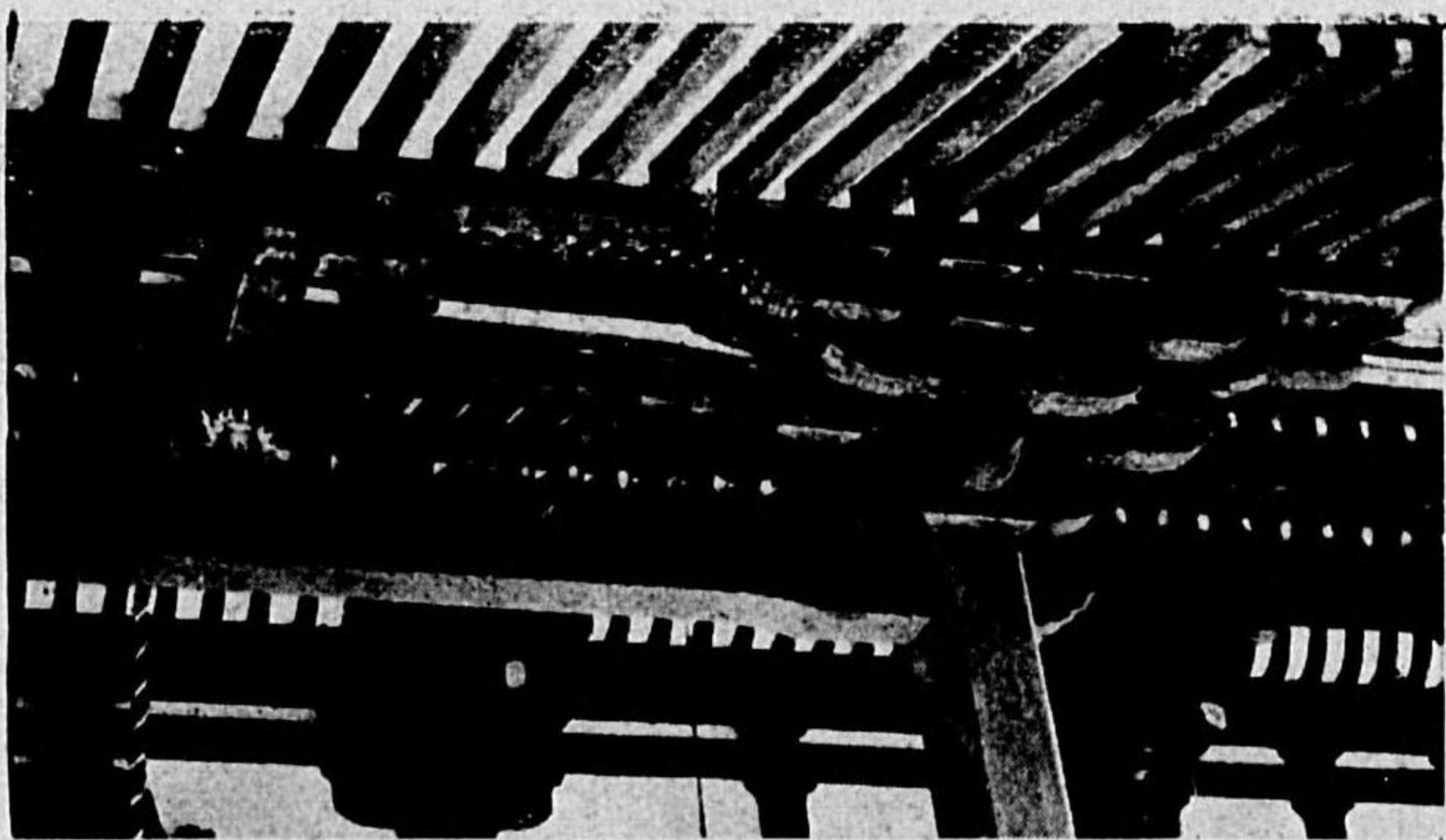
漸くの事で修理出来以前に見學ができたが、十一月十日には此珍らしい格縁は既に取付て了ったときかされ、随分失望したが、夫は間違でただ其位置に假においただけだと判った時は、既に持參のフィルム全部をつかひ果し、何とも方法がつかなかった。所が幸に事務所に乾板の餘分があつたので、技手の佃君が直に撮ってくれた。其焼付を一枚譲り受けて複製し、讀者諸君の一察に供へ得たのは洵に幸であつた。



上、五六。靈山寺本堂全景 (昭和十八年六月十二日)

下、五七。同 向拜 其一(昭和十八年六月十二日)

靈山寺は奈良縣生駒郡富雄村大字中(ナカ)にある。「レイサンジ」とは言はないで「レウゼンジ」といつてゐる。其本堂は弘安六年に上棟したもので、和様の代表的建築。料枳は二手先に過ぎないから、至極簡單だが、正面中の間の向拜は實に美事なもので、其獨創的意匠を發揮してゐる點に於いては他建築の追隨を許さない。



上、五八。靈山寺本堂向拜 共二 (昭和十八年六月十二日)

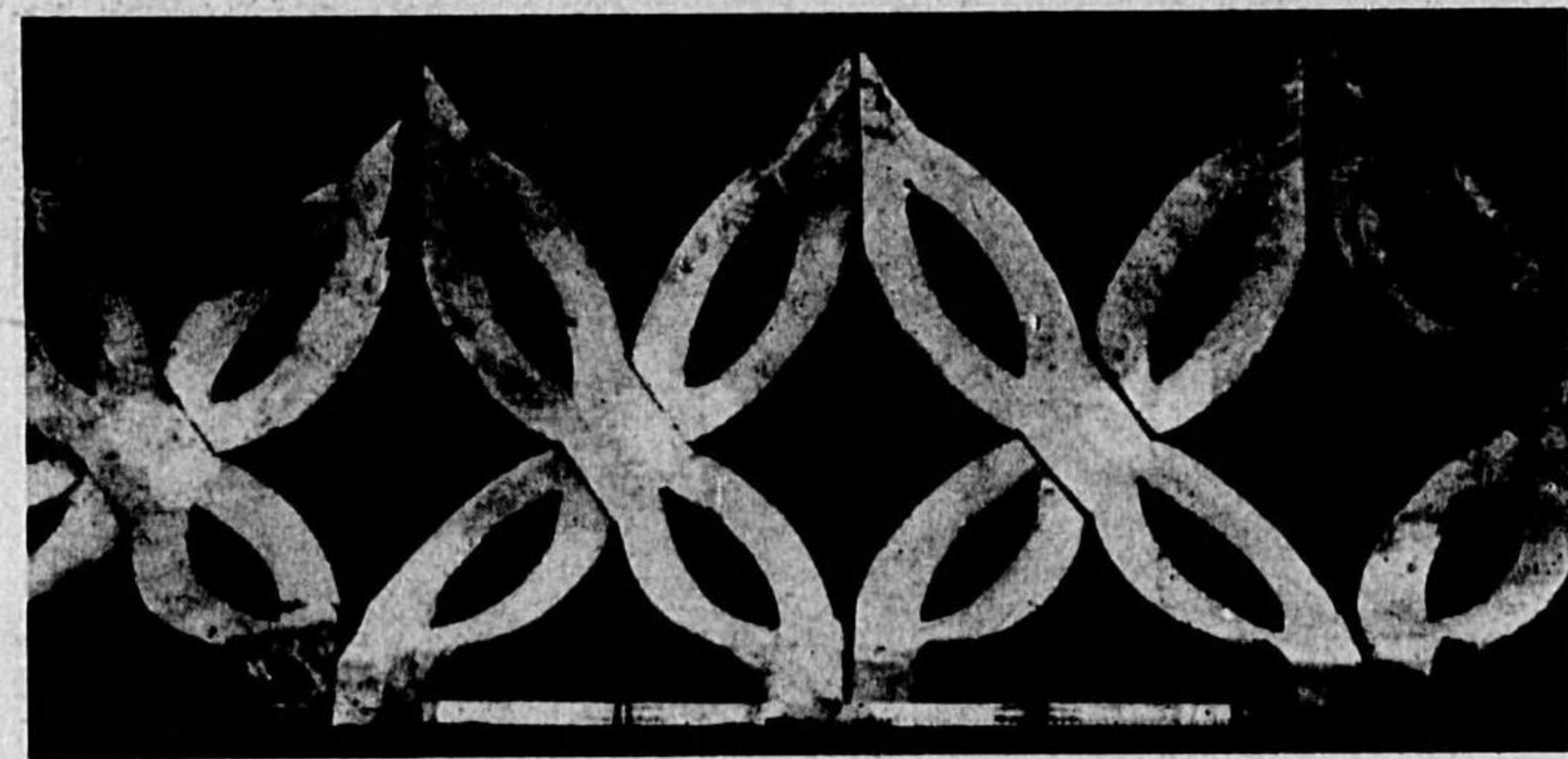
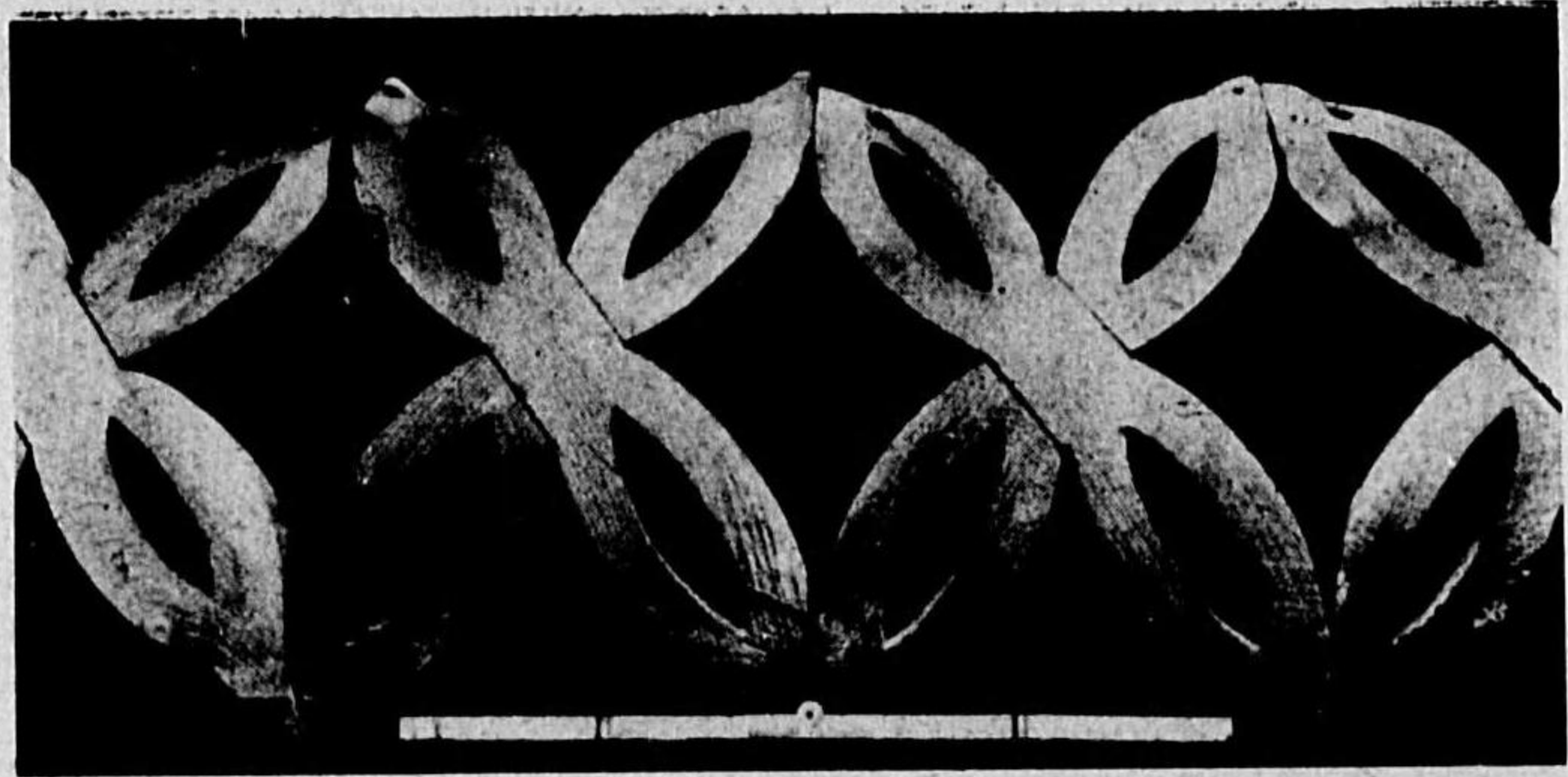
下、五九。同 共三 (昭和十八年八月十一日)

上圖は向拜上部、主として料拱を中央から東端へかけて見せたもので、斯様に正面からだすと、前の方へ一手先出てゐて、軒天井がはつてあるところが判る。ところが下圖は上圖の東端を背面から寫したもので、これによると後方へも一手先(次頁へ)



六〇。靈山寺本堂向拜 共四(昭和十八年六月二日)

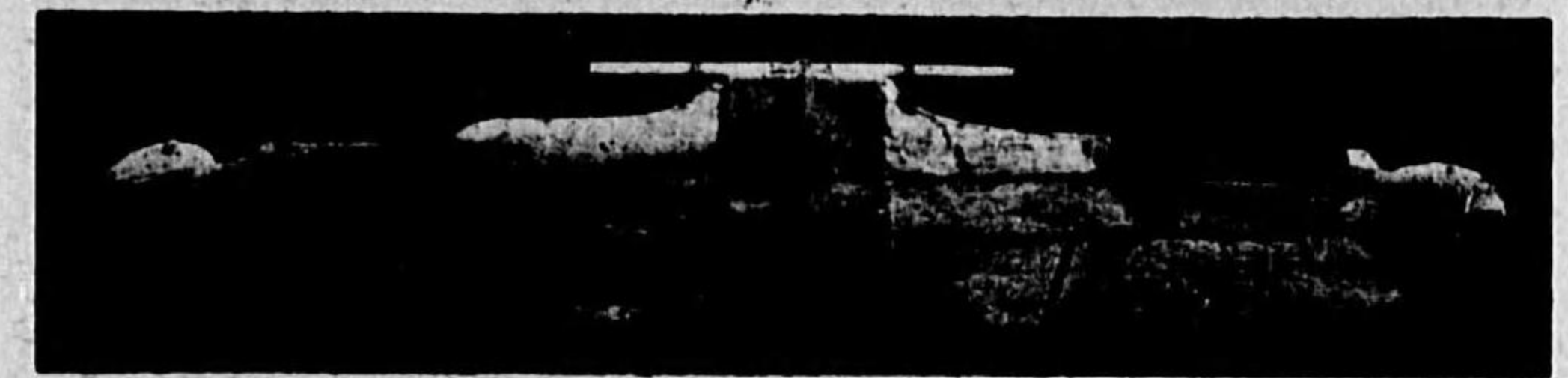
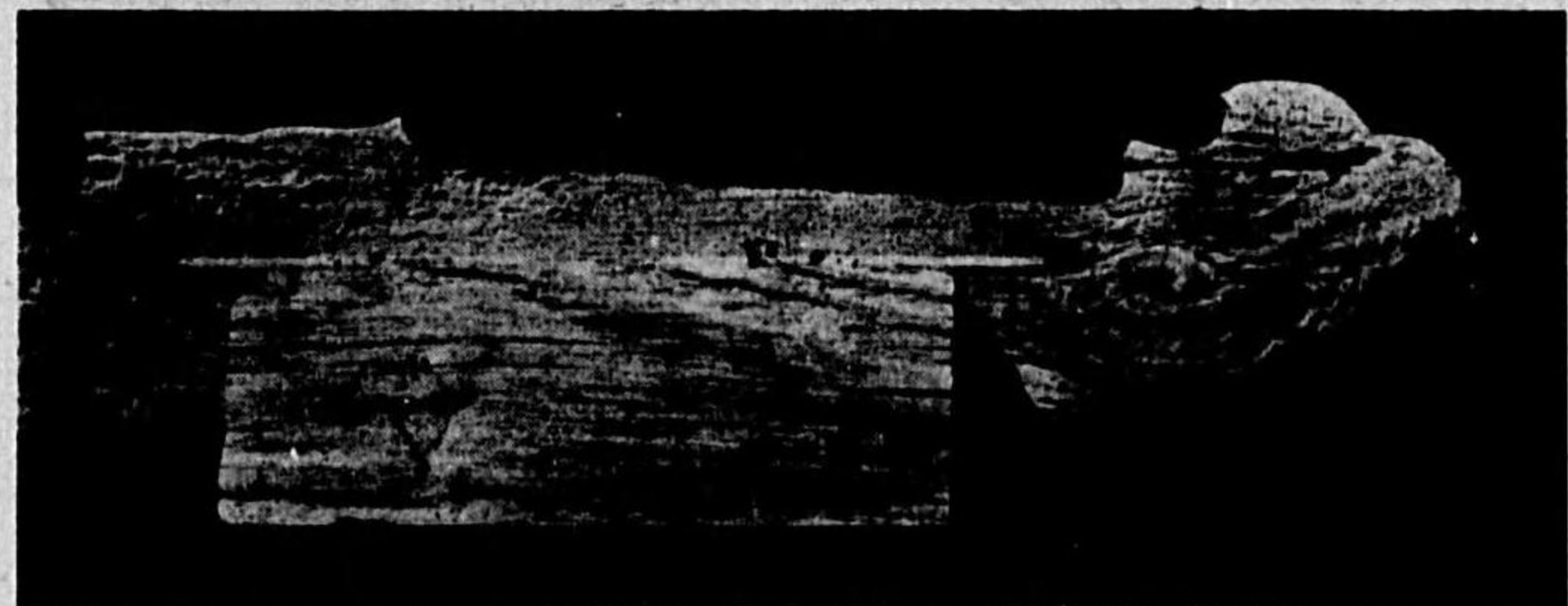
(前頁より)出でゐる上に、桁の位置も自然すこし高いから、そこには天井でなしに特殊の支輪がつくられてゐる。前方の菱小天井でも、高さが異なれば菱支輪になる。



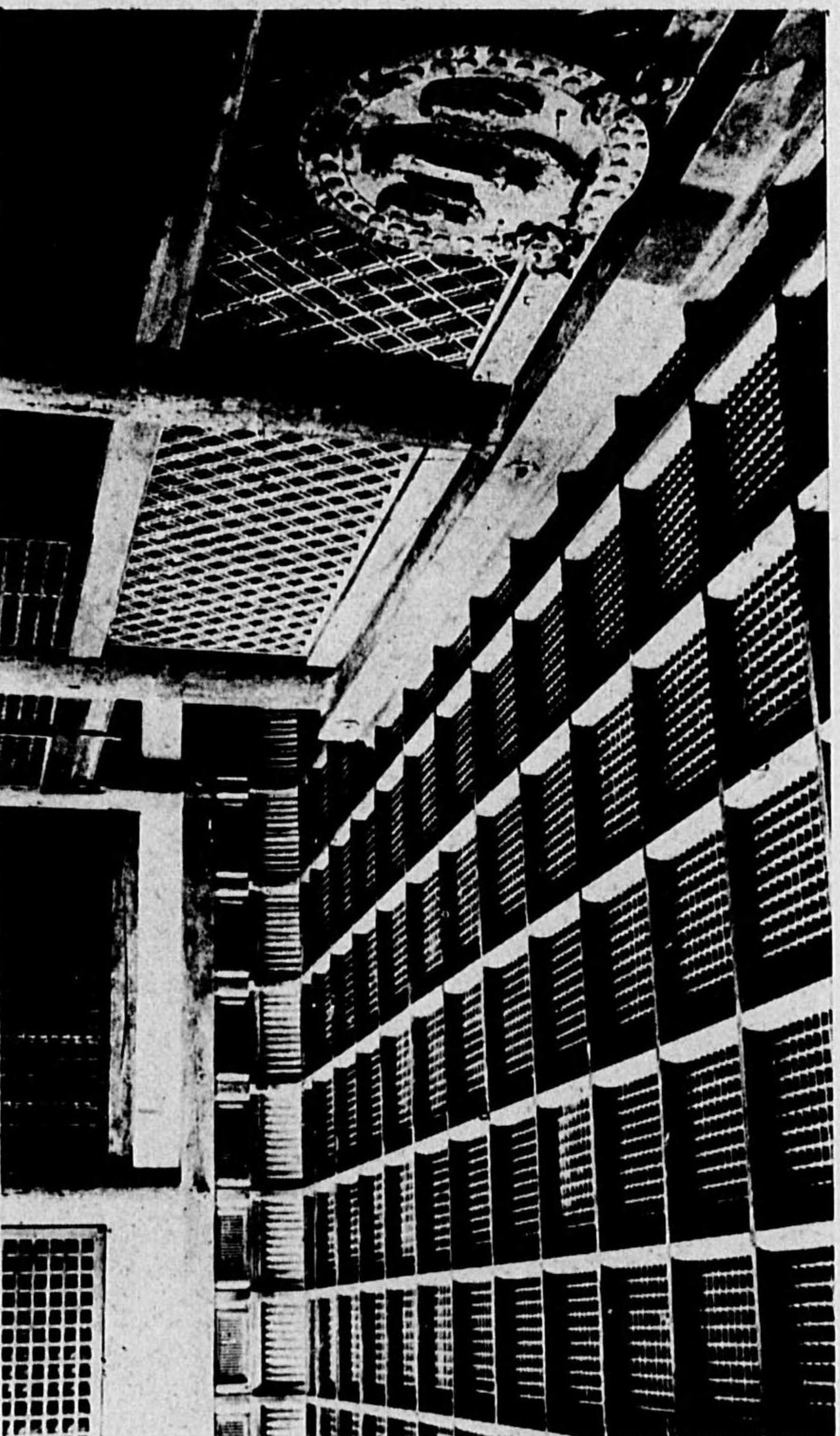
上, 六五。靈山寺本堂向拜支輪 表
下, 六六。同 裏

(兩圖共物差は曲尺の約一尺(一呎)・昭和十五年八月八日)

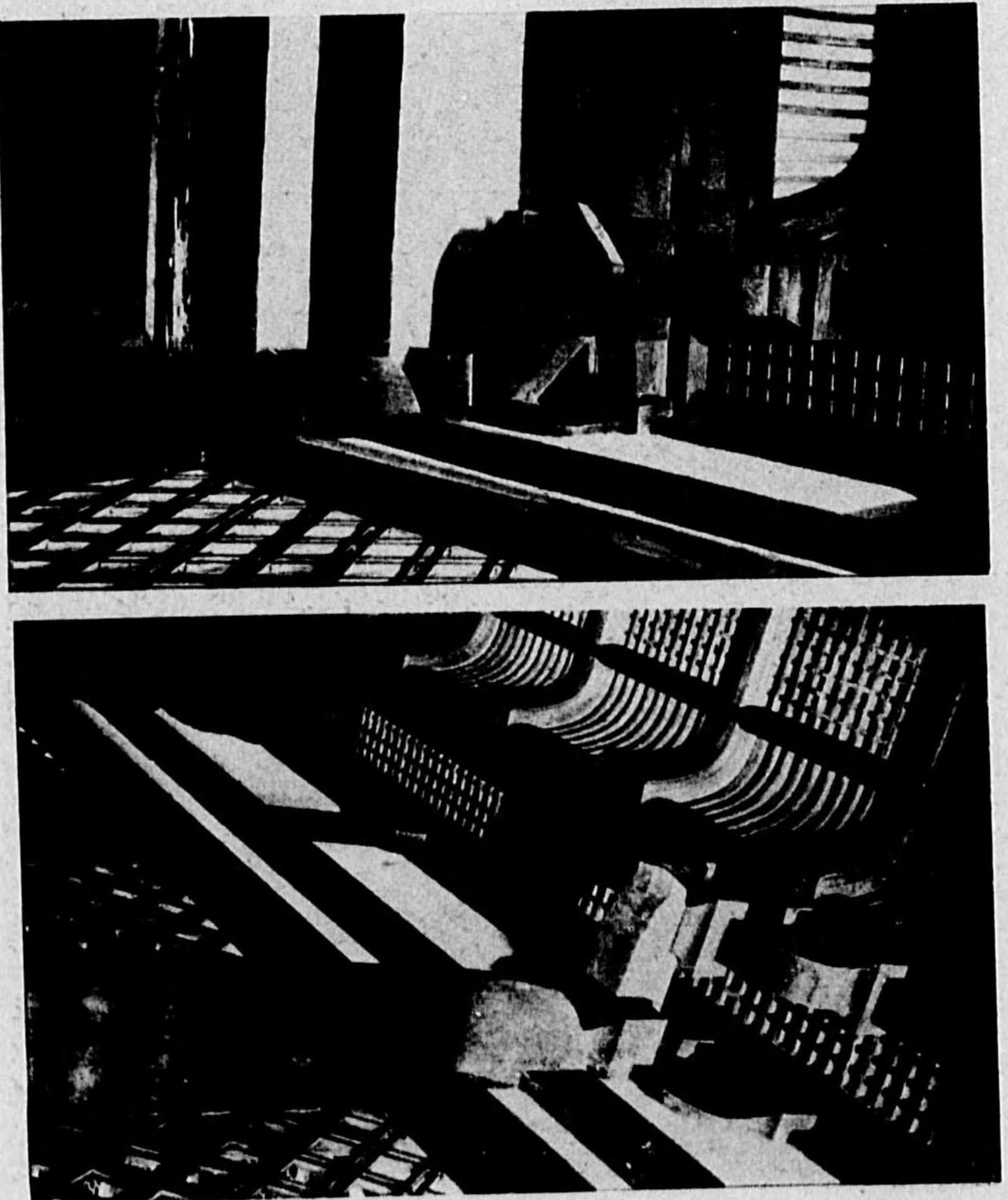
普通の菱支輪なら、室町以降江戸時代迄十指を屈する位の實例はあるが、この様に「七寶繋ぎ」とか「輪繋ぎ」とかいった様な、ここに表裏を示しておいたが、かういふのは他に類例を見た事がない。恐らく當時でも、この様に手の込んだ面倒なのは、殆んどなかったらう。



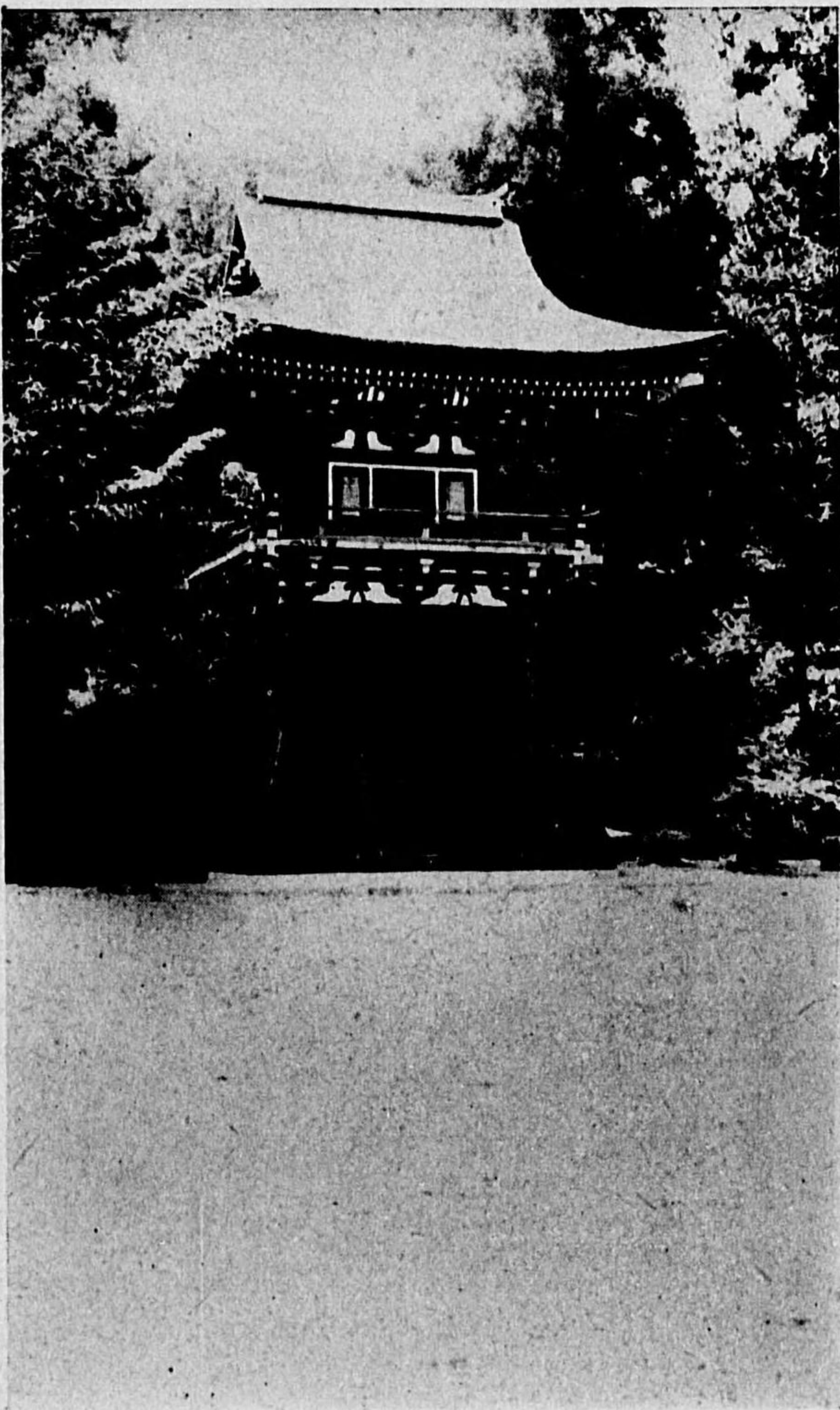
上, 六一。靈山寺本堂向拜料拱の一(昭和十五年八月八日)
次, 六二。同 部分(昭和十五年八月八日)
次, 六三。同 肘木の一(昭和十五年八月八日)
下, 六四。同 (昭和十五年八月八日)



六七。靈山寺本堂外陣一部（昭和十八年六月二日）
 正面五間と深き二間が外陣で、これは東方をみたもの。内外陣境の引違格子戸、吹寄菱格子扉間、折上小組格天井、其下の盲連子等、絶對の和様请注意よ。



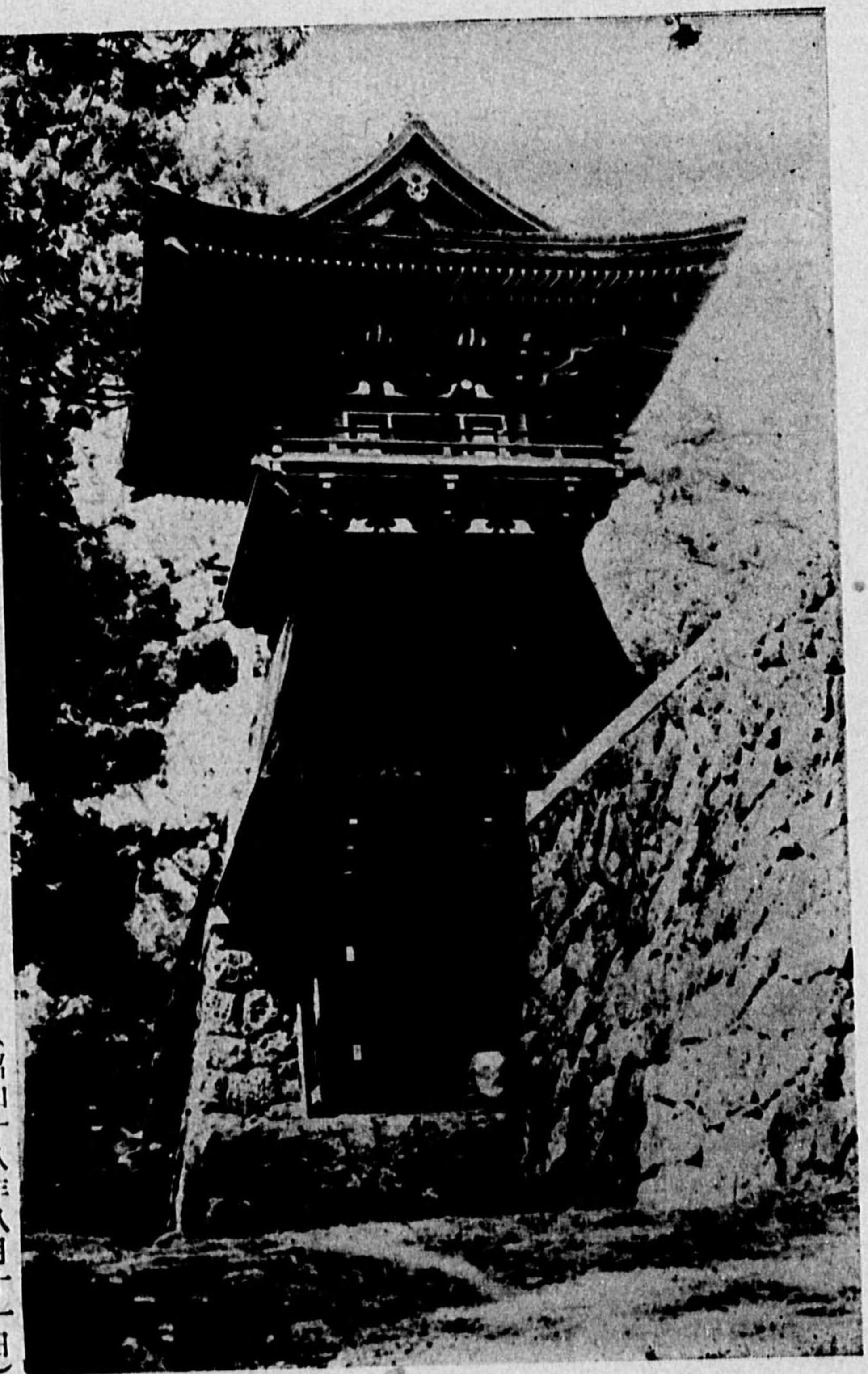
右、六八。靈山寺本堂内陣天井廻
 種
 左、六九。二
 内陣も純和様であるが、出組の料枿を支へてゐる柱上の肘木が
 「繪様」をもつてゐる事を見逃がしてはいけない。この取扱は當代に
 なくもないが、珍らしい方である。
 （昭和十八年六月二日）
 （昭和十八年六月二日）



七〇。靈山寺鐘樓正面

境内地所の關係から、正面は北を向いてゐる。本堂の東側から南を向いて寫したものである。

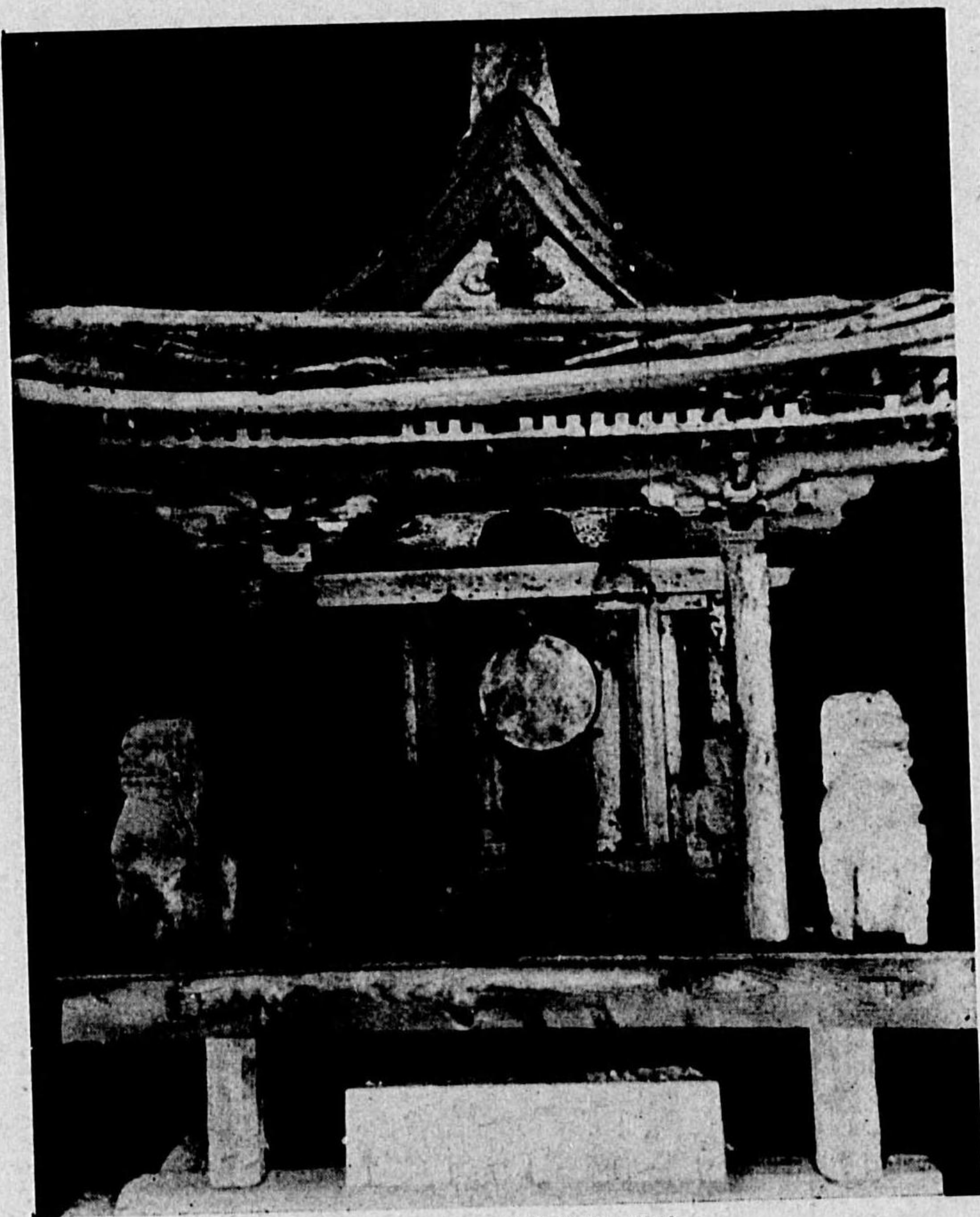
(昭和十八年八月十八日)



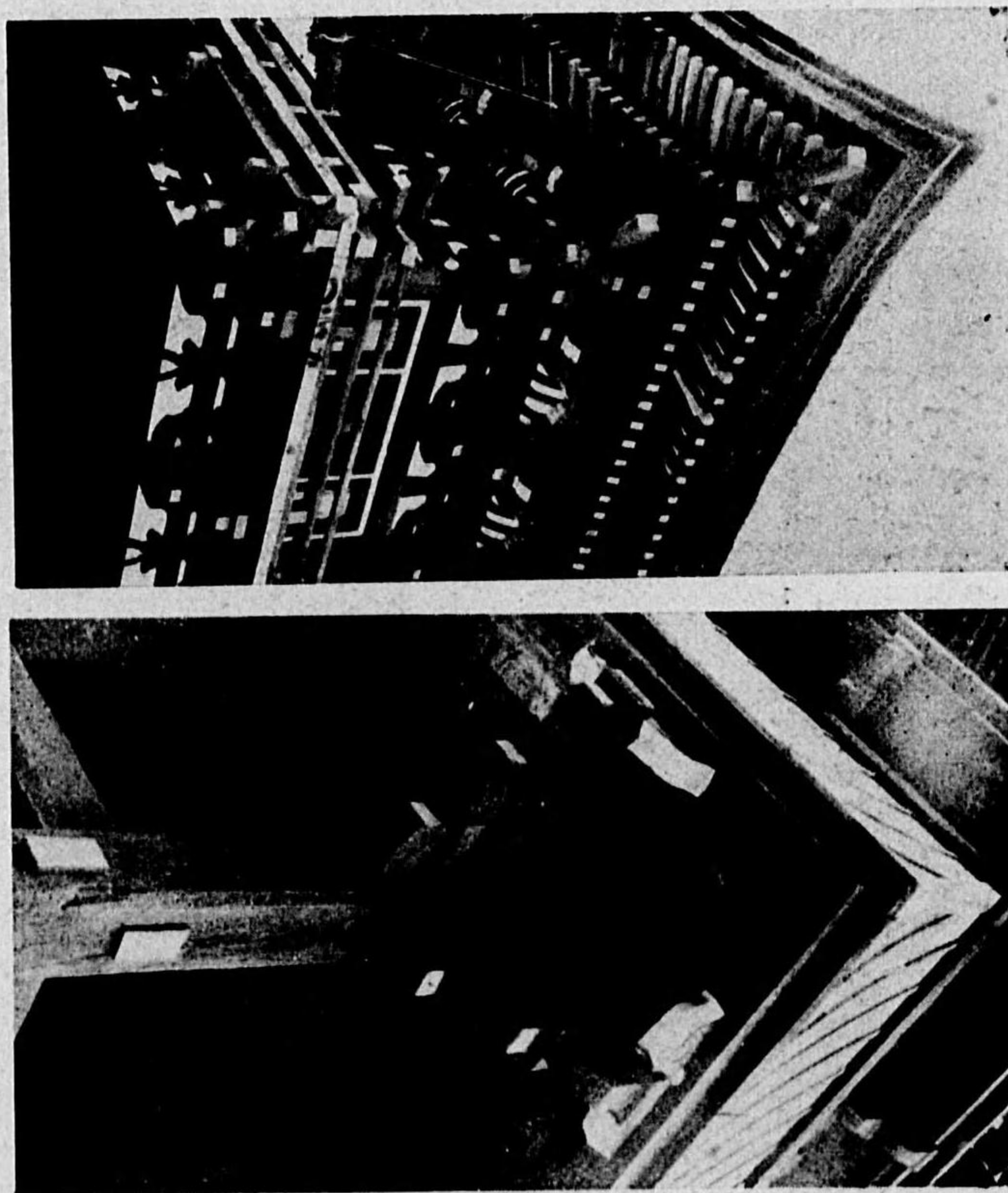
七一。靈山寺鐘樓側面

此は鐘樓を東側から撮ったもの。地所に甚だしき高低あり、此様な所へ建ててある。

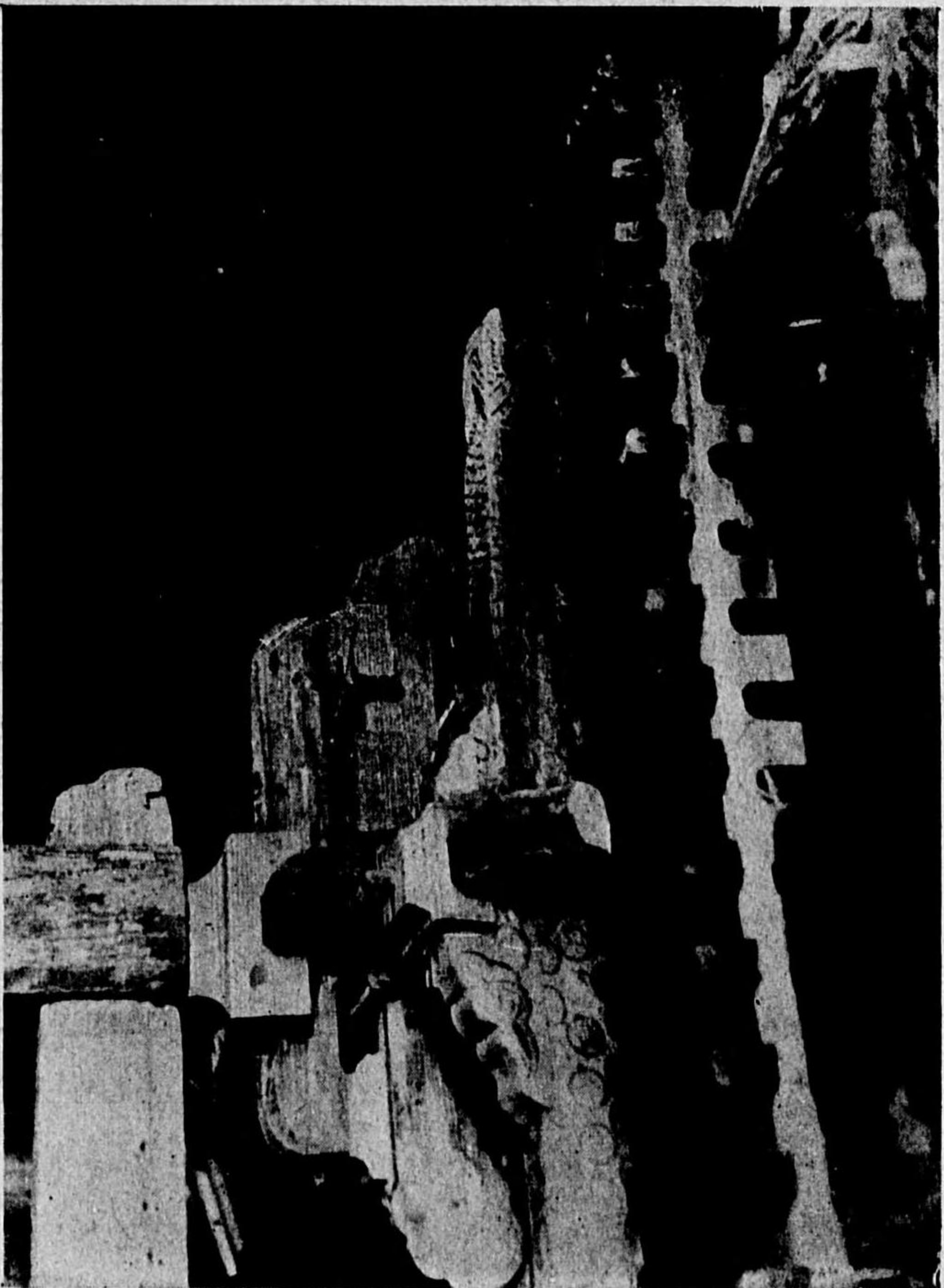
(昭和十八年八月十一日)



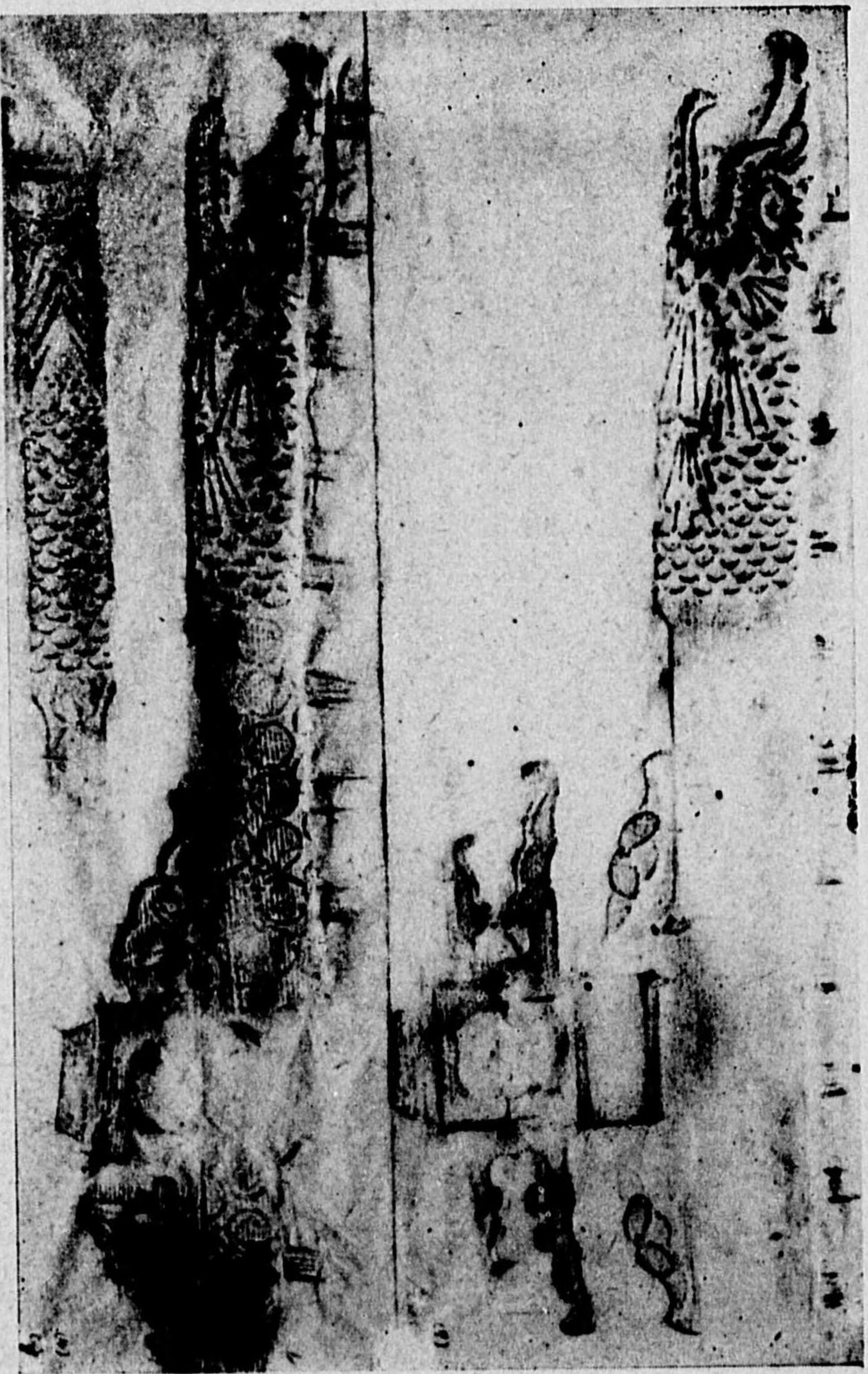
七四。白山神社社殿正面
 (昭和十八年十二月一日・山浦氏寄贈引伸写真複寫)
 殆んど原圖の二倍に引伸して寄贈されしものを、多少修正複寫して得た圖。不必要な部分は抹消しておいた。



右、七二。靈山寺鐘樓床下一部
 左、七三。同上層隅
 (昭和十八年八月十一日)
 右圖は床下の構造を示したもので、荷持柱から挿肘木をも應用して願る巧みに土臺を支へてゐる所、天竺様の構造を和様に取入れてある。此點に注意せよ。左圖に於いては椽を支ふる二手先料椽間の一種の束を見せるのが目的。時代は鎌倉末か室町初であらう。



七五。白山神社殿正面部分
 主として向拜柱上科枅及び軒籠桁を示す。
 (山浦氏寄贈引伸寫眞複寫)



七六。白山神社殿向拜軒籠桁二種 (山浦氏寄贈摺本複寫)

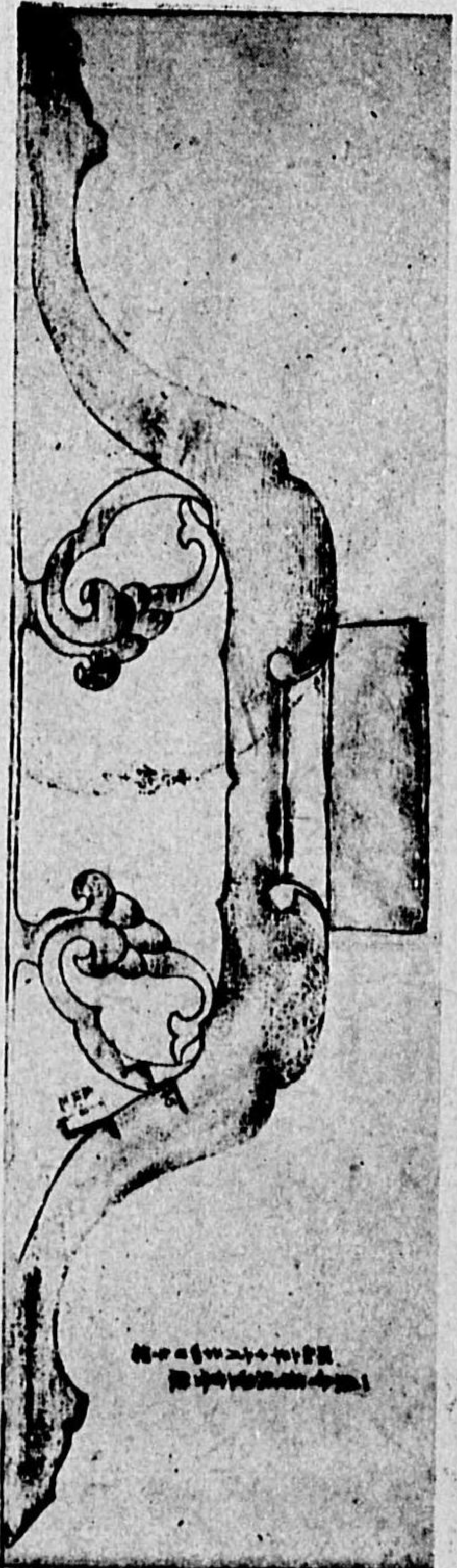


八四。薬師堂内陣張須壇及厨子(御所)
昭和十九年七月二十八日、竹原吉助氏手寫。室町時代の和唐折衷
厨子として、美的價値は高い。

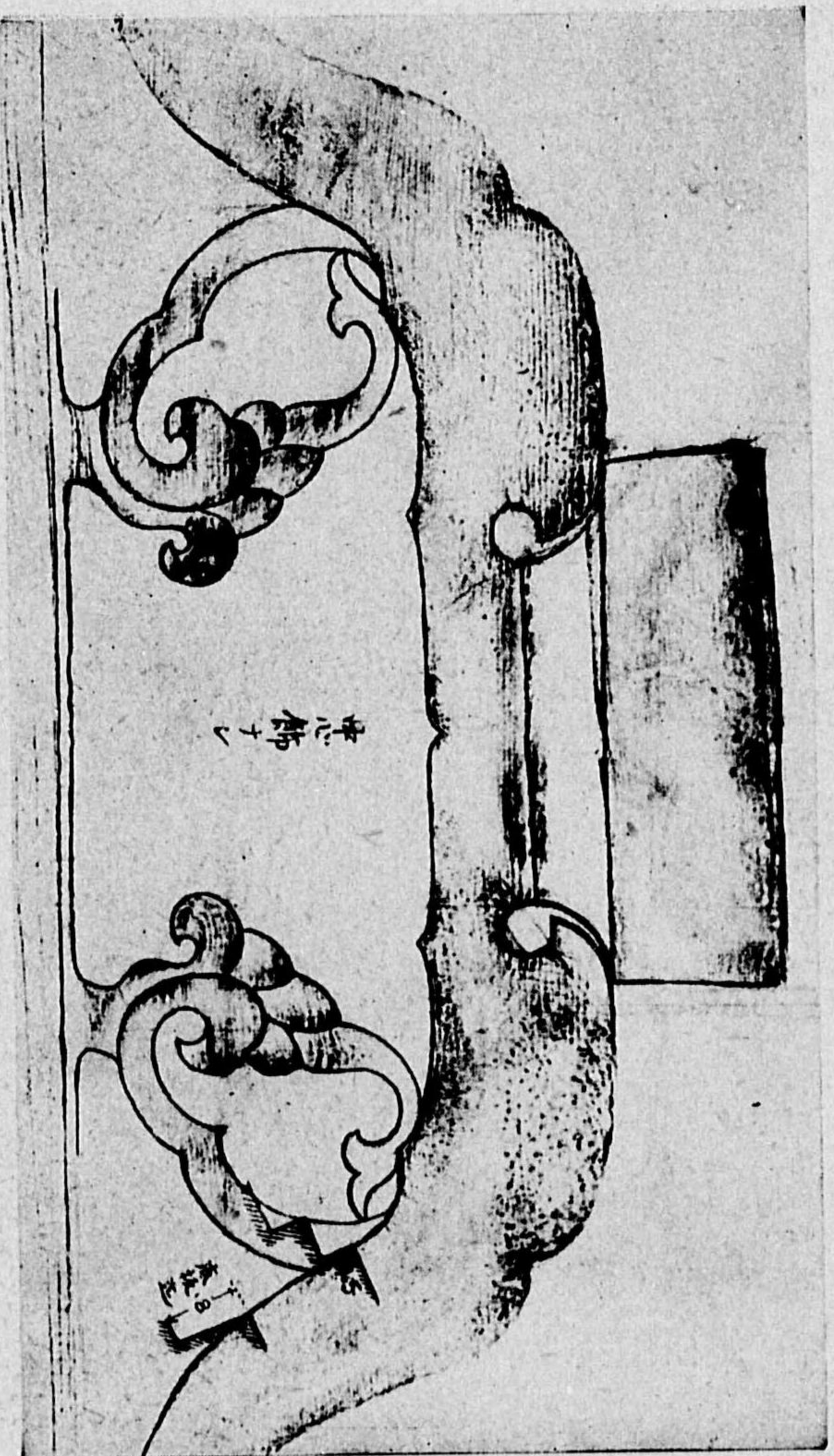


七七。白山神社社殿正面幕 (山浦氏寄贈寫真引伸製版)

左右相稱原始的鎌倉直系の牡丹入幕股。後世の謂はゆる「蟹牡丹」は既に早く此時代(應永二年の棟札があったといふ)から原型が存在した證據となる貴重な標本。



上, NO. 10。一乗寺護法堂東側面基股 (昭和十七年七月七日) 標本 (昭和二年十二月二十四日手摺)
下, 八一。同 (上圖物差は曲尺の約一尺(一呎))



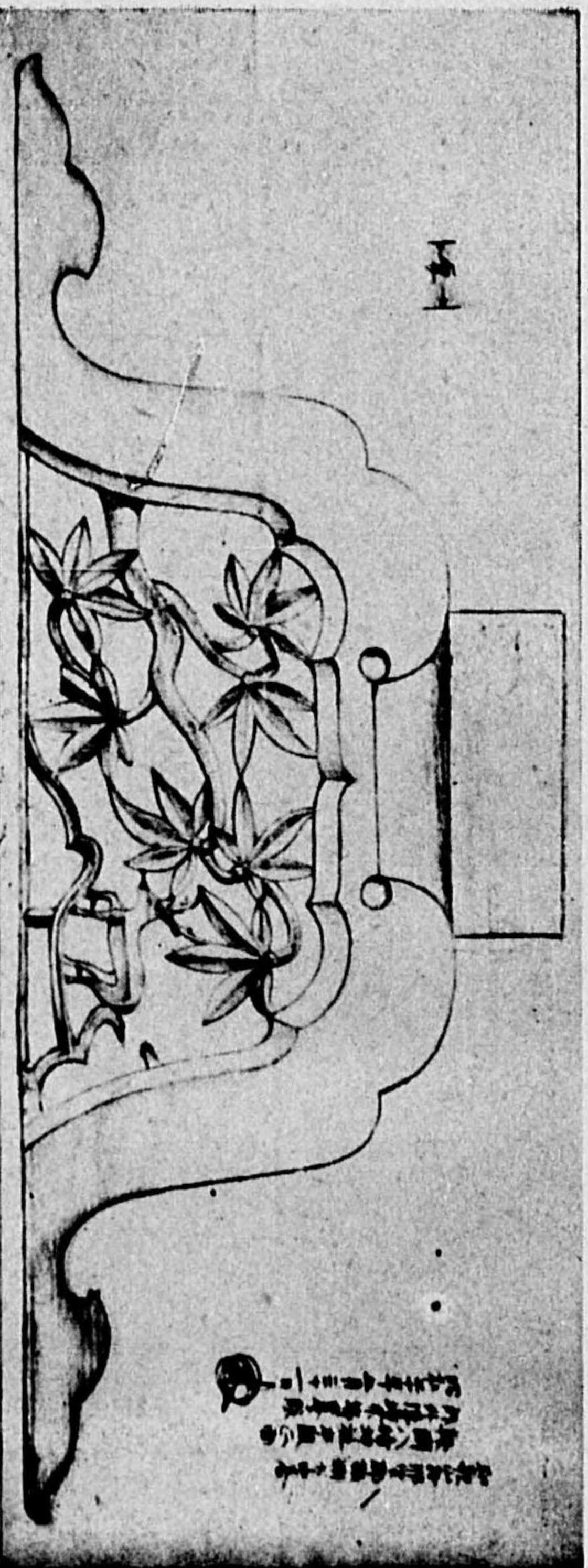
八二。一乗寺護法堂東側面基股脚内彫刻詳細 (昭和二年十二月二十四日手摺)
前頁下圖中央部を擴大したもの。此時迄は確かに脚内彫刻は完備してゐた事は明らかである。



八五。八幡神社本殿昇勾欄寶珠柱(額淵)

(昭和十九年十月二日・竹原吉助氏)

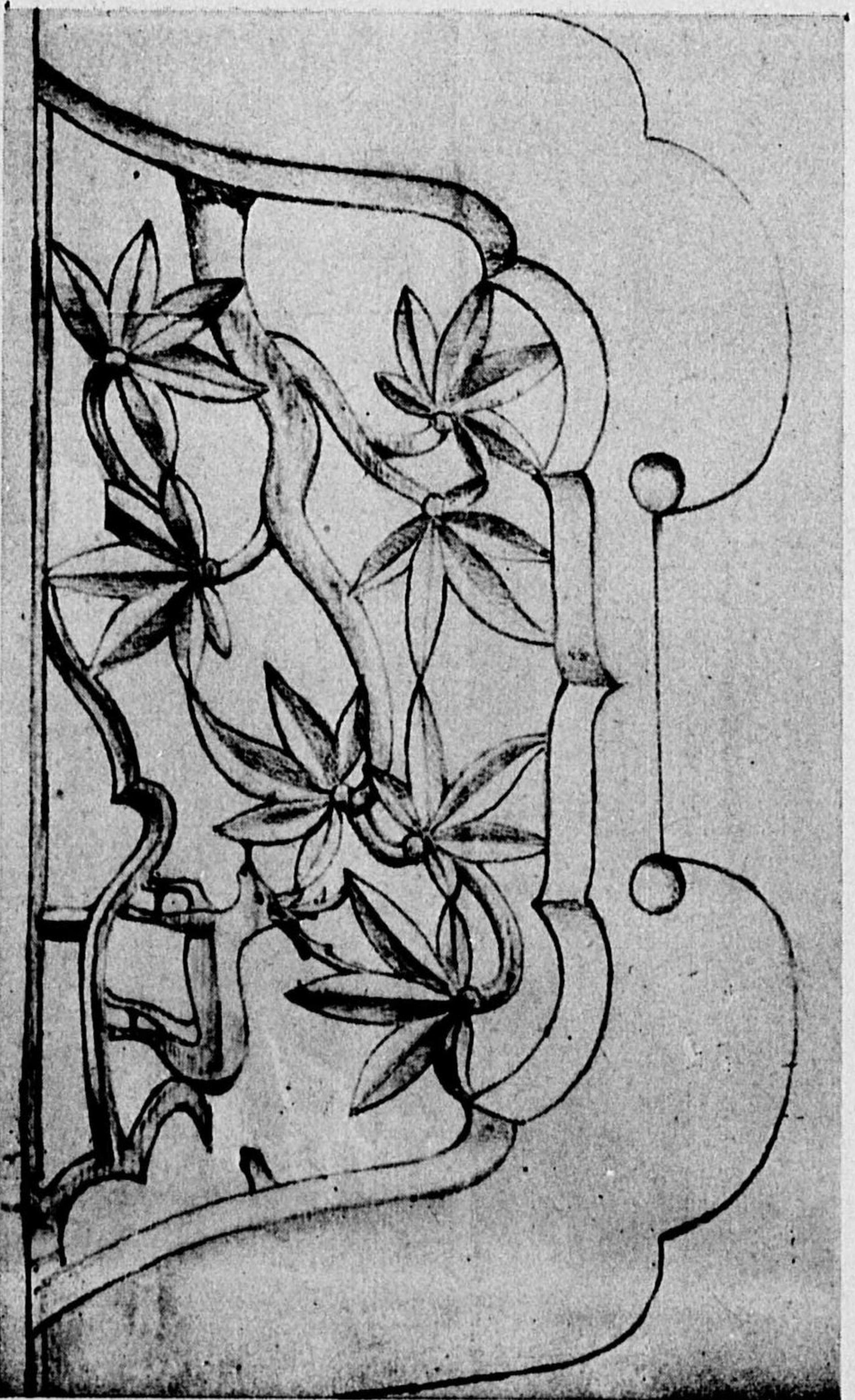
室町時代のものとしては遙に古式を帯び、非常によくできてゐると思ふ。殊に胴に二節ある事と、下方「篠」の下に小圓文が一・二・一・二……の順に吹寄せに打込んである事と、「玉臺」の「玉縁」と「篠」とが細い事と、「玉」の形と「柱」の膨みと、つまりどこ迄も申分のない形をしてゐる。これならどこへ出しても第一流で通り、決して引けはとるまい。一般に此社殿の彫刻は、本文中にも書いたが、餘程腕がきいた人の作と見え、隨所獨創的の手法と意匠とがでてゐる。



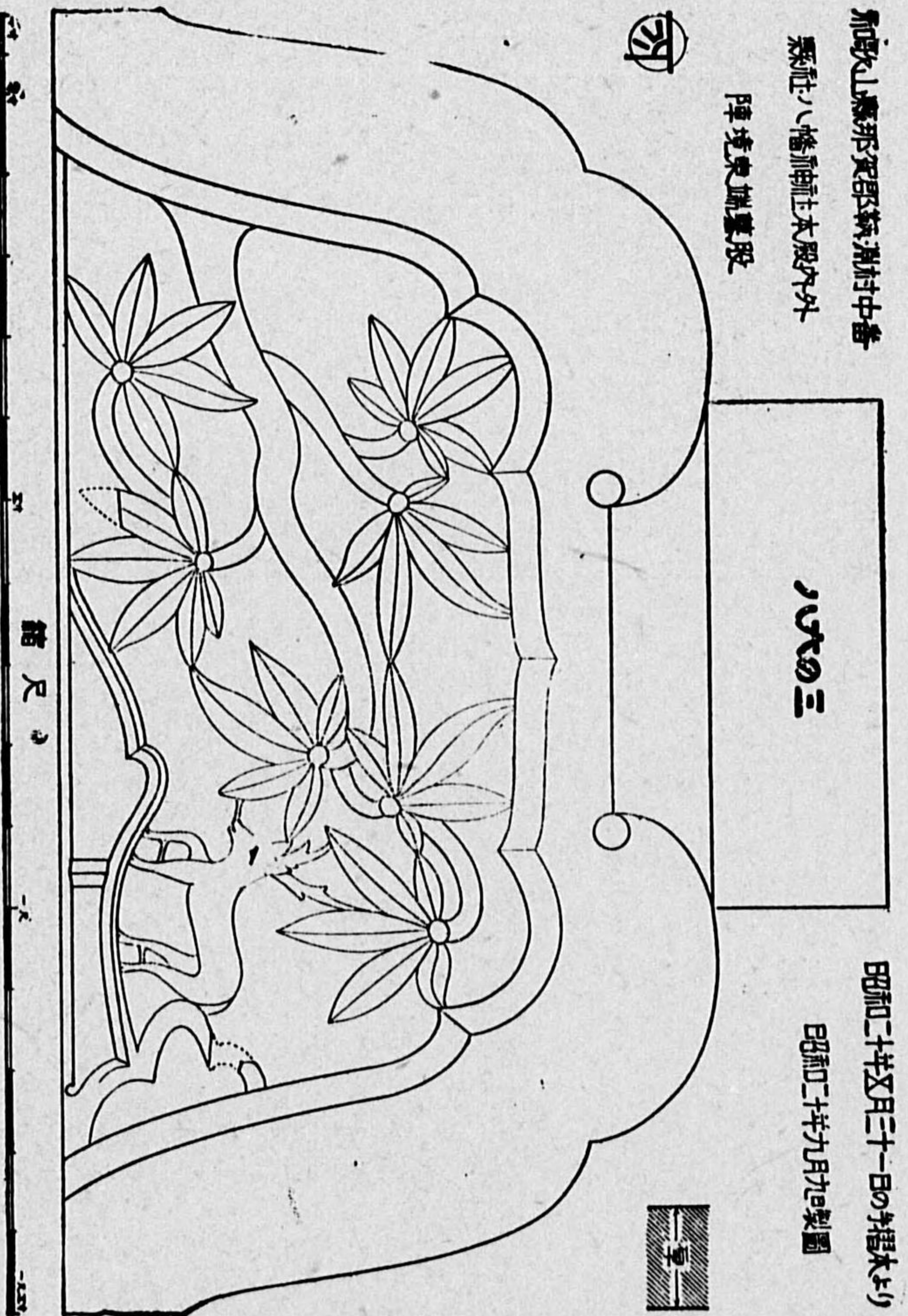
八六の一。八幡神社(額淵)本殿葦段の一(楓樹に鹿)。 (昭和二十年五月三十一日手摺)

「楓樹に鹿」の彫刻したものであるが、從來私が見た最古の例である。殆んど破損した部分がないのは幸ひである。鹿は何の上になつてゐるのかよく判らない。右端の小破してゐるのは霞かも知れないが、足の下のはさうではあるまい。とにかく鹿は非常に小さく、ざつと楓樹の葉位だから面白い。其楓葉の刻み方は、土佐一の宮なる土佐神社本殿の夫とよく似てゐるのは注意すべきである。併し鹿は遙に大きい。大阪四天王寺經藏内部のは、鹿が非常に大きかつたが、

惜しい事に三月十四日の兵火に焼亡した。



八六の二。八幡神社(新潟)本殿葦股脚内彫刻「楓樹に鹿」詳細



新潟県新潟郡新井町中巻

栗原社への権前社本殿内外

障子奥端葦股

八六の三

昭和二十一年三月三十一日の測量より

昭和二十一年九月の製圖





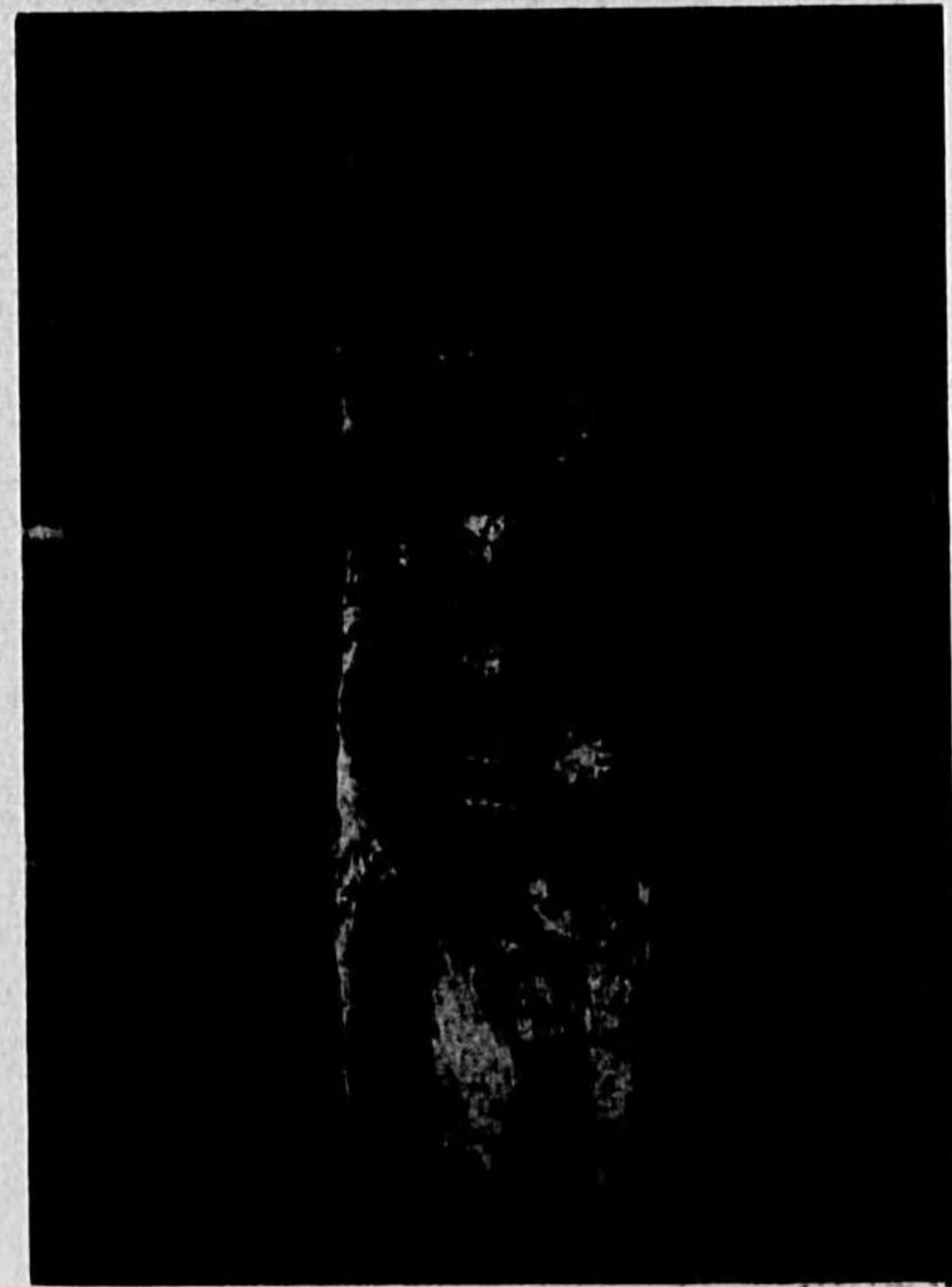
(前頁より) 者は打田驛から五六町、歩いて十分餘りのところだから、参拜には至極便利である。前者に比べると後者の方が少し古いらし

いから、一方は他の影響を受けたと見るべきであらう。

肘木と見ても、木鼻と見ても、何れでもよろしいが、丸彫だから側面からみた時の形も角張つてゐないから、甚だ見よらしい。裏面

には頭の部分を浪と浪頭とで隠し、水中活動の

有様をよく現はしてゐる。

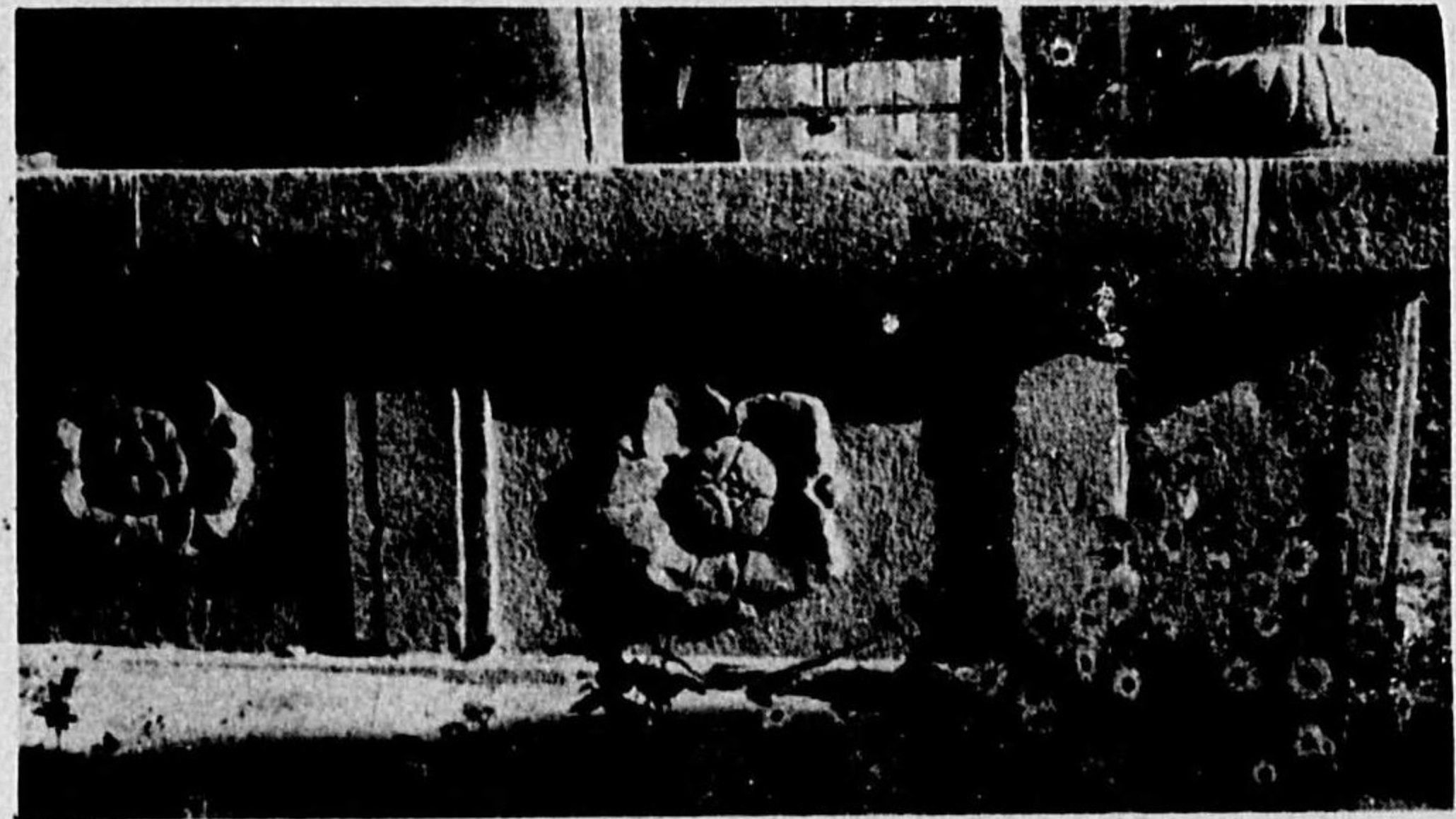


此頁上、八七。中之宮神社向拜木鼻 正面。

此頁下、八八。同 側面。

次頁、八九。羊神社向拜木鼻 正面。

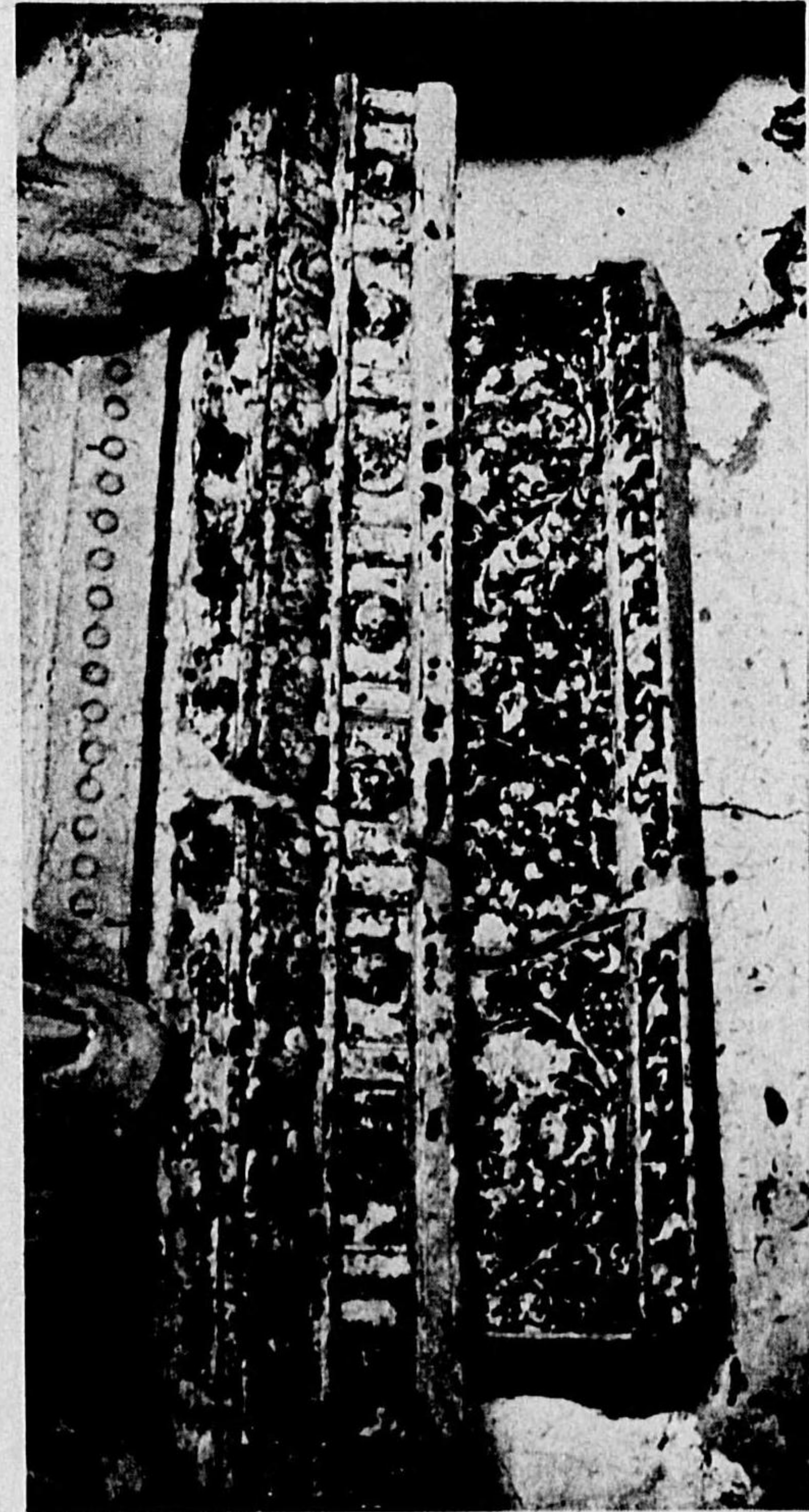
(以上三種、昭和二十年四月二十二日・竹原吉助氏
中之宮神社も羊神社も共に和歌山縣那賀郡田中村に
あり、相距る事約十町位であつたと思ふ。前(次頁へ)



上、九一。通度寺大雄殿基壇部分
(昭和十三年三月二十二日)

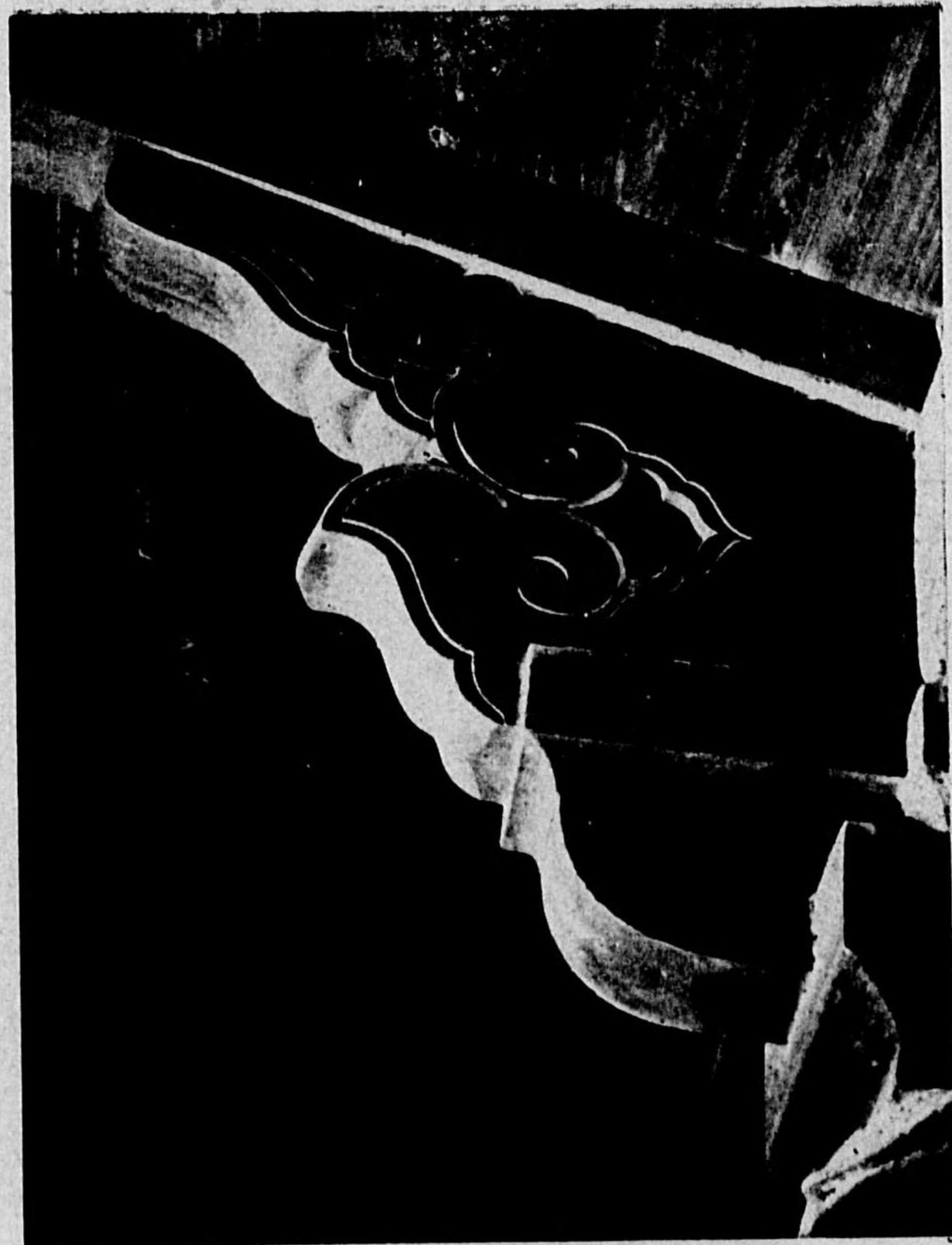
下、九二。通度寺大雄殿基壇一部詳細
(昭和六年九月二十二日)

大雄殿は、内地の寺院でいふなら本堂だから、上は大本山より下は片田舎の小寺に至る迄、どこにでもあるが、通度寺のは古さに於いても、大きさに於いても、立派さに於いても第一流で、内部の構造は勿論、外観も非常に面白い。其基壇の羽目石には、
圖の如く便化花文を陽刻してある。

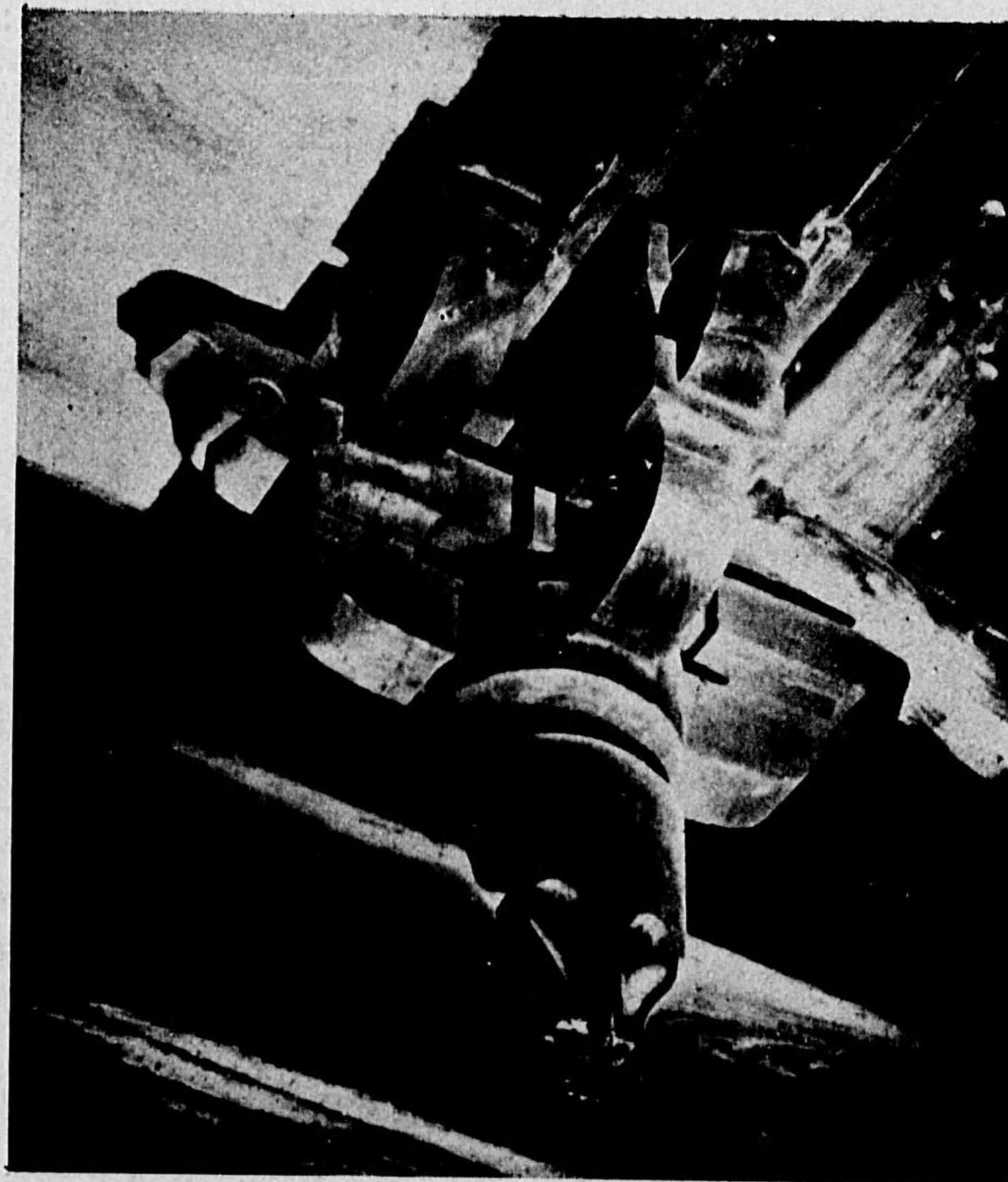


九〇。法隆寺五重塔初重須彌壇西面一部 (昭和三年五月十九日)

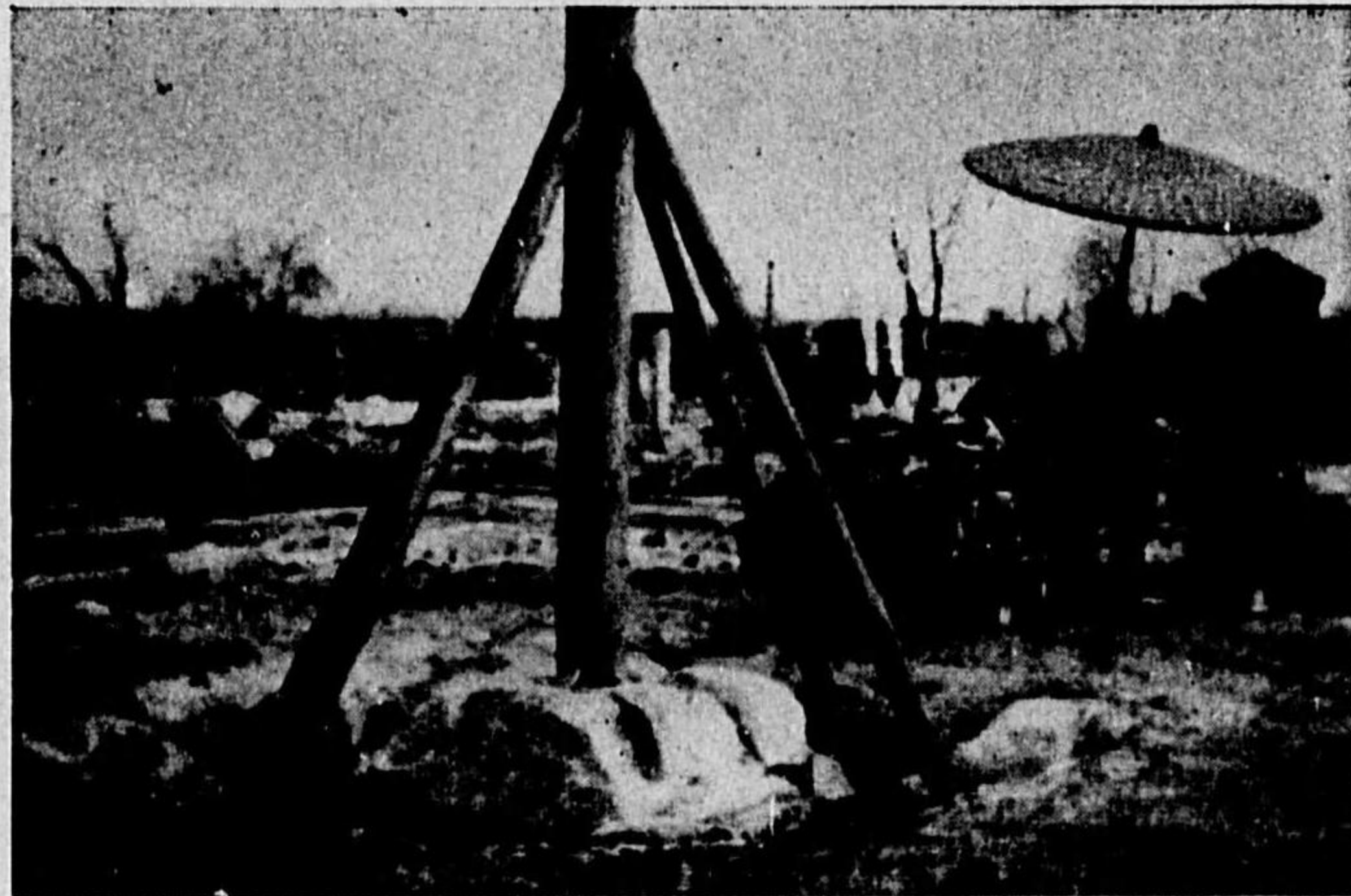
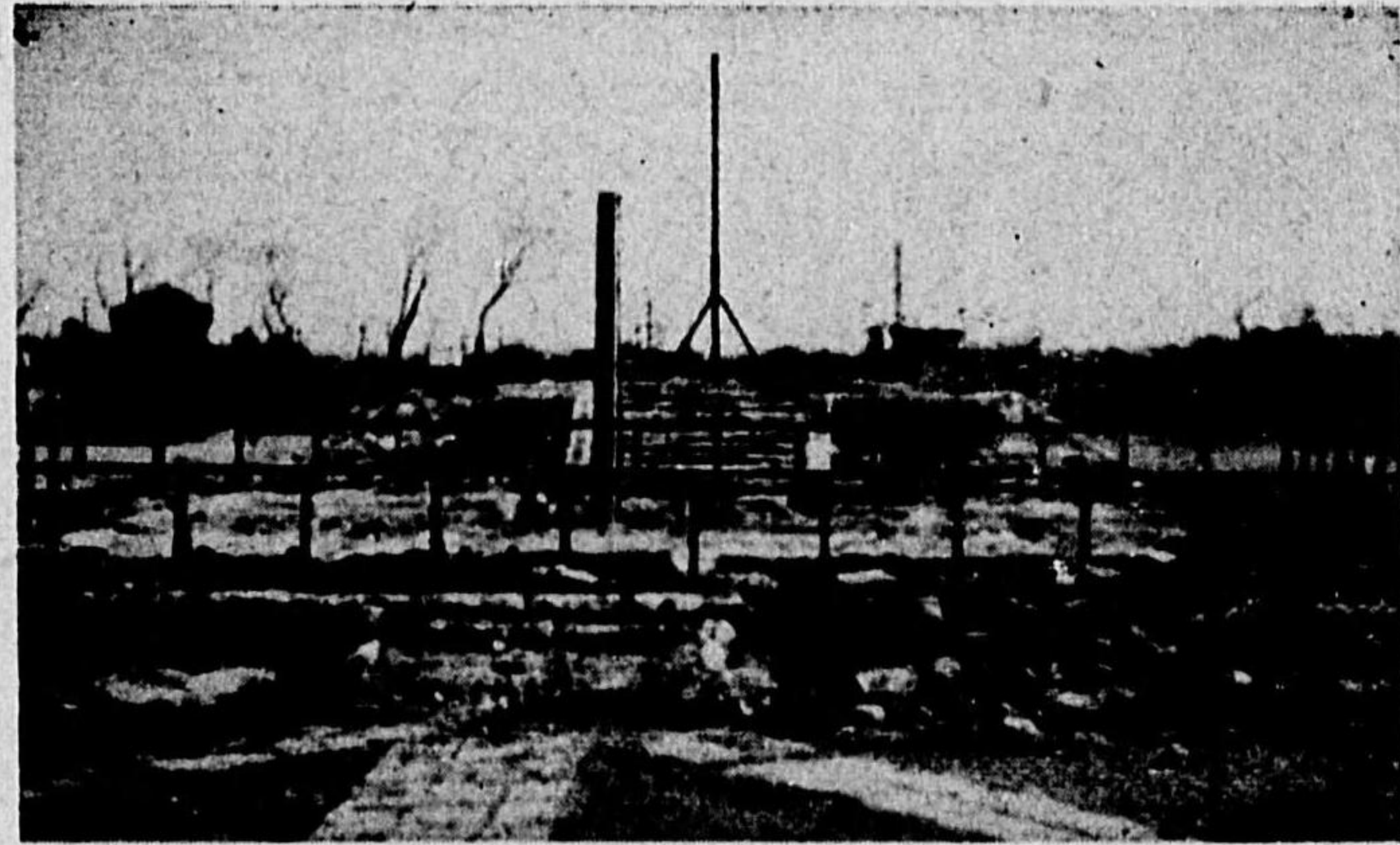
注目すべきは金棺安置の臺で、下方に豊富な蓮花文を有する壇上積の立派なものであるが、上下
框の間、適當の間隔に配置されてゐる束の間の羽目に、裝飾として満開の蓮花が
陽刻してある事である。現在唯一の實例。



(前頁より)あらう。「手挾」も亦同様である。手挾は中央から水平に二つに分ち、上下部を別別にみると、その事が一層明確に看取できる筈である。



此頁，九七。本遠寺釋迦堂内部大瓶束及料拱
 次頁，九八。同 手 挾及料拱
 京都市東福寺三門上層内部に於けるが如き「大瓶束」と其上の圓形「大料」。唐様肘木及び木鼻を觀察する時は、室町時代の様式である事が判るで(次頁へ)



上。-○- 北方より金堂址及び塔址を見る。

下。-○二 塔址に於ける中心礎を西北より見る。

(兩圖共昭和二十年九月十日，牧村源三氏)

上圖前景は金堂址。下圖は塔址に於ける立柱式の光景。

索引

索引といふものを初めて自分でつくつて見たが、どうも甚だ面倒で、見落としが相当にあるらしい。二度繰り返して調べたが、三度試みる根気がなかつたから、結果は恐らく杜撰孟浪で申譯がない。併し例の様にないよりはいいといふ程度で、讀者諸君にがまんをして戴き度い。

例へば215—216, 231—235頁等に記した社寺の名稱等、徒に繁雜の度を増すと思はれるものは、省略したのもある。

(1)

本文の頁は日本數字で入れてあるが、便宜算用數字にして
おいた。肉太文字は圖の番號。但し本文中に刷込みして
ある場合は頁數を括弧に入れて記し、圖の番號は
其直後に書いて置いた。

(2)

口繪の分は、番號の前に「口繪」の二字を入れ、頁數は
省略をして置いた。

(3)

配列は總て發音通りにした。

(4)

配列の順序は五十音順とし、最初に神社、次に佛閣、第
三に美術工藝品、第四に建築の細部、其他とした。朝鮮の
佛寺は我國の夫の次とし、外國の地名・建築
等は更に其次とした。

(5)

著名な神社・寺院の所在地は略したが、然らざるもの又
は同名のものは、檢出の便をはかり、索引中へも成るべく
詳細に記しておいた。但し大字は大概
記載を見合はした。

昭和二十一年六月三十日

ア

淺倉神社(高知縣土佐郡朝倉村).....	387
熱田神宮.....	454
淺草寺(東京都).....	420
阿彌陀寺(飯田市).....	347
安國寺經藏(岐阜縣吉城郡國麻村).....	362
鳳蝶・揚羽・揚羽蝶.....	365, 404, 441, 446, 447, 449, 450
	(450) 93, 94, 95, 96
葦(蘆).....	358, 410
紫陽花(アジサイ).....	358, 396
粟.....	358, 404

イ, 卅

一之宮神社(和歌山縣那賀郡田中村竹房).....	270, 339, 342
	349, 353, 354, 413, 414
一乘寺(兵庫縣加西郡下里村).....	342
一乘寺護法堂墓股(同上).....	265, 80—82
一乘寺辨天堂脇障子欄間彫刻(同上).....	269, (272)83
今八幡神社(山口市).....	392
石燈籠.....	22
一宮(イッキウ)神社(福知山市).....	94, 30
大橋理祐(京都市).....	101
氣比(ケビ)神宮(敦賀市).....	23
八幡神社社務所(和歌山縣有田郡南廣村).....	36
溝谷神社(京都府竹野郡那羅村).....	90, 27—29
和岐神社(京都府綾喜郡棚倉村).....	97

年表増補	105
朝鮮慈惠寺(黃海道信川郡)	138, 40, 41 42の1, (140)42の2
朝鮮の雙獅石燈	107
檜巖寺(京畿道)	123, 35, 36—39
總督府博物館前	115, 32, 34
法住寺(忠清北道)	112, 31, 33
犬	356, 360
猪	356, 360
芋蟲, 蝸	341, 413, 414

ウ

宇太水分神社(ウダミクマリジンジャ)(奈良縣宇陀郡宇太村古市場)	341, 366, 371
魚(浪に)	17, 22, 356, 360
兎	17, 19, 356, 360
牛	17, 22, 356, 360
馬	356, 368
海膽(ウニ)	357, 376
梅	358, 381
瓜	295, 358, 399
ウルキ	312

エ, ズ

永觀堂(京都市)	258
圓覺寺舍利殿	392
圓教寺(書寫山)	278, 385, 402
圓滿寺(和歌山縣有田郡宮原村)	74, 25, 26

繪様肘木(エヤウヒジキ)	224, 226, 227, 233, 235-307, 320, 326, 332, 458
花肘木と	217
一 料(エヤウヒジキヒトツド)	231
二 料(エヤウヒジキフタツド)	332, 333
蝦	345, 346, 357, 373

オ, ヲ

大崎八幡神社(仙臺市)	363, 387
大山祇(オホヤマズミ)神社(愛媛縣)	347
大山田神社(長野縣下伊那郡下條村)	392, 399
大野丘北塔	433
鬼蜻蜒(オニヤンマ)	290, 291, 292, 293
大透翅(オホスカシバ)	540
面高(慈姑)	358, 408
萬年青(オモト)	358, 401

カ, ガ

春日神社(京都府船井郡)	406
風市神社(和歌山縣那賀郡)	316, 318, 319, 334, 344, 373
加太神社(和歌山縣海草郡加太町)	345, 373
「加太神社」は「春日神社」の誤(正誤表参照)	
岩船寺三重塔(京都府)	160, 47—51
藥王寺(和歌山縣有田郡鳥屋城村)	66, 23, 24
訶利帝母堂(觀心寺境内)	395
檜巖寺(朝鮮京畿道)	
紀行	119

雙獅石燈	123, 35—39
浮屠	
無學	123
指空	123
懶翁	124
開仙寺(廢)(朝鮮全南潭陽郡)	116
瓦釘の寶珠(朝鮮の佛寺建築に於ける)	143, 43, 45の2 (152) 46
墓股	
日本建築に於ける墓股變遷の大要	40—58
一乘寺護法堂	256, 80—82
一之宮神社	340
稻荷神社(滋賀縣野洲町)	237, 361, (242) 79
御香宮神社	19
北野神社(京都市)	347
東照宮廻廊(日光)	330
土佐神社(高知縣)	19, 330
中之宮神社(和歌山縣那賀郡田中村打田)	335
八幡神社(和歌山縣那賀郡鞆淵村)	325, 328, 330 86の2—86の3
八幡神社(和歌山縣那賀郡南廣村)	59, 18—21
園城寺金堂(三井寺)	19
金峰山寺本堂(奈良縣吉野郡)	19
四天王寺經藏	330
藥王寺	42, 66, (67)22, (71)23, 24
脚間の動植物	
脊椎動物	356
獸類	356

鳥類	357
爬蟲類	370
魚類	370
節足動物	373
軟體動物	375
棘皮動物	376
空想動物	358
草本	352
木本	352
海馬	358, 380
蟹	345, 357, 373
龜(靈龜)	357, 370
楓	358, 393
柿	358, 38
柏	358, 386
カトマンヅ	426, 427
カルデヤ	420

キ, キ

北野神社(京都市)	347, 362, 364, 370 372, 380, 382, 397, 400
北室院本堂(法隆寺東院裏)	269, 342, 353, 354
教王護國寺(東寺)(京都市)	362, 380, 389, 395
木鼻(一之宮神社)	340
木鼻(唐様)	219, 456, 457
木鼻(天竺様)	218, 457
木葉に芋蟲	341, 413

木葉に毛筆	341, 413
狐	356, 361
麒麟	358, 381
菊	17, 22, 358, 390
擬寶珠(ギバウシ)	312
桐	358, 386
キミーラ (Chimera, Chimaera)	420

ク

久世神社(京都府久世郡久津川村)	391
久麻久神社(愛知縣幡豆郡西尾町)	370
俱利伽羅不動	335, 338
孔雀	357, 367
孔雀蝶	284
慈姑(面高)	358, 408
栗	358, 385

ケ

氣比神宮(敦賀市)	10, 388, 1-9
華蔓草	358, 405
建志保羅 (Conjeeveram, Kanchipuram)	318

コ, コ

高良神社(鞆淵)	326, 330
香臨寺(敦賀市)	27, 10-12
樹ノ本薬師(コノモトヤクシ)(東禪寺本堂)(今治市)	322

五重塔(四天王寺)	435, 475, 476, 478
勾欄親柱(舞節擬寶珠の)	278
小禽(コトリ)	357, 369
鯉	359, 372

サ, サ

相樂神社(京都府相樂郡相樂村)	397
佐牙神社(京都府綴喜郡三山木村)	366, 386
相國寺七重塔(京都市)	438, 482, 483
三寶院(醍醐寺)(京都市)	401, 402
藏王堂(金峰山寺本堂)(奈良縣)	388
三重塔	
岩船寺(ガンセンジ)	160, 47-51
香臨寺(コウリンジ)	27, 10-12
前山寺(ゼンザンジ)	433
靈山寺(リョウセンジ)	193
雜記帳から	257
鶯	357, 365
猿	356, 358
櫻	358, 384
石榴	358, 394
ササゲ	358, 410, 411
茶梅(椿)	358, 390
Sagittaria sagittifolia	408
Sagittaria sagittifolia var. sinensis	408
サンチ大塔東門	420

シ, ジ

十六所神社本殿 (奈良縣生駒郡富雄村) 382, 386, 406
 常宮神社 (福井縣) 2, 24
 白岩丹生神社 (和歌山縣有田郡鳥屋城村) 378, 393
 四天王寺 304, 435, 475, 476, 479, 482, 483
 486, 487, 499, 502, 503, 505, 509, 520, 233, 539, 571
 □繪 1—14, 101, 102
 經 藏 360, 363, 364, 394
 五重塔中間設計案 562, (508)99, (509)100
 五重塔址 504, □繪 9—12
 五重塔圖錄 496
 鐘 樓 505, 532, 534, 539, 542, 549, 550, 551
 554, 567, (552)103, (553)104
 太子殿 549, 562, 566
 復興圖案解說 512
 復興第一案 558, (568, 599)105
 末寺勝鬘院全景 □繪 14
 酬恩庵本堂 (薪の一休寺) 385
 性高院門 (名古屋市) 364
 松生院本堂 (和歌山市) 42
 正面隅木入春日造 340
 松殿山莊 462, 469, 470
 鯨 357, 364
 鯨肘木 301, 302, 309, 315, 316, 336
 鯨肘木五種 197
 白山神社 (長野縣下水内郡岡山村桑名川) 194, 74—77

中之宮神社 (和歌山縣那賀郡田中村) 212, 87, 88
 羊 神 社 (和歌山縣那賀郡田中村) 209, 19
 重美石燈見學談 81
 一 宮 (イッキュウ)神社 (福知山市) 94, 30
 大橋理祐 (京都市) 101
 溝谷神社 (京都府竹野郡彌榮村) 81, 90, 27, 29
 和伎神社 (京都府綴喜郡棚倉村) 97
 慈 惠 寺 (朝鮮黃海道信川郡) 127, 40—42の1, (140)42の2
 信 川 (シンセン) 紀行 (朝鮮黃海道) 127
 須 彌 壇 (和歌山縣伊都郡見好村御所藥師堂) 320, 321
 神 輿
 鞭洲八幡神社 (紀伊) 448
 譽田八幡神社 (河内) 448
 獅 子 356, 358
 鹿 356, 359
 菖 蒲 358, 402
 心臟型曲線 (Cardioid) 590
 Shah-ji-ki-dheri 418, 419

ス, ズ

瑞 巖 寺 (松島) 347
 鈴 蘭 404, 405
 スワヤムブナート大塔 427, 428

セ, ゼ

泉涌寺雪見燈籠 (京都市) 264
 前 山 寺 (長野縣北久佐郡西鹽田村前山) 279, 433

塔504, 505, 513, 523, 532, 534, 541
542, 543, 546, 585, 586, 588, (508)99, (509)100

蟬

油 蟬 (アブラゼミ)529
熊 蟬 (クマゼミ) 522, 529, 530, 540
ツクツクボウシ 540
ヒグラシ 530

ソ, ゾ

添御縣座神社 (ソフノミアガタニマスジンジャ) (奈良縣生駒郡富
雄村三碓 (ミツガラス).....288, 406

雙獅石燈 (朝鮮) 107
檜 巖 寺 (京畿道)123, 35, 36-39
(檜巖寺紀行) 119
總督府博物館前 115, 32, 34
法住寺 (忠清北道)112, 31, 33
(法住寺紀行) 108
象356, 361

タ, タ

建水分神社 (タケミクマリジンジャ)370
多治速比賣神社 (タヂハヤヒメジンジャ) 340, 379, 387, 390, 402
大 德 寺347, 372, 402
大 日 堂 (靱淵) 303, 307, 309, 326, 331
大福光寺 (京都府)407, 408
大 寶 寺 (長野縣) 279
大猷院廟 (日光) 365

多寶塔 430, 514
手 挾 (本遠寺釋迦堂)456, 457, 98
鷹357, 365
鯛357, 372
タウギバウシ312
橋358, 398
蒲 公 英 (タンホボ)358, 409
タキシラ437

チ, チ

地主神社 (京都市北野神社境内) 402
地主神社 (近江葛川) 382
地 藏 堂 (法隆寺西院) 397
中 宮 寺 (奈良縣) 342
長 久 寺 (奈良縣) 403
朝 鮮 鐘 (常宮の)(福井縣) 3
朝鮮の雙獅石燈 107
朝鮮京畿道檜巖寺紀行 119
朝鮮京畿道傳燈寺 143, 43, 44
朝鮮黃海道信川紀行 127
朝鮮黃海道慈惠寺石燈 127, 40, 41
42の2, (140)42の2
朝鮮忠清北道法住寺紀行 108
朝鮮の佛寺建築に於ける瓦釘の寶珠 143, 43-45の2, (152)46

ツ, ツ

通 度 寺 (朝鮮慶尙南道) 143, 434, 437, 91, 92

厨子(薬師堂)(和歌山縣伊都郡見好村) 320, 322, 84
 木菟(ツク) 357, 366
 鶴 357, 364
 椿(茶椏(サザンカ)) 358, 390
 敦賀紀行 1

テ, デ

天満神社(敦賀市) 9
 傳燈寺(朝鮮京畿道) 43, 44
 天主閣
 名古屋城 454
 大阪城 487
 天竺様木鼻 218
 傳香寺本堂花肘木(奈良市) (232)78
 天王寺屋五兵衛 462, 466
 蝶(鳳蝶, 揚羽, 揚羽蝶) 357, 371, 93—96
 DELHI 418, 419, 422

ト, ド

土佐神社(高知縣) 19, 328, 330, 360, 362
 土用殿 455
 東照宮(日光) 330, 347, 355, 360, 361, 364,
 372, 330, 384, 389, 396, 397, 411
 東禪寺本堂(樹ノ本(コノモト)薬師) 323
 東大寺(奈良)
 東塔及西塔 438
 鐘樓 13

遠侍(京都市二條城二の丸御殿) 452
 特殊花肘木 235
 鞆淵(和歌山縣那賀郡鞆淵村) 305, 309, 310,
 314, 324, 331
 鞆淵八幡神社神輿 448
 虎 356, 358

ナ

中之宮神社(和歌山縣那賀郡田中村) 315, 334, 336
 七寺(ナナツテラ)(名古屋市) 454
 流造 12, 13
 梨 358, 389
 茄子 295, 411

ニ

錦織神社(大阪府南河内郡富田林町) 349, 352, 353, 354, 387, 393
 若王寺神社(京都市) 264
 西本願寺(京都市) 398
 二條城二の丸御殿唐門 441

ヌ

鶴 420

ネ

猫 356, 362
 鼠 356, 360
 ネパール國 426, 428, 474

ホ, ボ

豊國神社 (京都市)..... 387
 法音寺 (和歌山縣有田郡岩倉村)..... 42
 法勝寺八角九重塔 (京都市・廢)..... 438
 法起寺..... 433
 法隆寺..... 433, 90
 法輪寺..... 433
 本願寺 (京都市)..... 347
 本興寺 (尼崎市)..... 376
 本遠寺 (ホンノシジ)(名古屋市)..... 453, 97, 98
 法住寺天王門 (朝鮮, 忠清北道)..... 143, 430, 31, 33
 梵魚寺大雄殿 (朝鮮, 慶尙南道)..... 143
 鳳凰..... 358, 381
 牡丹..... 358, 392
 ボドナート大塔..... 427, 428, 429

マ

眞桑瓜..... 400

ミ

三上神社 (滋賀縣)..... 406
 水度神社 (京都府久世郡寺田村)..... 408
 溝谷神社 (京都府)..... 90, 27—29
 妙心寺 (京都市)..... 378, 384
 彌勤寺 (兵庫縣飾磨郡菅野村寺)..... 370
 水葵..... 358, 409

ム

室生寺金堂..... 83
 棟札
 大日堂 (頼淵)..... 309
 八幡神社 (廣)..... 46
 藥王寺本堂 (和歌山縣有田郡鳥屋城村)..... 63, 69

モ

木葉 (に芋虫)..... 341, 413
 毛筆, 木葉に毛筆..... 341, 343, 349
 350, 351, 353, 354
 桃..... 358, 387
 モヘンジョ・ダロ..... 420

ヤ

八阪神社 (山口市)..... 387, 400
 藥師寺金堂 (奈良)..... 347
 藥師堂 (和歌山縣有田郡岩倉村)..... 42
 藥師堂 (和歌山縣伊都郡見好村)..... 306, 320, 84
 藥王寺本堂 (和歌山縣有田郡鳥屋城村)
 42, 66, (67)22, (71)23, 24
 柳..... 358, 385

ユ

雪見燈籠
 泉涌寺 (京都市)..... 264
 懸鑑寺 (京都市)..... 264

ラ

欄 間

- 一乗寺辨天堂脇障子 (兵庫縣加西郡下里村).....269, (272)83
- 一之宮神社本殿正面 (和歌山縣那賀郡田中村)..... 340

リ

- 靈山寺 (奈良縣生駒郡).....169, (172, 173)52,
(186)53, (190, 191)54, (190, 191)55, 56—73
- 本堂..... 175
- 鐘樓..... 191
- 塔婆..... 193
- 栗鼠.....356, 362, 413
- 龍 (飛龍)..... 358, 377
- 龍膽 (リンダウ)..... 358, 405
- 旅行用心集.....420

レ

- 靈鑑寺 (京都市).....264
- 蓮花王院 (三十三間堂).....380
- 連料 (レント).....7, 11—13

ロ

- 六枝掛 (ロタシガケ)..... 27

ワ

- 若宮 (瀬洲八幡).....326
- 梓肘木.....456
- ワカヤマムササビ..... 309

正誤表

此度は誤植を一つもない様にと努力しましたが、駄目でありました。やはりいつもの様に醜體を公衆の前に曝してしまいました。併し餘りにも明白なのは、徒に多くなるばかりですから、省いたのもあります。

頁・行	誤	正
口繪四・五	あひ間を持って	あひ間を待って
本一二・三	殿島神社本股：神社建築中	殿島神社本殿：神社建築中
五六・一一	胸内の彫刻	脚内の彫刻
九〇・六	嫡子重盛	嫡子重盛
一一四・一二	珠。他の部分と	寶珠。他の部分と
一二四・二	高麗辛禰王二年	高麗辛禰王二年
一九九・一〇	豊能驛	豊野驛
二五二・四	透彫を入れた	透彫を入れた

二八九・一〇

malaho

二九七・三

(括弧内)一實村

三四五・一二

(括弧内)海草市・加太神社

三七三・八

加太神社

三九三・九

白岩丹生神社本殿

三九九・二

(括弧内)大字除阜

四一一・一〇

河馬

四二二・五

それだら

四二九・二

粒がつくのです

四三五・二

いつ迄っても

四六二・六

此邸宅

五〇六・八

席を得たが

五〇八・四

いては

maraho

(括弧内)一宮村

(括弧内)海草郡・春日神社

春日神社

白岩丹生神社本殿

(括弧内)大字陽阜

海馬

それだから

紐がつくのです

いつ迄たっても

此邸宅

席を得たが

就いては

五一〇・九

等といふ

五四五・三

さうしし又

// . 八

これは毎日で

五五四・一

左右側側に

五七一・五

を知でよこされた

等といふ

さうして又

これは毎日で造

左右側面に

を承知でよこされた

一九八・一一

應永二年の棟札

二〇八・五

應永二年の棟札

二〇九・一

應永二年

應永六年の棟札

應永六年の棟札

應永六年

應永二年といふ報を得たので、左様に思つてゐたが、昭和二十一年七月二十五日、現地を於いて現物を
見たところ、これは應永六年の誤りであつた。棟札に墨書せる年月日は、正に

「應永六年八月十二日」

とあつた。其詳細は例により後日に譲る。

本文第三五三頁から第三五四頁にかけて、建築彫刻のうちに、植物に毛筆一本を添へた六例を掲げ、更に第三四頁第一行に、夫等は三例しか知らないとしたのは「六例」と改めておくとしておいたのを、何れも「七例」としなければならなくなった。

昭和二十一年八月二十九日、和歌山縣海草郡加太町大字加太鎮座の春日神社（慶長元年の棟札あり）へ参拜したところ、其本殿背面中央葦殿内彫刻に、菊か梶か何れかさういつたやうな葉に、毛筆一本が左下から右上に向ひ、葉に巻かれて刻してあった。見にくい所で近づいて十分に見る事ができなかったが、實に偉大なる毛筆で、これで正に七例となつたのである。尙ほ序ながら、本文中に「加太神社」とあるは「春日神社」の誤記で、私は海草郡加太町には、加太神社と春日神社と二社あり、國寶になつてゐるのは春日神社だといふ事を知らなかつたため、誤つたのである。

四



昭和二十一年十月二十日 印刷
 昭和二十一年十一月十日 發行
 「續成蟲樓隨筆」
 定價 六拾五圓

著者 天沼俊一
 發行者 京都市中京區鉄屋町通二條上ル 高桐書院
 代表者 馬場新一
 印刷者 京都市上京區横木町通千本東入 眞美印刷所
 橋本岩太郎
 製本所 京都市上京區榎木町通千本東入 松尾昭榮堂製本所
 京都市中京區鉄屋町通二條上ル

發行所 株式會社 高桐書院
 會員番號A一〇七二
 電話上五三三番
 振替京都二五七八九番
 東京都神田區淡路町二ノ九
 日本出版配給株式會社

配給元

落丁、亂丁の場合は責任以てお取替します

藤原義一著

書院造の研究

A五判 價額 六五圓
本文三三〇頁 圖版 一〇〇頁

日本住宅發展史上に重要な地位を占むる書院造の研究二篇よりなり、總論に於ては現存する書院造關係の遺稿を調査し文獻及諸資料と併せてそれ等の有する各種特色を論巧し各論に於て床及び達棚の研究と書院造木割の研究の二部から成るものにして書院造を構成する建築各部の寸法比例の研究によつてそこに各種法則あるを見出せるものなり。

福山敏男著

平等院圖鑑

A四判 價額 九五圓
本文一〇〇頁 圖版 一二〇頁

平等院鳳凰堂は藤原様式の最高峯のもので有る。本書はこの秀麗にして雄雅なる平等院鳳凰堂を總ゆる角度より探明したるものにして豊富に集められた寫眞により我々の祖先が斯様な高き境地に達した努力と素質の秀でたるに今さらの如く驚歎するるので有る。

家永三郎著

上代倭繪全史

A五判 價額 六八圓
本文五一〇頁 圖版 二五頁

我國の美的意識を背景として藤原時代初頭より始る倭繪の發展を其文獻遺品より闡明せるものにして、我國繪畫の發展方向に於ける性格が解明される。

Handwritten notes in the left margin, including the number '510' at the top and some illegible characters below.

終